
Steins;Gate 0
シュタインズ・ゲート・ゼロ
There is no end though there is a start in space. — Infinity.
It has own power, it ruins, and it goes though there is a start also in the star. — Finite.
Only the person who was wisdom can read the most foolish one from the history.
The fish that lives in the sea doesn't know the world in the land. It also ruins and goes if they have wisdom.
It is funnier that man exceeds the speed of light than fish start living in the land.
It can be said that this is an final ultimatum from the god to the people who can fight.
原作：志倉千代丸／MAGES.
著：浜崎達也
カバーイラスト：huke
本文イラスト：池田靖宏（MAGES.）
亡失流転のソリチュード 上
角川スニーカー文庫



Steins;Gate 0
シュタインズ・ゲート・ゼロ
亡失流転のソリチュード 上
原作：志倉千代丸／MAGES.
著：浜崎達也
カバーイラスト：huke
本文イラスト：池田靖宏（MAGES.）
角川スニーカー文庫


Steins;Gate


緑のうーぱを娘の手に握らせると、まゆりは機体からさがった。
泣きながら。でも、娘のために笑いながら。
「イヤ、行きたくない！
ママといっしょにいる！」


（……似ている？）
目の前の女性に、なぜか一瞬、
牧瀬紅莉栖の面影がかぶったのだ——



牧瀬紅莉栖
別の世界線で、自身とひきかえにまゆりを救った天才少女。
漆原るか
柳林神社の、巫女服が似合う男の娘。
フェイリス・ニャンニャン
女子高生でメイド喫茶を経営。
橋田至
ラボメンたちからは〝ダル〟と呼ばれる凄腕のハッカー。
阿万音由季
まゆりのコスプレ友達で、未来のダルの妻。
椎名かがり
未来で、まゆりが養子としてひきとった少女。
阿万音鈴羽
2036年から訪れたタイムトラベラー。
椎名まゆり
岡部の幼なじみであり、よき理解者。
岡部倫太郎
未来ガジェット研究所のリーダー。
比屋定真帆
脳科学研究所の研究員で、紅莉栖の先輩。
桐生萌郁
編プロのバイト、無口で携帯電話依存症。


『みなさん、
はじめてお目にかかります』
どよめきが起きた。
スクリーンには通訳をしている助手――
比屋定真帆が映っていたからだ。

STEINS;GATE 0-シュタインズ・ゲート ゼロ-

亡失流転のソリチュード 上

原作：志倉千代丸／MAGES.

著：浜崎達也

角川スニーカー文庫

5 2 5 3 0 8 4 6 5 0 2 6 4 1 0 2 7 4 5 3 6 1 8 3 0 9 7 4 5 1 6 3 5 8 7 9 0 7 9 8 5 6 5 2 2 8 9 3 0 5 7 6 5 3 0 8 7 3 8 4 5 2 1 0 2 9 7 3 6 :

1章　背信のワルキューレ　13
2章　零下域のミッシングリンク　37
3章　閉時曲線のエピグラフ・前　119
4章　閉時曲線のエピグラフ・後　230
5章　亡失流転のソリチュード　276
あとがき　378

Illustration:huke　池田靖宏(MAGES.)
Design work:木村デザイン・ラボ

目次

１章　背信のワルキューレ
２章　零下域のミッシングリンク
３章　閉時曲線のエピグラフ・前
４章　閉時曲線のエピグラフ・後
５章　亡失流転のソリチュード
　　　あとがき

太陽は灰色。

囂々（ごうごう）と風が燻（くすぶ）る。黒い雨が冥（くら）い昊（そら）に線をひく。なにかで見た浮世絵（ウキヨエ）みたいな。

雨滴は棘（いばら）となって肌を刺す。

見えない刃が細胞を灼（や）き貫く。汚れた水は毒を溜（た）め循環させながら、土を、海を、衰えさせていった。

街は、ゆっくりと滅びていくだろう。

破局、退廃、衰退――傾いだ高層ビルの崖壁は崩れ、ガレキと、腐れた異臭が谷底の通りを埋めつくしていた。街は活動をやめた。時折、悲鳴じみた風鳴りが大気をふるわせると、けばけばしい色の爆発が起きて、輝く炎が雲の蠢（うごめ）くさまを明々と照らしだす。

ここは世界の病巣。

豊かだった此（こ）の国は。

此所（ココ）に生まれいでた者の命を破壊していく殺戮（さつりく）器官と化してしまった。

あらゆる情報は劣化し毀損していく。ゆっくりと、確実に。ヒトとしても個人としても、生物としての遺伝子も、戸籍に記されたひとりの国民としても。

　壊れていく。

逃れることはできなかった。できるとすれば、3・24テラバイトともいう魂の情報とともに世界から排泄(はいせつ)されるときだけだ。死は肉体からの解放……？　それは救いなのか、許しなのか、罰なのか——与えるべき、求めるべき、応えるべき神は去った。

もし、どこかに、

こんな地獄ではない、青い空、別の未来(いま)があるのならば。

あなたは理想(ソコ)をめざすだろうか。…………

＊

2035／＊＊／＊＊

遠くに——

「UH・60(ロクマル)だ」

ローターの爆音を認めると、阿万音鈴羽(あまねすずは)は標的を見据えた。

ざっと2キロメートル先。濁った流れを堰(せ)きとめた河川敷の上空で、1機の軍用ヘリがホバリングしていた。

――敵の指揮官が負傷し、救助のヘリが来る。

反体制勢力(レジスタンス)である鈴羽のもとに情報がもたらされたのは数十分前のこと。付近で作戦行動中だった鈴羽は、急遽(きゅうきょ)、仲間とともに現場にむかった。

「ふっ」

防塵(ぼうじん)マスクが息苦しい。担いできた重さ数十キログラムの三脚架を降ろすと、床に据える。

廃ビルの屋上。遮蔽物はなく堤防越しに充分な射角がとれる。

同行の仲間が、分解して運んできたパーツを三脚架の上に組んでいく。長いチューブコンテナを発射装置に嵌(は)めてロック、誘導装置、照準器をセット、すると即席の砲台が完成した。

TOW対戦車ミサイル。装備総重量100キログラム以上。戦前の日本では陸自のAH-1S(コブラ)でのみ運用されていたはずだが、いまでは白昼堂々、鈴羽のような未成年の乙女が人力で持ち運ぶ代物だ。

ヘリが河川敷に降下をはじめる。

要救助者を確認したようだ。つまり、標的だ。

鈴羽はTOWの照準器にとりつく。仲間たちは散って、自動小銃を手に、しきりに空をうかがいながら警戒する。

ヘリが着陸し、機体から兵士がバラバラと降りていく。

河川敷の藪から出てきた要救助者は担架に乗せられていた。意識はあるようで、身振りで指示を出しているのがわかった。
鈴羽は小さく歯軋りをした。
――あいつが……。
レジスタンスのあいだでは、鬼よりも憎まれ怖れられていた男だ。反乱分子の鎮圧にあたる政府治安部隊の指揮官で、大量の無人機を投入し無差別殺戮をおこなう作戦の立案者だともいう。
要は、人でなしだ。
だから、あいつを消せば――終わりを確実にひきのばすことはできるだろう。
ヘリが指揮官を回収した。長居は無用だろう。
どこから狙われているか、わからないから。この戦場では――鈴羽はトリガーグリップに手をかけた。
「射ぇ！」
バックブラストが屋上のガレキを吹き飛ばした。
ガスが爆発する衝撃音とともに、砲身であるチューブコンテナからミサイルが射出された。固体推進薬ロケットモーターによって弾体は秒速３００メートル以上に加速、その軌道は照準器と連動しジャイロと圧縮ガスによって有線制御される。誘導用コントロールワイヤーは長さ３７５０メートル。これがＴＯＷの射程であり約21秒で到達する。
この時間が、永遠のように、長い。

「…………ッ、……ッ」
射手である鈴羽は砲架にとりついたまま。
発射時の煙を発見されれば反撃を受けかねない。それでも命中までのあいだ、射手は照準器の中心に標的をとらえつづけミサイルを誘導しなくてはならなかった。無防備な姿をさらしている射手を仲間たちが守っている。
ロケットはフラフラと飛行しつつ標的にむかっていく。
まだか、まだか……まだか…………兵員を回収したＵＨ・60は間もなく上昇をはじめた。

敵が発射音を聞いたときには、ミサイルは標的に達する。

寸前、ミサイルに気づいた敵の兵士が、たしかに鈴羽のほうを見た。
照準器の中心にとらえたヘリの数メートル上を飛行したミサイルは、センサーによって標的を自動探知した直後、直径１２７ミリの爆発成形弾(ＥＦＰ)を２発、下方に炸裂(さくれつ)させた。
対戦車兵器にかかれば、軍用とはいえヘリなど紙同然だ。ＵＨ・60はローターを投げ散らかし、機体は拉(ひしゃ)げ、たちまち河川敷に叩(たた)きつけられた。そして爆発――
「命中、確認」

ハイタッチを交わして撃破に酔っているヒマはない。鈴羽はテキパキと照準器を外した。もどってきた仲間が発射装置のロックをハネあげ、使い捨てのチューブコンテナを外して放る。TOWを再分解すると部品を分担して持った。

あとは脱兎(だっと)のように。

逃げる。廃ビルのエレベーターは使えない。鈴羽たちは非常階段を駆けおりた。

建物から出ると、そこに1台の軽トラックが猛スピードで滑りこんできた。

「スズニャン！　乗るニャ！」

「ルミねえさん」

助手席から顔を出した相手――秋葉留未穂(あきはるみほ)の顔を見て、鈴羽は応じた。

軽トラックに武器を積みこむと、鈴羽は自身も荷台に乗った。

「――分かれて落ちあう。秋葉原で……みんな、無事で」

肯(うなず)きあうと、ほかの仲間たちは別の車に乗って現場を離れた。

軽トラの運転手がアクセルを踏んだ。

３人と重い兵器を積んだ軽トラはイラつくほど遅い。それでも、ガレキと廃車両が放置されたままの都内の移動には、TOYOTAのピックアップトラックよりDAIHATSUの改造軽トラと、このあたりの武装勢力のあいだでは決まっていた。

「100メートル先、左」

助手席の留未穂がナビをする。

ダッシュボードに固定したタブレットにナビ画面が表示された。道路地図データは使いものにならなかった。多くの橋や高架が戦災で落ちて、通れない道ばかりなのだ。

息をつくと、鈴羽は撃墜したヘリのことを考えた。

敵の指揮官はどうなっただろうか。無差別殺戮を実行したクソ野郎は。

日本政府の、日本軍の、日本人が。

かつての首都に攻撃をくわえている。それを日本人として生まれた者が撃墜した。日本人として生まれた鈴羽が救助ヘリを墜とした。

そんなことが、日常。内戦。出口の見つからない。泥沼の。

「…………」

鈴羽は荷台で、つねに空を警戒する。

軽トラは裏道を選んで走った。猛禽（もうきん）の影におびえる臆病な小動物みたいに。

——ビィイイイイッ！

けたたましい警戒音（アラート）が鳴り響いた。

「〝小鬼（グレムリン）〟！　ニャ！」

ナビ画面をたしかめて、留未穂が叫んだ。

「るかにいさん！」

「つかまって」
　ふりまわすから——運転手がステアリングをきった、そのとき、
　路面が爆発した。
　地獄の業火（ヘルファイア）——着弾したミサイルの爆発と余波で車体が激しくふれる。軽トラは、たまらず一方通行の狭い路地につっこんだ。
　鈴羽はビルの隙間に敵の機影をとらえる。
〈グレムリン〉は小型無人機（ドローン）の通称で、機銃や空対地ミサイルで武装している。主力戦車を撃破できる代物だ。
「軽トラ相手に……オーバーキル、ニャ！」
「ッ！」
　鈴羽は荷台の銃座にとりついた。
　ブローニングＭ２、荷台の銃架はＤＩＹだ。前大戦から１００年にわたって使用されてきた重機関銃が空にむけられた。

　ガガガッ　ガガガッ　ガガガッ

事実上の無政府状態となった都心部上空には、昼夜を問わず政府軍の無人機が徘徊していた。多くは人工知能によって自動操縦されて、反体制勢力、民間人を問わず攻撃をくわえていた。

殺しにくる。

東京の空が重いのは。あの雲のあいだを蠢くのが殺意すらない死の予兆だから。

ガガガッ　ガガガッ　ガガガッ…………

斉射が、空を裂き。

12・7ミリ弾が敵の翼端をとらえた。〈グレムリン〉は航空機としては低速だ。挙動を乱した無人機は回避行動にうつった。

やつらの多くは深追いはしてこない。ドブネズミの命と天秤にかけるには、その機体は高価すぎるから──搭載されたAIが、胸くそわるいことに、そう判断しているのだ。

しばらく走ったあと、軽トラは廃ビルの駐車場に乗りいれて停まった。

「どうにか、ふりきったね……」

3人は肯きあう。

それから鈴羽は、空を仰いだ。

鉄骨の束からなる超巨大な質量。
それをへし折った圧倒的な〝チカラ〟と、その痕跡。
天空樹（スカイツリー）。
そんな名前だったという。完成してほどなく戦火にさらされた高さ６３４メートルの電波塔は、度重なる大空襲を経て、幹のなかほどでへし折られた無残な姿をさらしていた。
世界最大の都市圏（メガロポリス）・東京の墓標だ。
物語は、この世界線からはじまる。



——シュタインズ・ゲート（1.048596%）のために。

1章　背信のワルキューレ

STEINS;GATE 0

1

2032／＊＊／＊＊

202＊年、第＊次東京大空襲。

椎名（しいな）かがり、と名づけられることになる少女の経歴は、その誕生から曖昧だ。まだ乳幼児だった彼女は、戦災で両親とはぐれてしまった。身元を証（あか）すものがなかったため、本当の名前も生年月日さえわからない。孤児となった彼女は、運よくストリートチルドレンのグループに拾われ、育てられた。

ストリートチルドレンたちが、なぜ手のかかる赤ん坊を育てたのかはわからない。おなじ孤児としての同情か、あるいは養子として売り飛ばすつもりだったか……いまとなっては判（わか）らないし、もちろん彼女自身はなにも覚えていない。

当時、都市にあふれていた孤児グループは、窃盗、恐喝などを起こす不良分子であり、犯罪予備軍であるばかりか、放置すればスパイやテロリストになりかねなかった。彼ら身寄りのない子供たちを、政府は積極的に保護という名目で逮捕し、収容のための施設が全国に建設された。その実態は孤児狩りであり矯正施設への収監だった。

施設では、徴用された民間人が子供たちの世話をした。戦時中であり職業選択の自由などなかったため、適性テストを受けた者がふりわけられた。

彼女を名づけたのは、担当になった施設の職員だった。

「──かがりちゃん」

養護施設に隣接した治療所は、戦争の被災者であふれた巷（ちまた）の病院とは一線を画したところだった。

清潔なベッド、豪華とはいえないが栄養バランスのとれた食事、充分な医療。政府が孤児のための施設を優遇しているのは、なぜか。さまざまな噂（うわさ）があったが、収容された元ストリートチルドレンたちにとっては楽園のような場所だったはずだ。いつ崩れるかもわからない廃ビルや溝（ドブ）臭いマンホールの蓋の下よりは、はるかに。

「ほんと？　ママ！」

彼女がまゆりママと出会ったのは、この施設だった。

椎名まゆりは養護施設の二等養護官で、彼女を親身になって世話してきた。かがりという名前も、まゆりがつけた。

――こんな時代でも、みんなを照らす篝火であってほしい。

そんな願いからだったという。

「ええ。かがりちゃん。今日から、私とあなたは正式な親子になるのよ」

「かがりの、ほんとのママになるの?」

かがりは興奮した。

「ええ。そう」

「やったぁ!　ママ!」

そのうれしさは言葉にはできない。

名付け親のまゆりが、椎名、という姓をくれる。かがりは、椎名かがりに生まれ変わる。

「こら、くっつかないの。ふふ、かがりちゃんは甘えん坊さんね」

「じゃあ、ここから出られるんだよね!?　ママといっしょに暮らせるんだよね!?」

「………」まゆりは、そこで少しためらった。「ごめんね。かがりちゃんには、もう少し治療が必要みたいなの」

「――そういうことなんだ、カガリちゃん」

「あ、センセイ」

かがりは声にふりかえった。
　看護師たちをひき連れて現れたのは、治療所のかかりつけの老医師だった。
「あと半年もすれば治療は終わるからね。それまでガマンするんだよ」
「あの……半年も、ですか?」まゆりが老医師にたしかめた。「この前のお話では、あと2週間くらいと」
「昨日の診断でわかったことなんだが、カガリちゃんは、まだ怖い夢を見るらしい」
　老医師が答えた。
「そうなの?　かがりちゃん」
「そ……そんなことないもんっ!　もう怖い夢なんて見ないよ!　楽しい夢ばっかりだよ、楽しい楽しい!」
　かがりはベッドの上で空元気を出してみせる。
「うーん、カガリちゃん、嘘(うそ)はよくないよ。それでは治療はもっと長びいてしまう」
「あう……」
「夜中に怖い夢にうなされて起きることがあると、昨日、先生に話してくれたよね?」
「うん」
「……そうなの」
　まゆりの前では、かがりはいつも元気だった。でも、まゆりが勤務を終えて帰宅したあと、かがりはひとりで寂しい思いをして怖い夢を見ている。

かがりは、そのことを老医師には打ちあけていたようだ。まゆりが母親代わりであれば、この老医師は、かがりにとっては父親のような存在なのかもしれない。
「空襲で子供が受けた心的外傷は、大人の比ではないからね。この子の脳内に、空爆の記憶が恐怖として残っている証拠だろう。きちんと治療しておかなければ、あとでとりかえしがつかなくなる」
大空襲のとき、かがりはまだ乳幼児だった。実の父母のこと自体は記憶にないだろう。でも、この施設にいる子供たちはみな、物心ついてからずっと戦争のなかで生きてきた。
「そうですね……」
「というわけで、カガリちゃんの治療をつづけてもよろしいかね、お母さん？」
「あ、はいっ……かがりちゃん、わるい病気をやっつけようね」
母としての自覚を新たにしたまゆりは、かがり――娘の頭をなでた。
それだけで、かがりは安心できた。
「わかった……ママ」
「うん、いい子だ」老医師は肯いた。「なに、治療といっても痛いことをするわけじゃない。施設を出て暮らすためにも、必要なプログラムをこなさないと」
「ぷろぐらむ……？」
「あの、教授……それは？」

「実習……課外授業みたいなものですよ、お母さん」老医師は笑った。「この施設は楽園のように安全な場所だ。でも、これから外の世界で生きていくためには、様々な……社会生活に慣れさせせなければ。ほかの子たちといっしょに遠足に行ったりもしようか」
「えんそく？」
「ベントーを持ってね。カガリちゃんには、ママだけじゃない……たくさんのトモダチがいるんだよ」
老医師についていた看護師が、かがりを促した。いつもの検査と学習の時間だ。
二等養護官の仕事は子供たちの衣食の世話だ。学習と治療についてはかかわることは許されないし、その内容もよくわからない。
「じゃあ、またあとでね……かがりちゃん」
「ママ」
まゆりの服をつかんでいたかがりの小さな手を、老医師がそっとつかんで、ひいた。

＊

かがりが連れていかれたのは施設の学習室だった。
まっ白なカバーのついたリクライニングシート。そこに置かれたヘッドセットは横にある大きな機器に接続されている。

看護師の助けを受けながら、かがりはヘッドセットをつけるとシートに身を沈めた。
リラックス。そして耳を傾ける。

聞こえる。
いつもの声だ。

——キミはママを守るんだ。

その声は、いつごろから聞こえはじめたのだったか。
たぶん物心ついたときには、すでに。迷ったり悩んだり困ったりしたとき、たいてい、この声は聞こえてくる。声が心に語りかけてくるのだ。

——この世界を守るんだ。そのためにキミは生まれてきた。

かがりにとって、この声が聞こえることがふつうだった。ほかの大人たちには、この声が聞こえないと知って途惑ってしまったくらいだ。
この声はいつも、やさしく、強く、かがりをはげましてくれる。

この声のことを誰かに話しても、幻聴とか病気だと言われてしまうだけだった。けれども、まゆりママは信じてくれた。センセイもだ。

――それは本当にカミサマの声かもしれないね。

だから子供心に、これは本当にカミサマの声なんだ……そう信じるようになった。

だって、カミサマに祈るのは心安らかになるためだから。

「ママを守るんだ。だから治療、がんばるんだ……！」

心のウチなる声に勇気を誓い、かがりは深く祈る。

まゆりママと暮らしたい、という願い。それが、椎名かがりとなった幼い少女の未来であり希望――かけがえのない理想だった。

2

第３次世界大戦がいつからはじまったかについては、歴史学者、当事者となった国家によって見解が分かれるだろう。過去二度の世界大戦がそうであったように。ただ、日本国民にとっては２０１１年こそが、それまでの長い戦後に終わりをもたらした年だったはずだ。

あの秋葉原での〝事変〟――

つづくロシア軍侵攻に端を発した第３次世界大戦において、極東アジアは最大の激戦地となった。

列島は、文字どおり争点だった。

超大国の軍の全面衝突によって、東京は人口が10分の1に減じるまで破壊しつくされた。

核の災禍が、再び、この国を灼(や)いた。

4半世紀にわたった戦乱。ついには世界人口の半分が失われた愚にもつかない戦争は、ロシアの戦略的勝利によって一応の決着を見る。

事情を知り得る者は、こう結論づけた。この第3次世界大戦とは、

——タイムマシン戦争。

で、あったと。

タイムマシン開発をめぐる争点は日本にあった。革新的な『中鉢(なかばち)論文』を入手したロシアは、時間跳躍に関する核心理論の争奪戦の末に、欧州、アメリカなど西側勢力を斥(しりぞ)けて、事実上、唯一の戦勝国となったのだ。

いま、

日本の戦後統治は、国際社会——新しい秩序のもとでおこなわれている。

現代史が示すように、戦勝国の意向のもとで歪(いびつ)に進められた占領政策によって生じるのは、例外のない内戦だった。

分断される国土、民族、家族。

列島は、国産み神話の以前にもどされたかのような混沌（こんとん）にのみこまれた。無政府状態となったかつての首都東京は、支配者たちが糾弾するところのテロリスト——反体制勢力の温床となっていた。

政府は治安部隊をもってテロリストの殲滅（せんめつ）作戦を展開する。

この誰も幸せにならなかった戦争の結果、彼らと、彼らの背後にいる勢力に認められた権益を脅かす危険なもの——ロシアをはじめとする超大国の懸念材料が、未だ、廃墟（はいきょ）の東京に残されていたのだ。

彼らの灰色の勝利を覆しうるもの。

２０３６年、タイムマシンを完成させるべく世界に定められた男・橋田　至（バレル・タイター）。

物語は彼の血と存在を起点として再起動する。

*

抹（ころ）しにくる。

世界が、自分を。だから戦う。誰も守ってはくれないから。

２０３６／８／13

そのときは来た。

「――くっそ！　俺の心臓、もちこたえろッ！　もう少しだけでいい……頼む！」

足をもつれさせながら階段を駆けあがる中年男は、ゼイゼイと息を荒げた。

ここに鬼軍曹がいれば、角材で尻をぶっ叩(たた)かれる場面だ。皮が破れてイスに坐(すわ)れなくなるまで。

「父さん！　格好つけてないで、早く！」

阿万音鈴羽(あまねすずは)は父に声を飛ばした。

あれでも、若いころに比べれば数十キロも痩せてはいた。戦争による栄養状態の悪化という、国家の陰謀による強制ダイエットだったけれど。

もし鈴羽が若いころの父に会ったなら。

節制をしろ！　運動をしろ！　声を大にして躾(しつ)けてやりたい。

「おうっ」

「もう……！　いいかげんその中二病っていうの？　やめなよね、いい歳なんだから」

「すみません」

18歳の娘に叱られて、しおらしくなった40代半ばの男――バレル・タイター、あるいはダル・ザ・スーパーハッカーとも称する。反体制組織〈ワルキューレ〉のリーダーだ。

本名、橋田至。
その名を知る者は仲間内でも多くはない。反体制組織という性格上、メンバーは偽名を用いることも多かった。鈴羽と名字がちがうのは、家庭の事情で。
「学生時代、恥ずかしいからもうやめろよ、と、たしなめていた当の自分が……オカリンの魂を受け継いでいたとは」
至は脇腹をおさえて、うなる。
鈴羽は知っていた。父は彼のことが好きだったことを。喪って、いっそう気づくほど。
岡部倫太郎は２０２５年に死んだ。
親友であり指導者だった岡部倫太郎の死後、橋田至が〈ワルキューレ〉を継いで10年あまり。第３次世界大戦が終戦したとはいえ、日本は泥沼の内戦に嵌まりこんでいた。
外では、爆発音と銃声がつづいていた。
このビルは、かつて秋葉原のランドマークだった。建て替えられて、いまは2代目となる〝ラジ館〟は度重なる空襲で焼かれ、廃墟となっていた。
階段を駆けあがる。
「父さん、治安部隊が万世橋まで来てる」

「……ということは、ここが発見されるのも時間の問題かな」
偽情報も効果なかったか、と至は息をついた。
この廃墟のラジ館には〈ワルキューレ〉の最重要施設が隠匿されていた。組織の存在意義にかかわるものだ。それが政府治安部隊に発見されたとすれば、とりうる行動はふたつにひとつしかない。
施設を跡形もなく破棄する。さもなければ最終計画を実行する。
店舗のバックヤードだった通路から、奥の部屋に入った。
ビルの設備室だ。錆（さ）びついた大きな機械の周囲を、至は探った。
「開けるぞ」
隠し扉。機械はダミーで、がらんどうの内部に螺旋（らせん）階段がつづいている。
「すごい……！　こんなところに扉があったなんて。これなら誰にも見つからないね」
至のあとをついてきた女性が声をあげた。
椎名まゆりは組織の設立メンバーのひとりで、至とは学生時代からのつきあいだ。ゆったりした上着にデニムパンツ、帽子を目深にかぶっている。至よりふたつほど年下のはずだが、外見は若く、とてもそんな年齢には見えなかった。
「なかへ」
狭い柵に体をつっかえさせながら、至が螺旋階段をおりていく。
「……かがりちゃん？」

まゆりが声をあげた。

鈴羽も気づいて、ふりかえる。まゆりについてきていたはずの、もうひとりの仲間の姿が見あたらない。あわててひきかえしかけたとき、外の通路から、子供がおずおずと部屋をのぞきこんできた。

「かがり？　なにやってる！」

鈴羽が強い口調で言うと、かがりはびくっと体をふるわせた。

きれいな少女だ。

と、いうのは――この時代の子供は、放射性物質を大量にふくんだ雨による皮膚炎に体のどこかしらを蝕（むしば）まれているものだが、彼女にはそれがない。

かがりは戦災孤児だ。養護施設に保護された乳幼児の彼女を、養護官だったまゆりが養子としてひきとり、戸籍上の名前が椎名かがりとなってから４年ほどが経っていた。

「どうしたの、かがりちゃん」

まゆりは娘――かがりの手をとった。

「ママ」かがりは声をうわずらせた。「あのね、かがり……落としちゃったみたいなの」

「？」

「携帯電話……！」

かがりが、よく首に提げた携帯端末を弄んでいたのを、鈴羽は思いだした。

養護施設にいたときから持っていたものらしく、とても大切にして誰にもさわらせなかった。もうアラーム時計やカメラとしてしか使えないはずだが……その携帯電話をなくしたことに気づいて、捜しにもどろうとしたようだ。

「まゆねえさん！　急いで！」

「ママの写真も！　ぜんぶ入ってるの！」

思い出のつまった宝物だと、かがりは訴えた。

「かがりちゃん……ケータイは、あとでママが捜しておくから……いまは、ね？　さぁ」

娘の手をしっかりと握り、まゆりは先を急いだ。

＊

螺旋階段をおりると、広い空間に出た。

「ここって……？」

まゆりが驚く。

ビルのフロアの、それなりに広い部分を占めている区画だった。だが扉も窓もない。壁と天井は特殊な防音遮蔽材で覆われていた。

ラジ館の隠し部屋。古参メンバーのまゆりも知らなかった〈ワルキューレ〉の研究施設だ。

研究──それは部屋の一角にすえられた物体(モノ)のためのもの。
「これ、タイムマシンだよね……」
まゆりは、そこでなぜか、思いだしたようにつぶやいた。
「タイムマシン？」
手をつないでいたかがりは、ふぇっ、と声を漏らした。
大きさは軽自動車ほど。パネルを備えた外観は人工衛星のようにも見える。
「きれいだね、ママ」
「……そう、ね」
娘の素直な感想に、まゆりは相槌(あいづち)を打った。
「かがり……危ないから、あんまり近づくな」
椎名親子をさがらせると、鈴羽はタイムマシンに歩みよった。
センサーをのぞきこむ。網膜パターンによる生体認証。かすかに空気が流れる音とともに機体のハッチが開いた。鈴羽はタラップを踏んで機内にあがると、シートに体を固定してインカムを装着、手際よくマニピュレーターを起動する。
鈴羽はタイムマシンに搭乗するのは初めてではない。まさか、ぶっつけ本番ではなかった。パイロットとして選抜された鈴羽は、至と少数の開発チームとともに、すでに数回、ごく短い時間跳躍(ジャンプ)──タイムトラベルを成功させていた。

「これほど超長時の有人ジャンプは初めてだが……技術的にはまったく問題ない。これまでのテストジャンプどおりやればいいからな」
「オーキードーキー」
父に応えると、鈴羽は機器のスイッチを順に入れていった。起動マニュアルは体に覚えこませている。生体認証によって、このタイムマシンは鈴羽にしか操縦できない。
「データによれば、昔のラジ館は、ちょうどこの場所が屋上になってる」
機体のチェックをしながら、至が言った。
先代のラジ館は現在よりも低かった。この隠し部屋のある階が、当時の屋上にあたる。
「――ただし高さが1メートルほどズレてるからな、着地するときに衝撃があると思う」
「了解」
このタイムマシンは、いつにでもいけるが、どこにもいけない。
時間を移動できるが空間は移動できない。残念ながら空を飛んだりはできないのだ。
タイムコードを入力する。行き先は――
『――到着時間を1975年8月13日に設定。当初の予定どおりプランAで』
「了解」
インカムから聞こえた女性の声に、鈴羽は答える。

声の主は施設内の管制ブースにいる。彼女は優秀な科学者で、至をサポートしてタイムマシン開発にあたってきた。

行き先は、まず１９７５年。ターゲットである岡部倫太郎と接触する２０１０年にむかう前に、いくつかの時代で、予定したオペレーションをこなさなくてはならない。

「トラブルが起きても冷静にな。トレーニングを思いだせばいい」

「大丈夫だよ。あたしは父さんのマシンを信じてるから」

「…………！　おお、鈴羽ぁ」

この娘の言葉に、感極まった至が、いきなり唇を突きだしてきた。

親愛の印（チュー）。鈴羽は父の喉元をつかむと強く押しかえした。

「気持ちわるいっ」

「悲しいな……鈴羽は父さんが嫌いかい？」

「父さんがやると、なんか下心があるみたいだから」

可変重力（VGL）システムを起動する。ここからはハッチを閉じなくてはならない。

今生の別れだ。

鈴羽の――〈ワルキューレ〉の最終目的は、タイムトラベルによる過去改変だった。

第３次世界大戦を回避すること。

言い換えれば、このオペレーションに成功しようと失敗しようと、親子が、すべての仲間たちが、このままの姿と記憶を持って再会することはないはずだ。

そして、

それが幸せだと思えるほど、この世界は最悪だった。悲惨すぎた。失いすぎた。

「いくらなんでも娘相手に下心なんてねーよ!」

「最近、母さんに似てきたハスハス……とか言ってたのは、どこの誰?」

〈ワルキューレ〉の戦士だった鈴羽の由季(はは)は、数年前、軍に殺されたのだ。

「冗談を真に受けないでくれたまえ」

至がタイムマシンから離れる。

「それじゃあ……父さん、まゆねえさん――」

ズンッ――

別れの言葉をかき消して、激しい震動がラジ館全体をつき動かした。

まゆりとかがりが小さく悲鳴をあげた。爆発は、つづけて3回。

「屋上からだ! 突入してくるぞ!」

監視システムを確認して、至が叫んだ。

「くそっ！　思ったより早い……！」
屋上から──研究所の場所だけでなく、隠し階段の場所まで漏れたのか。なぜ？　鈴羽は立ちあがると拳銃を抜いた。
だが、至に押しとどめられる。
「ダメだ！　さっさと跳べ！」
「でもっ！　父さんたちが……」
「いい！　早く行け、鈴羽！」
「そんなっ！　だって！」
治安部隊は女子供だろうと容赦なく排除するだろう。迫ってくるのは死の足音だ。
「まゆ氏！　かがりちゃんを」至が声をあげた。「このマシンには、もうひとり乗れる！」
この至の言葉に、鈴羽は父の意図を察した。
タイムマシンの予備シート。それは本来、岡部倫太郎を乗せるための席だった。
『──鈴羽、かがりを乗せて』
インカムの声が告げた。
過去に、ふたりの人員を送ることができれば……　行動力は倍増して、作戦の成功率はあがるだろう。
予備シートは人間という、もっとも重要な部品のスペアを乗せる場所にもなる。

——可能なかぎりタイムパラドックスを避けるために、パイロットは２０１０年以前には存在しない人間でなくてはならない。

パイロットの選考の際に、インカムのむこうの彼女が言ったことだった。

至とまゆりが、かがりを抱きあげて機体に押しこむ。鈴羽は、かがりを受けとめると予備シートに坐らせて、酸素マスクを口に装着させた。

「スズちゃんっ！　かがりをお願い！」

「わかった……！」

過去の自分と会ってしまうリスクを避けられるのは、鈴羽以外では10歳のかがりだけだ。

このオペレーションが成功すれば、過去改変によって、アトラクタフィールド理論に基づき世界は再構成されるだろう。

戦争は起きず、つまり「戦災孤児の椎名かがり」という可能性も存在しなくなる。だから実のところ、救うという意味では、いまここでかがりを過去に脱出させたとして、たいした意味はない。それでも母親は、どんな犠牲を払ってでも子を逃がしたいと願うのだ。

由季（はは）が、そうだったから。

「ママ……？」

なにが起きようとしているのか、やっと察したかがりが機外の母に呼びかける。

「大丈夫だよ、かがりちゃん」

「や……やだ！　やだよ！　イヤ！」
「スズちゃんがいっしょだから、ね？」
「ダメ！　ママもいっしょじゃなきゃダメ！」
涙まじりに。自立心が芽生えるには、かがりは、まだ少しだけ幼すぎた。
「過去へ行けば昔のママだっているよ……？　いまより、ずーっと若くて、かがりちゃん、ビックリするだろうなぁ」
まゆりは彼女の愛する娘に、それを手わたした。
マスコット付きのキーホルダー。丸い体に羽が生えた戦前のアニメキャラクターだ。鮮やかな緑色をしていたはずのそれは、古びて色あせてしまっている。
「──ママが、ずっと大切にしてきた〝うーぱ〟のキーホルダーだよ。かがりちゃんにあげる。大事にしてね」
緑のうーぱを娘の手に握らせると、まゆりは機体からさがった。
泣きながら。でも、娘のために笑いながら。
「イヤ、行きたくない！　ママといっしょにいる！」
かがりは聞きわけなく、暴れて、ベルトで固定されたシートから抜けだそうとした。
「ダメ！」
鋭い声に、かがりはビクッとした。
まゆりが、ここまで厳しい声を発したのは鈴羽も記憶になかった。

「──かがり、おとなしくしてなさい」
　まゆりは娘を諭す。
　そんな母親を見るのは初めてだったのだろう。かがりは、自分がとてもわるいことをしてしまったと感じたようだ。嗚咽（おえつ）しながら体を萎縮させる。
「う……ママ……うう…………」
「過去に行けば、若いときのママがいるから。かがりちゃんが会いたいって言ってた、オカリンだっているから」
「閉めるぞ！」
　至がハッチに手をかける。
「スズちゃん、かがりをお願いね！　あと……オカリンに伝えて！　〝シュタインズゲート〟は、かならずあるって！」
　──〈運命石の扉（シュタインズ・ゲート）〉。
　それこそが掲げた〝理想〟だ。
〈ワルキューレ〉の闘争、阿万音鈴羽の闘争、あらゆる犠牲を払ってでもめざす、その先。
　鈴羽は未来に約束された仲間であったはずだ。いまは亡き伝説のリーダー・若き岡部倫太郎にとって。
「絶対にあきらめるな大バカ野郎……ってな！」
「オーキードーキー！」

鈴羽が父に応え、ハッチは閉ざされた。
もう、二度と会うことはない。
もう、観測することができないから。
『――以上で通信を終了する。もう、あなたたちを観測できない。でも……あなたたちがむかう過去は、この〝いま〟とつながっている。その〝先〟にも』
「ありがとう」鈴羽は応じた。「かならず〝シュタインズゲート〟へ……じゃあね、クリス」
決定的な震動が機体をゆらした。
敵の部隊が、ついに……！
「父さん……大好き」
時の、欠片が舞う。
重力歪曲装置により発生したふたつのミクロ特異点を超高速回転させることでカー・ブラックホールが生成される。それらの回転方向を操作することで時空間移動が可能になる。
「行くよ、かがり……過去へ」

むかいあってシートに坐（すわ）る、ふたり。
ふたりだけが、互いを観測していた。
可変重力システムによって、機体はタイムコードが示す時刻へと転移をはじめる。
ふたりの少女は、その生じる以前にまで〝いま〟の認識を広げるのだ。

あらゆる可能性を宿して。

輝く流砂が機内を充たしたとき。
阿万音鈴羽と椎名かがりは、愛する者のために、彼らと別れ、時を隔て、時を越える。
〈ワルキューレ〉の旗のもと、その死後も彼女たちを動かしつづけた執念の男と出会うために。
世界の観測者・岡部倫太郎の物語をつなぐために。
C203（タイムマシン）は跳んだ。

＊

彼女たちは未だ知らない。

知ってはいたが判(わか)ってはいなかった。タイムマシンが、あらゆる幸いと困苦をも宿していたことを。世界線という神のごとき視座から、運命という気まぐれを受胎させられていたことを。

――カミサマ。

予備シートに身を沈めた椎名かがりは、対話をしていた。
声には出さず、彼女のウチなる声と。
――カミサマ……！　かがり、ちゃんとできたよ！
あの携帯電話は特別なのだ。
あれを使えば、かがりはカミサマと連絡がとれた。自分の居場所を伝えることができた。
ラジ館に〈ワルキューレ〉の研究所があること。最上階の設備室に隠された入り口があること。
そのことをカミサマに伝えたのは、かがりだった。
――正しく、正しく、正しく。
なぜって……タイムマシンは、わるいものだからだ。カミサマが、そう言っていたからだ。
そして待望の天使たちは来た。
カミサマの軍隊が、かがりとまゆりママを助けに来た。

時の、欠片が舞う。

光の奔流に溺れながら、かがりはうーぱのキーホルダーを握りしめた。

――ママ……。

〈ワルキューレ〉に災厄をもたらしたのは、かがりが招いたカミサマの天使。

一方で母親を慕い、案じるかがりの想い――そこに二心はなかった。幼い心に偽りなどあるはずもなかった。

3

2010／11／**

夜、もう遅い。

ひとけのなくなった研究室に、まだ居残っている女性がいた。

『――先輩』

「なぁに」

白衣の女性は声に応じる。

ヴィクトル・コンドリア大学、脳科学研究所。

彼女以外、研究室には誰もいなかった。モニターが点いており、声は、そのスピーカーから聞こえていた。

『忘れ物はありませんか』

「だから、こうしてチェックしているの。教授に任せておいたら、いつも現地であれがない、これがないって大騒ぎだから」

書類やらデータやらを整理しながら、女性は画面に苦笑いをかえした。

『教授とは、いっしょの飛行機じゃないんですね』

「スケジュールがあわなくなって……いくらあの人がコドモみたいっていっても、付き添いは必要ないでしょ？　教授は、日本には何度か行ったことあるし」

カレンダーをたしかめる。

２０１０年11月……いろいろあった今年も、あと1ヶ月あまりだった。

彼女は、明日には機上の人となる。行き先は日本、彼女のルーツとなる極東の国だ。

『日本かぁ……懐かしい』

「そうね、あなたは日本育ちだから」

女性はファイルしたものを荷物につめた。

『日本での講演は、マホが？』

「それは……そうなるわね。まさか、あなたがやるとでも？」

『その線は、ないのかなーっ、と』
茶目っ気（け）を感じさせる口調で声が打診する。
「……ないわ」女性は一寸（ちょっと）考えて答えた。「考えてもみなさい、あなたが秋葉原に現れたら――」
まるで趣味のわるいホラーよ、と。
荷物でふくらんだ、すりきれたボストンバッグを肩にかける。
「じゃあ、行ってくるわね」
『お気をつけて、真帆先輩。おみやげ話、期待していますね』
「あなたも行くのよ。また日本でね……クリス」
モニターに笑いかけると、端末を操作してシステムからログアウトする。モニターの明かりが、ふっと消える。消灯した研究室は暗闇につつまれた。

――Amadeus System

2章　零下域のミッシングリンク

STEINS;GATE 0

2010／11／**

1

羽田空港、国際線ターミナルに比屋定真帆（ひやじょうまほ）は降りたった。

日本。

アメリカ合衆国の市民であり、南米の日系移民の裔である彼女にとっては、ルーツとなる第三の祖国だ。

「へぇ」

とくに意味もなく、感じいって息をつく。

断章　楽園追放のインデックス（1）

タイムトラベルとは。

世界線とは、アトラクタフィールド理論とは。

ふたりの数奇な物語について、ここで頁を割き多くを語ることはない。ただ、ふたりは世界の運命を決定的に左右する因子であり、その観測点だった。

牧瀬紅莉栖（まきせくりす）と岡部倫太郎（おかべりんたろう）。

未来ガジェット8号機『電話レンジ（仮）』。

それが、すべての発端だった。

反体制組織〈ワルキューレ〉の前身である、秋葉原の未来ガジェット研究所——通称〝ラボ〟。その設立メンバーである東京電機大学の学生・岡部倫太郎と橋田至（はしだいたる）が開発した『電話レンジ（仮）』は、偶然にも、過去にメールを送ることができる一種のタイムマシンとして機能した。

『電話レンジ（仮）』とは。

ラボの備品だった電子レンジと携帯電話を接続し、電話回線上でコントロールを可能にしたものだ。使用方法は、まずレンジと接続した携帯電話に電話をかけて、音声ガイダンスに従ってチンする時間（秒）を、たとえば2分なら「#120」と数字を入力することでレンジを遠隔操作できる。あらかじめレンジにかけるものをターンテーブルに載せておけば、帰宅前に電話をかけることで、解凍や温めが終わっているという仕組みだ。なお、それが実用的かどうかを考察する必要はない。

このガラクタ同然の発明品がイレギュラーを起こした。

常温解凍した冷凍からあげが『電話レンジ（仮）』にかけたら冷凍状態にもどってしまったり。かと思えばチンしたバナナが緑色のゲル状態になったり。

決定的な事件は、まさに2010年7月28日に起きた。

至が携帯を『電話レンジ（仮）』に接続してターミナルモードで調整中、予期せぬ放電現象が起こった。そのとき偶然、岡部が至の携帯にメールをした。すると岡部が送信したメールは、至の携帯に残された着信記録によれば5日前に届いていたことになっていたのだ。

メールは過去に送られた。

たったの36バイト。文字数にすると全角6文字×3という情報量だったが、メールは過去に届いていたことになった。

過去に送信されたメール――Dメール。

そして、このとき厄介な問題が生じる。そのメールが7月28日から5日前に遡行して送られたメールだと認識しているのは岡部だけで、至は、そのメールは7月23日に届き、当然、23日に岡部が送ったものだと記憶していた。また至の携帯に着信履歴はあったが、岡部の携帯からは送信履歴が消えていた。

「過去にメールが送られた結果、世界線が変動した」のだ。そして「変動した世界線に沿って前後関係が再構成された」「すべての人間の記憶が改変された」。

記憶が……！

岡部が『電話レンジ（仮）』で過去にDメールを送った結果、生じた影響をすべて反映して世界は再構成された。結果として、それ以前のことを記憶しつづけている岡部にしてみれば「全人類の記憶が書き換えられた」ように錯覚させられることになった。

──岡部倫太郎だけが記憶できる。

世界線を越えて記憶を継続できる岡部の能力を〈リーディングシュタイナー〉という。

そも世界線とは──量子論におけるコペンハーゲン解釈、エヴェレットの多世界解釈に代わるものだ。

世界線とは、因果と論理によって前後関係が構成された一本の矛盾ない時間軸だ。

世界は、この世界線の無数の集まりだという。

世界線が束になったものを世界線収束範囲という。アトラクタフィールドは縒り糸に喩えられた。色のちがう一本一本の細糸（世界線）が、からまって一本の太糸（アトラクタフィールド）になっている。

このように世界線は、可能性としては無数に、重ねあわせの状態で存在する。
細糸から細糸には移動可能であり、仮に『電話レンジ（仮）』などがあれば、過去を改変することで、別の世界線に移動することができるだろう。
ＳＦで散見される多世界解釈、並行世界を想起させられるが、アトラクタフィールド理論によれば同時に存在する世界線はつねにひとつしかない。なんらかのきっかけ――まさに過去にメールを送るなどの干渉によって、細糸Ａから細糸Ａ’に世界が遷移したとき、それまでの細糸Ａでの出来事は「なかったこと」になり、過去改変の程度によって、細糸Ａ’の時間軸における前後関係（つじつま）が自動的に再構成される。
こうして人々の記憶ごと、歴史は上書きされてきた。上書きされたことすら気づかれないまま。
さらに、それぞれの細糸における出来事は、ミクロレベルでは多かれ少なかれ異なるが、より巨視的には、太糸（アトラクタフィールド）は、ある時点において内包する細糸（世界線）すべてをマクロレベルで束ねることがある。これら不可避といってよい重要な節目を世界線の〝収束〟という。たとえば特定の人物の死などだ。
　収束を回避しようとしても、アトラクタフィールドが、それを阻む。
弓を弾けば、弦はふるえるが固定された両端は動かないように。収束は、メールによる過去への警告を用いたり、タイムトラベラーが直接阻止しようとしても容易には回避できないもの、いわゆる運命だ。命にかかわる収束を迎えた人間を待つのは、無限にある細糸Ａ’それぞれにおける過程は異なれど、確実な死だった。

また社会全体に目をむければ、たとえばアトラクタフィールドαにおいては３００人委員会と、その実働機関であるSERN（ヨーロッパ原子核共同研究機関）が全人類を支配するディストピアなる社会が成立する。アトラクタフィールドβにおいては第３次世界大戦が勃発し、数十億人が死亡することになる。いわばアトラクタフィールド理論は、並行世界と決定論の、いいとこどりだ。

ところで……αとかβというのは？

世界線の縒り糸であるアトラクタフィールドもまた、無数に存在するのだ。

太糸から別の太糸へ――アトラクタフィールド間の遷移は、アトラクタフィールド内の遷移よりも、はるかに希（まれ）なことだ。

おおざっぱには、過去にメールを送れば大なり小なりアトラクタフィールド内での世界線移動は発生する。一方、αからβへといったアトラクタフィールド間の遷移には、ものの喩えとして「宇宙に存在する原子の数すらも超えた」演算をおこなわなくてはならない。

それほどのエネルギーを費やさなくては、たとえタイムマシンがあっても収束を回避することはできないのだ。

＊

金属の棺桶（かんおけ）を充たしていた光の粒子が、失せていく。

〝時の欠片〟と呼んでいる。その仄(ほの)かな輝きの脈動がおさまっていくとともに、体を、あらゆる方向から押し潰していた重力(G)が、すうっと抜けていった。

世界は、赤い。

目が充血していた。腕も脚も、鉛をまいたように重い。

パイロット――阿万音鈴羽(あまねすずは)は、戦士としての思力(しりょく)で心を立てなおす。

計器をチェック、マニュアル工程どおりに……半透過式モニターは厖大(ぼうだい)なログを吐きだしている。管制システムが現座標を定めた。

――2036／**／**

もとの時間、もとの場所。

ただし、この窓ひとつない機体のなかで坐っているかぎり、鈴羽は、まだ実験の成功をたしかめることはできなかった。

これはタイムマシン。これは、実験。

『――第*回タイムトラベル実験、終了。お疲れさま』

女性の声がインカム越しに鈴羽に呼びかけた。

タイムマシンから降りてメディカルチェックを済ませると、鈴羽は破れたソファーに腰をおろした。

施設の広さは大きめの倉庫ほど。扉はなく、窓もなく、壁と天井は防音遮蔽材で覆われた密室。

タイムマシンの研究所だ。

偵察衛星やドローンが様々なセンサーを用いて探知を試みたとしても、この〝人類最後の聖地〟を暴くことは困難だろう。〈ワルキューレ〉のメンバーでも、この研究所の存在を知る者は極めてかぎられていた。

「大丈夫？　鈴羽」

やってきた父──橋田至が鈴羽を気づかった。

「平気」

「どっか、つらいとこない？　おなか痛くない？　……はぅあ！　鈴羽、おめめがまっ赤だお」

「前よりマシだよ」

タイムトラベル実験の際には相当の負荷（G）がかかる。乗員にはレッドアウト、あるいはブラックアウトの現象が生じる。はじめてのジャンプのときなど、足元と脳天から体が溶けて、細胞が分解されて、自分が得体の知れないエネルギーの粒になっていくかと思えた。パイロットとしての訓練を受けた者でなくては、この、まだ試作段階のタイムマシンに乗ることさえできないだろう。

「あー……前の実験のときは、うさタンみたくまっ赤だったもんねぇ。で……」

「だから、大丈夫だってば！　二度も言わさないで、父さん」

「そうはいっても心配……！　タイムマシン理論には問題なくても、タイムトラベルが人体と記憶に与える影響は未知数であるわけで」
「跳んだっていったって、ほんの少しだよ。あたしは……ほんの少しだけ未来の父さんを、この目で観測して、もどってきた」
「父さん、なにしてた？」
「うれしそうにカップ麺食べてたよ。実験そっちのけで」
「え？　マジで！　在庫切れてるのに」
　至はゴクリとツバを飲んだ。
「ルミねえさんあたりが差しいれてくれるんじゃないの、じき」
「やたー！　お湯沸かして全裸待機だお」
　物流の途絶えた現在の東京で、カップラーメンは入手困難な嗜好品（しこうひん）だった。
「とにかく」鈴羽は息をついた。「ロシアがタイムマシンで過去改変したことは、まちがいないんだ。あたしが生まれてくるずっと前に、人類はタイムトラベルに成功したっていうのに……！」
　鈴羽は忸怩（じくじ）たる思いだった。
　第３次世界大戦――タイムマシン戦争。
　その過程において、戦勝国となったロシアが、いかなる過去改変をおこなったのかは判然としない。ただ事実として列島は占領された。それは非の打ちどころのない完璧な上陸侵攻作戦だった。海をわたって急

襲したロシア軍によって、東日本は数週間のうちに蹂躙されたのだ。

うまくいくまで何度もタイムマシンで作戦を練りなおし、戦争を実行しなおした――というような信じられない噂もある。戦略シミュレーションゲームでリセットをしまくるように。

実際のところロシアは、何度となくタイムトラベルをくりかえしたのだろう。そして世界を自国にとって望ましい破滅へと導いた。

この糞みたいな世界に。

「ロシアって、WW2では自国民を2000万人死なせて、第3次世界大戦ではその何倍も死なせて、それでも戦争には勝っちゃう国ですし……おそロシア」

「パイロットの命なんか使い捨てにしか考えない国のことは、参考にならない」

そこに白衣の女性がやってきて、ボトルの浄化水を鈴羽に手わたしながら言った。

先ほどの通信の声の主だ。

「ありがと、クリス」

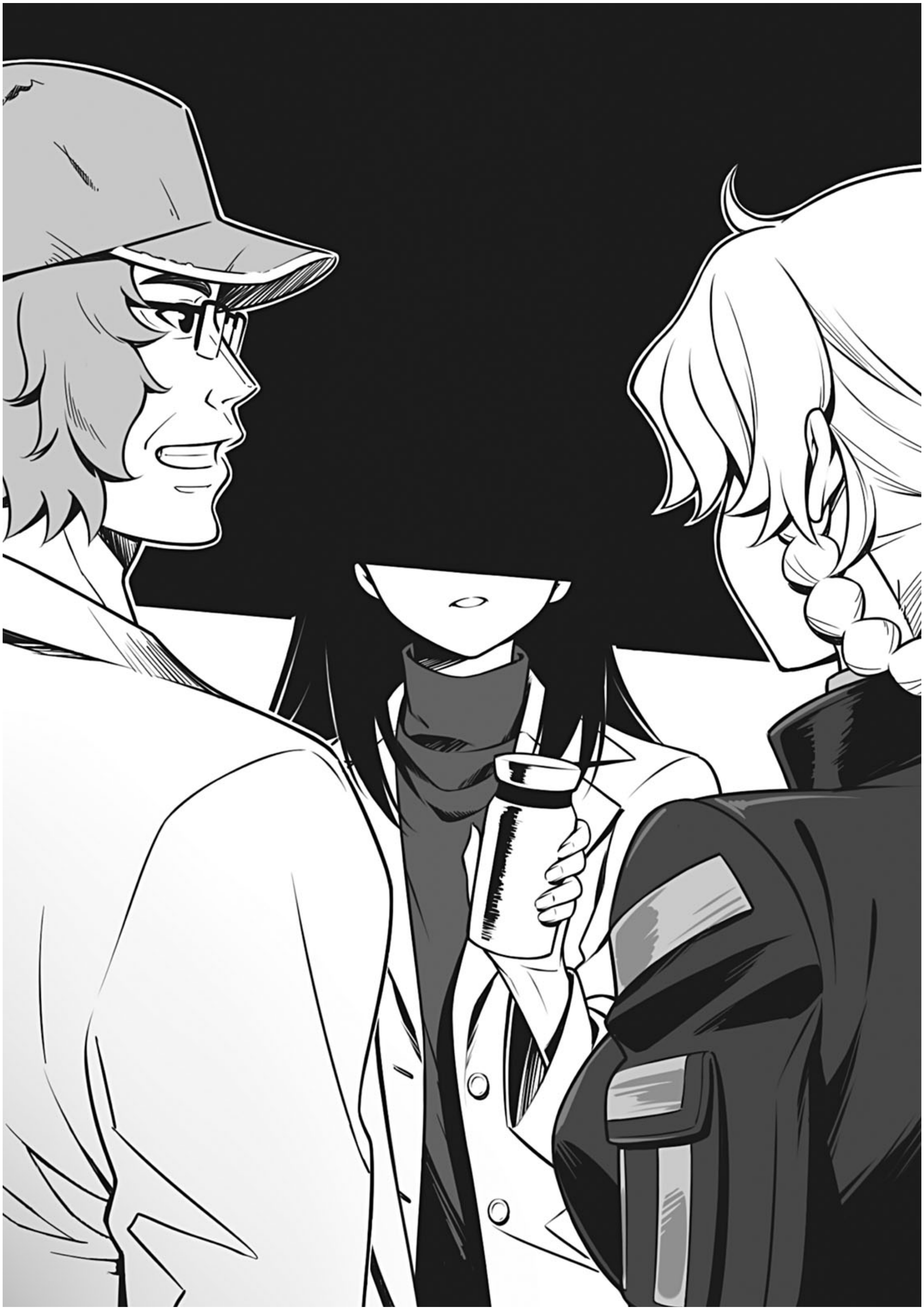
鈴羽はボトルを受けとった。

終戦後も東京に人がもどらない原因は、飲料水を確保できないからだ。電力をふくめて数百万人を養うだけのインフラが、いまの東京にはない。

「メディカルチェックの結果は異状なしよ」

白衣の女性――クリスはタブレットを手に告げた。

「うん。これで本番への目処は立ったね！　いよいよシュタインズゲート世界線に……」
鈴羽はボトルの水を口にふくむ。
「まだまだ、習熟をしていかないと」
実験は大成功。それでも至は予断を許さなかった。
本番。
２０１０年８月21日——あの年、あの日の秋葉原にタイムトラベルすること。
過去を改変するのだ。そのために〈ワルキューレ〉は、この絶望の巣のような東京で闘争をつづけていた。
「——タイムマシンに関することは、それだけで世界線を変動させかねないからね」
至が言った。たとえ直接、過去に干渉しなくても、間接的に歴史が変わってしまうことはありえるという。



「あなたのお父さんは、とても慎重なのよ。かわいい鈴羽を、緑のゲル娘（むす）にするわけにはいかないもの」
「なにそれキモい」
クリスの言葉に、鈴羽は苦笑いをかえした。
父の研究開発パートナーである彼女（クリス）の素性を、鈴羽はよく知らなかった。〈ワルキューレ〉では年齢、経歴不詳はめずらしいことではなかったが……。至とはタメ口で、つきあいは長いようだ。
「んじゃ、カップ麺が来るまで機体のメンテしてっから」
至はタイムマシンの機体にむかった。
クリスは、ソファーに身を預けた鈴羽の前を通って、とっ散らかったデスクについた。
「実験データ（ログ）の解析？」
「そうよ」
タイムトラベル実験の検証、パイロットの生体情報、すべてが記録されている。
「前に言ってたよね。タイムマシン（あれ）、ふたり乗りにするって」
「ええ」クリスはモニターと睨（にら）めっこしながら答える。「タイムマシンの積載量（ペイロード）はかぎられてる。予備燃料や部品を積む余裕はない。でも、いちばん重要な積み荷は乗せないと」
「なら、もうひとりパイロット候補を育てないと」
「懸案は耐G装置の改良ね。訓練していない一般人でも乗れるように」
「一般人……？　どうして」

「…………」白衣の女性は少し黙った。「いずれ話すわ。計画の子細は」
彼女は子細を伏せた。
鈴羽はレジスタンスの戦士だ。好奇心のままに知りたがるようなことはしなかった。
「少し、休むね」
鈴羽はソファーに身を横たえた。
こんなふうに安心して眠ることができる場所は、この研究所くらいだろう。
「ええ」
「おやすみ、クリス」――

*

うっすらと目をひらく。
束の間、シートに座った姿勢でうとうとしていたことに気がついて、鈴羽はすぐに意識を覚醒した。
夢…………。
C203（タイムマシン）の半透過式モニターの、現在、現実のタイムコードをたしかめた。

2010／11／**

阿万音鈴羽が、いま、いるところだ。

タイムトラベル――あの日、２０１０年８月21日から約３ヶ月がすぎていた。阿万音鈴羽は生まれる以前の時代で、歳を重ねていた。

ここで眠ると、よく、未来（むかし）の夢を見る。

外部から観測されない金属の筐（はこ）のなかだからかもしれない。タイムマシンはあらゆる可能性を宿している。このシートに坐ってハッチを閉じれば、２０１０年も２０３６年も、おなじ距離にある。つながっている。そう錯覚する。

実際には燃料の問題があって、鈴羽とタイムマシンにとって実現性のある〝いま〟は前後1年足らずほどなのだが。

ハッチをひらいて、外に出た。

タイムマシンは夏からラジ館の屋上に置かれたままだ。こんなものが長期間、放置されていれば騒ぎになりそうだったが、ルミねえさん――秋葉留未穂（あきはるみほ）がビルの所有者に話をつけてくれた。彼女はこのあたりの大地主で、顔が利くのだった。そういえば未来の留未穂も、あちこちにコネを持っていた。

きれいな赤い夕焼け。

澄みわたった空だ。長時間、外出する際にもマスクと防護服はいらない。風は心地よい。雨すらもやさしい。ひりひりと肌を爛（ただ）れさせることはなかった。

楽園のような〝時〟――

でも、鈴羽の生きてきた〝時〟もまた、夜のように、これから確実に訪れる。

放射性物質と塵（ちり）が、太陽をさえぎる灰色の未来だ。遺伝子は傷つき、細胞は癌化（がんか）する。幼い者であればあるほど、成長することが死を加速させた。まともな統計はなかったが、出生率と5年生存率は、数十年後の国家滅亡を冷厳と預言していた。

それでも人は争うのだろう。

残されたもののためだ。家族を守るため、既得権益のため――それがなんであれ他者を犠牲として生きようとしていた。生き残ることが銃をとるに足りる理由になった。

戦う。

阿万音鈴羽にとって、これは近しい者たちを救うための戦争だ。

彼女を支えていたのはタイムマシンという希望。過去を改変しなくてはならない、という、みなに託された責任感。

「あたし、歳、いくつになったのかな……」

鈴羽の誕生日は２０１７年９月27日、タイムトラベルしたときは18歳だった。そして訪れた過去で誕生日を跨（また）いだ。じゃあ19歳……？　それも変な話だったが。

いずれにせよ、こうして彼女が、ここにいるということは。

世界はシュタインズゲートに至ることなく、未だ最悪の世界線にとどまっていた。

「…………」

阿万音鈴羽にとって〝現実（いま）〟とは。

2036年から2010年に至る、タイムマシンという可能性によって拡張された一連の広がりのはずだ。

岡部倫太郎が言うところのこのβ世界線から、シュタインズゲート世界線へと、彼女の〝いま〟を届けることができれば。

至る。

奇跡の世界線へ。理想へ……このアトラクタフィールドを離脱するのだ。言い換えれば、すべての人々から、この最悪のβ世界線の記憶を消すことが――

みなを救うことになる。

「だから、オカリンおじさんでなければならないんだよ……！」

すべてを記憶し、世界線の移動を確認できるのは〈リーディングシュタイナー〉を有する者だけだ。

岡部倫太郎は、世界の観測者なのだ。

だから鈴羽は跳んだ。

戦士である鈴羽は、任務のためには労苦と犠牲を厭（いと）わない。

ただ……その裁量が自分にはない。任務達成の手段が、ただ相手の決断を待つしかないという状況が、鈴羽にとって深刻なストレスになっていた。〈ワルキューレ〉の初代リーダーも、この時代には、まだ、なまぬ

るい18歳の大学生にすぎなかったのだ。

岡部倫太郎は、タイムマシンによる過去の改変を拒んでいた。

3章　閉時曲線のエピグラフ・前

STEINS;GATE 0

1

タイムマシンのハッチがひらかれると、時の欠片は、射しこんだ斜陽にさらされて、ふっ、と霧散した。
コンクリートの反射熱で炙られた熱気が機内に流れこむ。
切りとられた夏の夕空は、気怠く。

――2010／08／21／17：56

焦点の定まらない目でモニターの現在時刻を一瞥し、岡部倫太郎は目を細めた。
動けなかった。

動きたくもなかった。あらゆる気力は失せた。同乗者に腕をつかまれて、強引に機外にひきずりだされる。

「うお、もう帰ってきたお！　まだ1分も経ってないのに」

ラジ館の屋上で待っていたのは、橋田至だった。

「オカリン？」

そして、椎名まゆりも。

β世界線の橋田至と椎名まゆり。

このとき、26年後にタイムマシンを過去に送りだすことになるはずのふたりは、まだ、なんら詳しい事情を知らない。

経緯は、こうだ。

『電話レンジ（仮）』とDメールの影響で、世界はα世界線に移動してしまった。

そのアトラクタフィールドαは、椎名まゆりが２０１０年の夏に死の収束を迎える世界線だった。

〈リーディングシュタイナー〉を有する岡部倫太郎は、数えきれないほどの試行錯誤と犠牲を経て、Dメールによる影響を修正し、やっと、もといたβ世界線に復帰することができた。

だが、それは牧瀬紅莉栖が7月28日に死ぬ世界線にもどることでもあった。それを強く勧めたのは、ほかならぬ本人――α世界線の紅莉栖だった。

すべてを解決するために。

β世界線へ復帰した直後、ラジ館の屋上に現れたタイムマシンと、乗っていた迷彩服の戦士の女──阿万音鈴羽(あまねすずは)の導きで、岡部は急遽(きゅうきょ)タイムトラベルした。紅莉栖が命を落とした7月28日のラジ館にむかったのだ。

そして、

タイムマシンに乗って旅立った岡部が、再びラジ館の屋上にもどってきたのは、待っていた至とまゆりにとっては、たった1分のあいだの出来事だったという。

でも、岡部にとっては。

彼と世界線の大きな分岐点となった、あの日に遡りタイムトラベルした岡部は、そこで挑んだのだ。

世界に。運命に。

牧瀬紅莉栖を守るためだ。彼女の死の収束を回避しβ世界線からも離脱しようと。

そして完璧なほど残酷に……過去を改変しようとしたことに対する〝時〟の報いを受けた。

「オカリン!」

まゆりが心配そうな顔で岡部をのぞきこんだ。

でも、幼なじみの気遣いすら、いまの岡部には負担だった。

──俺なんかに話しかけないでくれ。

ひとりになりたかった。いっそ消えてなくなりたかった。

「ちょっ、オカリン血まみれじゃん!　どうしたん!?」

「父さん！　タオルと水、あと服も……すぐ手にいれてきて！」
鈴羽が歳の変わらぬ父に声を飛ばした。
「え？　え？　どういうことか説明プリーズ！」
至にしてみれば、おさげ髪の女子が未来からやってきて、あなたの実の娘ですと名乗りでてからすぐの、この超展開だ。まるきり認識が追いつかなかった。
「いいから早く！」
「わ……わかったお！」
なぜだか言うことに逆らえないプレッシャーを受けながら、至は急いで階段をおりていった。
「オカリン、大丈夫……？　しっかりして……死なないで……」
「ケガしてるわけじゃないよ」
声をふるわせるまゆりに、鈴羽が告げた。
岡部の白衣の血は、返り血だった。岡部が動けないのは、ショックのあまり心神喪失しているからだ。
——よせ。
——俺なんかに構うな。放っておいてくれ。
独白のような悲鳴が、荒く、細い息とともに吐きだされる。
岡部は助けられなかった。
失敗したのだ。それどころか彼女を、この手で…………

──3週間前の、このラジ館（ばしょ）で。

──俺が、殺した。

──俺は、人殺しなんだ。

「無駄だったんだ……なにをやっても無駄だ……は、はは……全部、決まってしまっていることなんだよ……おなじだ……まゆりのときと、おなじなんだ……」

どれだけ、もがこうと。

何百何千回と時を遡っても、トライ・アンド・エラーをくりかえしても、おなじ結果に収束する。

「わかっていたはずなのに……！」

α世界線で、まゆりが何百何千回と死んだときとおなじだ。

岡部は悔恨するばかりだった。

「無駄だよ……無駄なんだ……なにもかも無駄なんだよ……俺は、やっぱり紅莉栖を助けられないんだ……は、はは、ははははは……わかってた……わかってたんだ……こうなるって予想してたんだ……もう、疲れた……ずっと休んでないんだ……だから、もういいよ……はは、は…………」

岡部の心のなかで、決定的ななにかがへし折られた。

「オカリン……なにが……？」

「俺が……俺が……」

岡部の視界はノイズにまみれる。

小刻みにふるえつづける岡部を厳しい表情で見つめて、鈴羽が言った。

──牧瀬紅莉栖をさ、刺し殺しちゃったんだ。

過程は関係ない。

中鉢（なかばち）教授が娘の紅莉栖を刺そうと。タイムトラベルした者が過去を変えようとして、中鉢から奪ったナイフを、とっさに父を庇（かば）った紅莉栖に誤って刺してしまおうと。

──殺してしまった……バカみたいだ……ぜんぶ俺のせいだ……。

β世界線の牧瀬紅莉栖は２０１０年７月28日にラジ館で死ぬ。

収束。

倉庫で、血まみれになって倒れることになるのだ。最初、その現場を目撃したのは、**ほかならぬ岡部自身だったではないか**……！

タイムリープだろうとタイムトラベルだろうと、ただ過去に遡行しただけでは世界線の収束を避けることはできない。

「殺した……？　ウソ……そんな……」

まゆりは、どこまで事情をわかっていたのか。

先月末、ラジ館で殺人事件があったことくらいは、まゆりも覚えてはいただろう。岡部は、その事件の犠牲者──牧瀬紅莉栖という女性を救うためにタイムマシンで過去にむかった。おおまかな話の流れは理解している。タイムマシンなんてものが存在するのか、ということをのぞけば。

「でも安心して。まだもう1回、タイムトラベルはできる」

鈴羽が語った。残りの燃料で3週間前までなら跳べる、もう一度リトライできる、と。

「ほっといてくれ……俺のことなんか……！　何度やったって結果はおなじだ……」

唾液か胃液かわからないものを口からこぼして、岡部は声を吐きだす。

鈴羽が、あらためて説明した。

「なに言ってんの!?　あきらめるつもり？」

この世界線では、タイムマシン開発競争に端を発した第３次世界大戦によって東京は壊滅、世界人口の半数が死ぬことになる。

悲劇を回避するためには、この２０１０年において、ロシアによるタイムマシン開発の発端となる『中鉢論文』を抹消しなくてはならない。それは論文の真の著者であった天才科学者・牧瀬紅莉栖を、盗作者である中鉢教授の凶刃から救うことと同義だった。この作戦を立案したのは26年後の橋田至であることも。

それが理想の世界線〝シュタインズゲート〟への唯一の道……！

岡部倫太郎は、いったんはすべてを了承して、タイムマシンＣ２０３に乗って鈴羽とタイムトラベルした。

なによりも岡部は、たとえ、このβ世界線では赤の他人であっても、好きになった牧瀬紅莉栖を救いたかった。
「——オカリンおじさんの肩には何十億っていう人の命がかかってるんだよ⁉　たった1回の失敗が、なんだっていうんだ！」
「紅莉栖は、どうやったって助けられない……！」
岡部は、鈴羽よりも深く知っていたからだ。
世界線の収束には逆らえない。
わかりきっていたことだ。α世界線の紅莉栖の決意と犠牲の上に、まゆりも、このβ世界線も守られている。
岡部もまたそれに応え、〈リーディングシュタイナー〉によって忘れることができない別の世界線の想いを、紅莉栖に捧げた。
記憶が、想いが、血まみれのナイフで切り刻まれる。
それが……精一杯の、岡部の——
「く……！　こうなったら、ビンタしてでも気合い入れなおして——」
「だめだよっ……！」
手をあげようとした鈴羽を、まゆりがさえぎった。
「まゆねえさん……？」

「無理強いするのは、よくないよぅ……！　こんなボロボロになってるオカリン、見てられないもん……！」
　この、高校生の椎名まゆりにとっては。
　現実とは。たしかに実感できることは、ずっと彼女の手をひいて支えてくれた幼なじみが、見る影もなく心折れて、打ちひしがれていることだった。
「でもさ……このままじゃ未来を変えられない！」
「どうして？　どうして未来のことをオカリンひとりに押しつけるの？　そんなの重すぎるよ……」
「オカリンおじさんには……世界の観測者としての能力があるからだよ！」
「オカリンが望んだわけじゃないのに……！　未来のことを人ひとりで変えようなんて……きっと無理なんだよ！」
　まゆりは知らない。
　牧瀬紅莉栖の死、第３次世界大戦、数十億人の死。なにも知らない。
　それでも、この椎名まゆりが守りたいのは……岡部倫太郎ただひとりだった。
「だから……！　シュタインズゲート世界線は、きっと………」
　口にしかけて、鈴羽は言いよどむ。
　別の世界線に跳ぶ。すべての人々の記憶を消すことで、世界を救う。
「………」

会話は噛（か）みあわない。
アトラクタフィールド理論を学んでいない者には、この話は通じない。輪廻（りんね）転生を信じるようなものだ。尊い教えよりも、いまの感情……鈴羽とまゆりとでは、どうあっても優先順位がちがう。
「気持ちはわかるよ」鈴羽は声のトーンを落とした。「でもさ……あたしも未来をかけて、この時代に来てるんだよね」
作戦にあたって、こうしたケースも想定はしていた。過去のラボのメンバーたちに、鈴羽の言葉が信じてもらえないことは。
「…………」
「あたしね、どっちにしろ２０３６年にはもどれないんだ。そう簡単に、あきらめるつもりはないから」
まゆりを責めるでもなく、しかし、はっきりと告げると、鈴羽は岡部にむきなおった。
「オカリンおじさん、ひとつだけ忠告しとく。このタイムマシンに残されてる燃料は有限なの。さっきはもう1回だけ……往復２回分しか残ってないって言ったけど。実は、まだ余裕はある」
少しブラフをかましたことを打ちあけると、鈴羽は正確な日時を伝えた。
「――それでも移動できる時間は、およそ３４４日分。最悪、片道のタイムトラベルになってしまったとしても、いまから1年と経たないうちに２０１０年７月28日には届かなくなる。覚えといて。その日になったらさ……あたしは、たとえひとりでも跳ぶよ」
いずれ〝いま〟を定めねばならないときはくる。

鈴羽が投げかけた言葉に、岡部は答えることもなかった。

＊

――誰かが、なにかを俺にむかって言っていた。
でも、言葉の意味を聞きとれない。

なにも聞きたくない。
泥のように眠りたい。
もう、いいだろ。
もう解放してくれ……。

――オカリン……ねえ、オカリン……。
もう、がんばらなくてもいいからね？　泣いてもいいんだよ、オカリン……。
まゆしぃは、そばにいるからね……オカリン……。

まゆりが、そう言ってくれた。

ただ、涙があふれて。
なにもかも忘れようと、決めた。

あの日から、岡部は未来ガジェット研究所に行くことを、やめた。

2

――さぁ、岡部さん。
リラックスしてください。
あなたは私の声を架け橋として、過去へと降りていきます。
どんどん、どんどん降りていって……やがて柔らかい色をした光が見えてきます。

夢を見ていた。
白昼夢だ。イスに身をあずけてカウンセリングを受けているという自覚はある。リラックスして、臨床心理士に言われるまま景色をイメージした。
柔らかい色をした、ひかり……。
――その光は何色に見えますか？

「赤」

――赤、ですか。なるほど。その光のなかに、あなたの大切な人が立っています。

　その人は、あなたの家族でしょうか？

「いいや」

――では、友人？　それとも恋人？

「恋人」……ちがう。「いいや、恋人じゃない。友人ですらない」

――では、どういう？

「俺と……あいつは……」

　思い出。

イメージが這(は)いあがってくる。記録の泥の底から。

――ちょっと来てくれませんか。

ラジ館で、紅莉栖に、はじめて会ったとき。

――ひっ……。

ラジ館で、紅莉栖は血まみれで倒れていた。

――椎名まゆりは必要ない。

SERNのラウンダー桐生萌郁(きりゅうもえか)に、まゆりは撃ち殺された。

——話して。
紅莉栖は、
——あんたがタイムリープしたのはわかってる。
命の天秤、世界線の二者択一、すべてを理解したうえで、
——まゆりを助けて。β世界線に行きなさい。まゆりが死なない世界へ。
　それが、あんたのためでもあるし、私のためでもある。

あるべき世界線で生きなさい、と。

岡部は約束した。
そんなα世界線の牧瀬紅莉栖が、たったひとつだけ岡部に望んだことがあった。
——岡部は、私のこと覚えてて……くれる？
忘れない。
〈リーディングシュタイナー〉を有する岡部はα世界線の彼女を、
決して忘れない。
けれども……いま、今日を生きていくためには。

世界線を越えて交わった牧瀬紅莉栖との逢瀬（おうせ）、その証である、たったひとつ残された彼女との約束を守るためには。

いまは、すべてを忘れなければ……辛すぎた。

思い出。

どんなに美しく、尊い意志が宿された記憶であっても。岡部の心の器は、もう――

――ねぇ……わ……たし、

死ぬの……かな……。

……死にたく……

ない……よ………。

＊

「ああ！」

絶叫した。

壊れたのではない。自分の心を壊さないために叫んだ。騒音で脳を充たし、わきあがる負の思考を打ち消してしまわなければ、どうにかなってしまう。

「俺が刺した！　俺が！　俺がぁっ……！」

叫ぶ。

記憶の泥のなかから手をのばしてきた彼女の血まみれの手を消す。

岡部はβ世界線の紅莉栖を救おうとしたのだ。阿万音鈴羽とともにタイムマシンに乗って、運命に抗おうと。

ただの大学生が、遮二無二、時間と世界の因果に逆らおうと。

勇気をふりしぼった。がんばった……。

すべて、その結果ではないか。

「岡部さんっ！」臨床心理士は、これ以上は危険と判断した。「いいですか？　私が、あなたの肩を叩きます！　それを合図に意識がハッキリしてきますから！　３、２、１……はいっ」

ぱんっ、と両肩に振動を感じた。

岡部が刺した紅莉栖の、あの命が抜けていくときの表情のイメージが崩れていく。

だらだらと……意識はただよう。

起きているときは半分眠っているようで。悪夢を見ているときは目が覚めているようで。

「大丈夫ですか。いま、タオルを持ってきますから」

そう言って、臨床心理士は施術室の棚にむかって歩いた。

「う………」

岡部はソファーから体を起こそうとした。冷たい汗で全身びっしょりと濡(ぬ)れていた。

2010／11／29

あの夏、2010年7月28日。

——エキゾチック物質、見つけてきてくださいよ。

タイムマシン理論について議論し、彼女にやりこめられた……いいや、ATFで講演をしたのはα世界線の牧瀬紅莉栖だ。このβ世界線の紅莉栖は、講演を前にラジ館で殺害された。中鉢教授に刺されて……あるいは2回目は岡部に——

忘れろ。

いいや岡部は忘れたいのではない。忘れたくない。ただ、いまは忘れたことにしなければ心と体が耐えられない。

心療内科の担当医の言葉を借りれば、岡部は「しなければならない」とアクセルを全開で踏みながら「してはならない」とブレーキを踏んでいる状態だ。もちろんカウンセラーに紅莉栖やタイムトラベルの話はしてはいないが……無気力な人間であれば、そもそも心を病むことはない。

——紅莉栖を救わなければならない。

──紅莉栖を救ってはならない。過去を改変してはならない。それが紅莉栖の願いであり、彼女との約束だ。
──紅莉栖との約束を守らなくてはならない。大切な人だから。
──大切な紅莉栖を、救わなければならない。…………

解のないループ。
これが岡部倫太郎の、現在の居場所なのだろう。
あらゆる記憶は、ふとしたきっかけであふれだす。そうすると岡部は、不安、後悔……要は、牧瀬紅莉栖への強い執着をコントロールできなくなる。
ありきたりな言葉だが、岡部は時を越えてまでして、がんばりすぎたから病んだ。
必要なのは休息だ。小さな目標を見つけること。それを、ひとつひとつ達成することだと医師は言う。
「我ながら、よく、ここまで立ちなおったもんだよな……」
岡部は小さな道標を勉学に定めた。
遅刻しない、講義はサボらない、ノートはとる、数ヶ月前の自分であれば考えられないことだ。
いまの岡部にとっては。無力感に打ちのめされて心を病み、カウンセリングに通う18歳の青年にとっては。

誰かの役に立っている。どんな小さなことでも――誰にも責められず、なにかができている、という積み重ねのなかにいるだけで精一杯、生きているということだった。たとえば受付で出欠をとるとか、そんな退屈な単純作業のほうがありがたかった。

いまは、まだ口にはできない。

それでも、岡部がまじめな学生になって指導教官の井崎准教授にアピールしているのは、人生の目標のためだ。

ヴィクトル・コンドリア大学。

それが、岡部のめざす場所だ。牧瀬紅莉栖が勤めていた職場だ。井崎はヴィクトル・コンドリア大学と共同研究をすすめている。彼の手伝いをして働くことが、目標に近づく第一歩ではないかと半病人なりに考えた。

紅莉栖のやろうとしていたことを学んで、できるならば自分が継ぎたい――願いだ。

だからATFの講演を聴いて、紅莉栖の研究が、彼女の死後もちゃんと継続していたことによろこんだ。

――『側頭葉に蓄積された記憶に関する神経パルス信号の解析』

α世界線で実証されたタイムリープの基礎理論だ。

人間の記憶をつかさどる神経パルスのパターンを解析した牧瀬紅莉栖は、それを応用して、記憶をデジタルデータ化することに成功した。この成果をもとに「記憶データを過去の自分に送信し、受信することで、未来の記憶を思いだす」タイムリープマシンの発明をなしとげた。

実際に、岡部の記憶はデータ化されて、走査、圧縮、送信、展開の4段階を経て、携帯電話によって過去の自分に送られた。そうして岡部はタイムリーパーとなった。

岡部以外のすべての人の記憶からは、なかったことになったことだが……先日のATFにおけるレスキネン教授の講演は、その第一段階としての走査——記憶のスキャンと、その応用についての話だった。

——異議あり！

あのときの岡部の行動は、自分をコントロールできているとは到底、言えない。

それでも聴衆の紅莉栖への侮辱を、聞かなかったふりをすることのほうが、よほど辛かった。辛さから逃れるために叫んでしまった。以前の中二病とはちがう意味で病んでいるから、あんな行動に出てしまった。

レスキネン教授に「たいしたヤツだ」と褒められたことは、恥ずかしかったけれど心から救われた。パーティの席では、助手の比屋定真帆（ひやじょうまほ）もおなじ気持ちであったことがわかって、初対面だった彼女が友人のように思えた。

——言うべきか？

紅莉栖と自分の関係を、この人たちに話してもいいだろうか？　パーティ会場で岡部は逡巡（しゅんじゅん）した。

β世界線では、岡部倫太郎と牧瀬紅莉栖には、ほとんどなんの接点もない。このβ世界線の岡部は、7月28日にラジ館の倉庫で血だまりに倒れた彼女を目撃……それだけだ。至の助言もあり、トラブルを怖（おそ）れて目撃者として名乗りでてもいない。

それでも岡部は腹を決めた。

生きるために。

彼女の願い――岡部倫太郎が生きるために、病んだ心と体で道を追うには、この〝時〟しかないと。

動け。

ブレーキを踏みながらアクセルを踏んでも。それでも、できることからだと。

紅莉栖が日本に留学していたとき友達になったというのは嘘(うそ)だ。岡部と紅莉栖が親しくなったのはα世界線でのこと。でも、それぐらいの嘘であれば許容されると思った。

真帆に語った紅莉栖との思い出話も、嘘。

正確には真帆をふくむ全世界の人間にとっては嘘だが、岡部にとっては嘘ではない。

結果的に、この行動は機会(チャンス)をもたらした。レスキネン教授との出会いは、岡部にとっては願ってもないことだった。アマデウス・システムのテスターを依頼されたとき、まさか断るという選択肢はなかった。

*

クリニックを出ると、夜になっていた。

今年も、あと1ヶ月だ。日は足早に短くなっていく。

「どうだった、オカリン？」
椎名まゆりが岡部にたずねた。彼女はクリニックまで付き添ってくれていた。
この夏――岡部は、この幼なじみを救うために世界線を越えて戦った。
まゆりは岡部にとって、ずっと守るべき存在だった。
それが、いまでは一方的に心配されてしまっている。岡部にカウンセリングが必要だと気づいて、実家から通える池袋のクリニックを探して受診するように勧めたのは、まゆりだった。
「まぁ、たいしたことないってさ」
安心させるために少しだけ嘘をつく。
催眠療法は、はじめての体験だった。結果は……岡部のなかに強いトラウマがあって中止された。今後もカウンセリングと薬物投与で様子を見よう、ということになった。薬で対症療法をしつつ、自然治癒を待つ。心の治療というのは、悪い部分を切ったりつないだりして治す、というわけにはいかないわけで。トラウマの原因はわかっていたが、それを患者が打ちあけられない以上、臨床心理士も効果的な治療は難しいだろう。
どうも、また少し、不安定だ。
おぼろげになってきていた紅莉栖の顔を、はっきりと思い浮かべられるようになっていた。こうしているいまも、夢のなかでも。
昨日――和光で、比屋定真帆に見せてもらった〝彼女〟が影響している。

「なあ、まゆり」とにかく岡部は、カウンセリングの結果については深く考えないことにした。「夕飯これからだろ？　なにか食べに行くか。おごるぞ」

時間に逆らって傷ついた心は、時間をかけて治さなければならない。

あれほど劇的で濃密な時間を重ねたのだから、どこかで、そのぶん平凡で希薄な時間をすごさねばならないのかもしれない。

「あ、それなら秋葉原に行ってもいいかなぁ？　るかくんとフェリスちゃんがね、ひさびさにオカリンに会いたいって――」

3

夏休みまでは毎日のように通い、住んでいた秋葉原だったが、あの日から足が遠のいた。神田にある大学の帰り道、買い物で立ち寄るくらい。岡部は大檜山（ひやま）ビルの2階にあるラボに寄りつかなくなっていた。

駅前の広場に立つ。

もうじき街はクリスマス一色になるだろう。イルミネーション、家電量販店のセール、サンタ服のメイドさん。

「チラシを配る、サンタ服を着たメイド、か……」

秋葉原の日常は非日常だ。

「あ、フェリスちゃんと、るかくんだ。トゥットゥルー♪」
「ふニャ〜、凶真（きょうま）ぁ〜」
「岡部さ〜ん。まゆりちゃ〜ん」
　待ちあわせをしていたふたりが駆けよってきた。
「会いたかったニャ〜！」
　抱きついてきたのはフェイリス・ニャンニャン。いわゆる猫耳メイドさんで、本名は秋葉留未穂という資産家令嬢だが、ふだんから源氏名のフェイリスと呼べとこだわる。
「やめろよ。みんな見てるだろ」
　くっついたメイドをひきはがそうとして握った細い手首は、冷えきっていた。寒空の下、メイドカフェ『メイクイーン＋ニャン^2』のオーナーみずからビラ配りをしていたようだ。
「いいじゃないかニャ、凶真とフェイリスの仲だニャン」
「よくない。あと凶真っていうのもやめてくれって」
　岡部は仏頂面になる。
「ニャンで？」
「あの名前は……黒歴史だからだ」
　岡部は短く答えた。
　留未穂は「うニュ〜」と不満そうだったが、岡部はとりあわない。



〝鳳凰院（ほうおういん）凶真〟は封じられた忌名だ。

　なかったことにした存在。凶真――〝彼〟はタイムマシンという発明に手を出し、禁忌を犯し、すべてを支配する世界線（システム）から当然の報復を受けた。

　彼の近しい者たちの想いは踏みにじられ、時には命まで失い、幾度も、幾度も、幾度も、幾度も……ついに〝彼〟は心身ともに再起不能な傷を負った。

　二度と〝彼〟を目覚めさせてはならない。

　岡部が中学生のときに誕生した〝鳳凰院凶真〟は仮面（ペルソナ）としての役目を終えたのだ。たぶん。そんな感じだ。

「じゃあ、なんて呼べばいいのかニャ？」

「そりゃあ、岡部とか……」

「やっぱりオカリンって呼ぶのが、かわいくていいんじゃないかなぁ？　ね、フェリスちゃん」

　ちなみに『メイクイーン＋ニャン^{2}』でアルバイトをしているまゆりは、フェリスのことをフェリスと短縮形で呼ぶ。そっちのほうが呼びやすいから、という理由だ。

「ん～、マユシィが言うなら、これからそう呼ぶニャ。なんだか違和感あるけど……」

　留未穂は不承不承、岡部から離れた。

「ルカ子も、ひさしぶりだな」
「はい……！」
漆原(うるしばら)るかはまゆりの同級生で、秋葉原にある柳林神社の宮司の子だ。あいかわらず女の子みたいに可憐(かれん)だ。
――だが、男だ。
息子だ。どこをどう切りとっても美少女にしか見えないので、岡部は〝ルカ子〟と呼んできた。複雑な意味をこめて……岡部が留未穂に〝凶真〟と呼ばないでくれと頼んだのであれば、〝ルカ子〟呼ばわりもやめるべきなのだろうが。
でも、いまさら……〝るか〟と呼ぶのも……。
――すごくテレくさい。
逆に、漆原るかが男であることを、斜め上な意味で意識してしまいそうだ。
「なんだか、とても懐かしいような気がします。ボク、ときどきラボに顔を出すんですけど、岡部さん、最近あんまり来ていませんよね？」
「ああ……大学のゼミが忙しいんだ。ATF(セミナー)の準備もあったしな。あと、サークル活動もしてるしな」
「サークルに入ったんですか？」
るかは驚いた。
「なんのサークルかニャ？　やっぱりUFOとかUMAとか？」

留未穂が言った。彼女にとって岡部は、どこまでも疑似科学系（トンデモ）のカテゴリーなのだ。
岡部は思わせぶりにニヤリとした。
「テニスサークルだ」
「えええーっ？」
るかと留未穂の大声に、通行人たちが何事かとふりかえる。
「なんでテニスサークルなのかニャ？」
「岡部さん、テニスなんてやってましたっけ？」
「初心者に決まっているだろう」
岡部は運動は苦手だ。おおよそ球技と名のつくものには拒絶された少年時代だった。
「じゃあ、ニャんで？」
「んー、話せば長くなるんだが……　大学のゼミの准教授がテニスサークルの顧問なんだ。それで勧誘された」
「ひとっつも長くないニャ」
「まぁ聞けって。相手は、いちおう世話になってる人だし、サークルに顔を出してみたんだ。そうしたら……なんと俺にはテニスの才能があるらしくてな。初心者にもかかわらず連戦連勝だったんだ。どうだ、たいしたもんだろう」
「岡部さんって、やっぱりすごいです！」

るかは素直に賞賛する。
「ははは、こんなことならプロテニスプレイヤーをめざしておけばよかったかな」
「めざせ〝うぃんぶるどん〟だねー」
まゆりもニコニコした。でも猫耳メイドは眉をひそめた。
「どこから、どうツッコめばいいのやら……どう考えてもサークルの会員数を増やすための罠（わな）じゃないかニャ」
「はっきり言うなよ」岡部は消沈する。「俺も、そうじゃないかと思ってたけど考えないようにしてるんだから。でも、みんないい人ばっかりなんだぞ」
「じゃあ、岡部さん、サークルの練習が忙しいんですね……」
「ん？　あ、いや……練習はあまりしてない、かな」
学内にテニスサークルはいくつかあるが、井崎が顧問をしているサークルは体育会系とは対極にあるやつだ。
「じゃあ、いったいなにしてるニャン？」
「…………」岡部は、ちょっとタメた。「合コン、とか」
「えええええ～～～～⁉」
るかと留未穂は、さっきからハモりっぱなしだ。
「そんなに驚くことないだろ。俺だって大学生なんだから」

「そうですよね、すみません……でも……うぅ」
　るかは、もじもじ、なにか言いたげだ。
「フェイリスというものがありながら、女子と楽しく合コン……許せないニャ」
「勘違いするなよ。俺は女の子なんか別に……」
　ノリをあわせてはいたが、にわかリア充に合コンでの居場所などなかった。
　岡部は話術が拙い。
　以前なら、会話の間が空けば中二病全開の妄言をまくしたてていたものだが、それも決して会話が成立していたわけではない。初対面の相手、それも異性に、なにをどう話していいのかなんて、さっぱりだ。一応、自分なりに真人間になるべくメンズ誌を買ったりして、ちょっとずつ勉強はしている。のだが……いざ本番では、なんの参考にもならなかった。テニサーなどという真のリア充たちの会話に努力でついていけるわけもなく、華やかな男女の集いのすみっこにぶらさがったまま、道化にもなれず、ただ困り果てているというのが実情だ。
　岡部にとっては、まったく世界線を越えるほどの無謀な挑戦だった……。
　だから大学生活のことを、このお嬢ちゃんたちには言いたくないのだった。話が尻すぼみになるから。
「いいなー。まゆしぃもオカリンと合コンしたいのです」
「なに？」
　岡部は意外だった。まゆりも、そういうのに興味のあるお年頃なのか、と。

「だって、みんなで楽しくパーティするんでしょ～？」

「う～ん、まちがってはいないけど、なんか微妙にニュアンスがちがう気がするニャ」

　留未穂が腕組みをする。

「場所はラボでいいかなぁ。るかくんとフェリスちゃんは、もちろん参加ね。あとダルくんや綯（なえ）ちゃんやスズさんも……あ」

　まゆりは、そこでバツのわるそうな顔をした。

　スズ――阿万音鈴羽。

「………」

　あの夏の日以来、岡部は鈴羽と、まともに顔をあわせていなかった。

　避けていたのだ。ラボから足が遠のいたのは、もとをただせば住む場所のない鈴羽が、あそこに居候しているからだ。

　なにしろ、しばらくは鈴羽の名を聞いただけでフラッシュバックが起きた。紅莉栖を刺してしまった、あの記憶が感触とともによみがえった。そのたびに岡部は悲鳴をあげて、叫ぶしかなかった。

　回復しつつある気はする。10段階なら自己評価で4くらいは。でも、もし鈴羽と顔をあわせたら……まともでいられる自信はない。

　もちろん鈴羽がわるいわけではない。

　とがめることなどない。一度はタイムマシンで過去に跳んだのは、岡部自身の意志だ。

ただ、自分が鈴羽にかかわらない代わりに、鈴羽にもかかわらないでほしかった。あきらめたことを責めないでほしかった。いまの岡部は、生きているだけで精一杯なのだ。

鈴羽の――凛（りん）とした、あの、まっすぐな戦士の瞳で射すくめられただけで、岡部は裏切り者になったような罪悪感に苛（さいな）まれる。

「あのね、みんな？」まゆりは場をとりつくろった。「まゆしぃね、ダルくんといっしょに考えてるおぺれーしょんがあるんだ」

「オペレーション？」

るかが話にのってきた。大仰な言いまわしは、以前の岡部――鳳凰院凶真のノリだ。

「っていうと？　どんな作戦かニャ？」

「えっとね――」まゆりは小さく拳を握った。「『スズさんを笑顔にしよう大作戦』！」

「？」

なにを突然、言いだすのか。岡部は困惑した。

いや……いきなりではないのか……。

あの日……ラジ館の屋上には、まゆりもいた。

再度のタイムトラベルを主張した鈴羽に対して、まゆりは岡部を庇（かば）った。世界のことを、岡部ひとりに背負わせるのは重すぎる、と。

ここにいるβ世界線のまゆりは、ほとんど、なにも知らない。

タイムマシンの存在は知っていたが、状況を理解してはいないだろう。ただ、鈴羽の目的が、岡部とともに過去を変えることであることはわかった。まゆりは、それを結果的に阻んでしまった。その行為は、ひいては鈴羽を過去に送りだした2036年の自分たちの希望を奪うことになる。
まゆりは……彼女なりに悩んでいるのかもしれない。…………
「聞かせてくれよ、まゆり」
いまの岡部が気を配ることができる相手は、まゆりだけだった。彼女は、たったひとり無条件で、みじめな自分を受けいれてくれる存在だった。
まゆりは顔をほころばせた。
「えっとね、まゆしぃは思うんだ……スズさんって、ふだんは怖いけど、本当はすっごくやさしい人なんじゃないかなーって。ラボにいるときにね、まゆしぃがソファーでウトウトしちゃうと、いつの間にかタオルケットがかかってたりするの。スズさんに聞いても、そんなの知らない、としか言わないんだけど……」
「あ、ボクもそういうことありました」るかが言った。「以前、お父さんに買い物を頼まれて、その帰りに荷物が重くて困っていたんです。そうしたら鈴羽さんが通りかかって。なにも言わずに持ってくださったんですよ」
「へぇ」
岡部は、そんなふうにみんなと接している鈴羽が、やや意外だった。
「こんなこと当たり前だから誰にも言うなって……あ、言っちゃいましたけど……」

α世界線の鈴羽は、どうだっただろうか。

アトラクタフィールドαでは、３００人委員会なる組織と、その実働機関であるSERNがタイムマシンを開発、管理社会ディストピアを構築して世界を支配することになる。その発端は、岡部が送信したDメールの存在を、ネットワーク通信傍受システムである『エシュロン』に感知されたことだった。

岡部、至、そして紅莉栖はタイムマシン研究者として彼らに拉致されることになる。そして、まゆりは不要として射殺された。

管理社会に反抗するレジスタンスのメンバーとして、やはり２０３６年からタイムマシンに乗って現れた鈴羽は、バイトをしながらマウンテンバイクを乗りまわす快活な女の子だった。

対して、このβ世界線の鈴羽は、ふだんから笑顔を見せるタイプではない。

それは生い立ちが影響しているはずだ。これは至からの又聞きだったが——鈴羽は第３次世界大戦を契機とした国民皆兵制度のもと、中学生のころから軍事教練を受けていた。その後、レジスタンスに参加し、内戦下の日本で激しい闘争に身を置くようになった。多感な思春期を兵士として生きてきたから、平和を楽しむような感覚とは無縁なのだろう、と。

その反体制組織〈ワルキューレ〉のリーダーは橋田至で、事実上の創設者は岡部倫太郎となるわけだが……そこらへんの事情まで知っているのは岡部と至だけだ。

「だからね、スズさんを本当の笑顔にしたいのです」

「なるほど、な」

岡部は、いますぐ鈴羽のことを受けいれる自信はなかったが、まゆりに話をあわせた。
「で、具体的にはなにをするのかニャ？」
留未穂が猫耳で聞き耳を立てた。
「もうすぐクリスマスでしょう？　だから、まゆしぃはスズさんに、笑顔（それ）をプレゼントしようと思ってるんだぁ」
どうやら鈴羽はパーティみたいなことをやった経験が、ほぼないらしい。
「クリスマスパーティ……その話、乗ったニャ！」
「ボクも」
「えへへ。ありがとう」まゆりは親友たちに肯くと、岡部を見た。「オカリンも参加してくれる？」
「う？　そうだな……」
「だめ、かなぁ？」
「…………」岡部は逡巡（しゅんじゅん）した。「俺はともかく……鈴羽が嫌がるんじゃないか？」
自分がどう思うかではなく、自分がうまくできないことで他人に不快な思いをさせてしまうのではないか。そういうのが、いまの岡部にはしんどい。はたして自分がパーティに参加して、楽しい空気を壊さずにいられるのか……。うまくできないなら最初からあきらめたほうがいい。
——もう二度と過去へは跳ばない。
岡部が、そう告げたときの鈴羽の表情を忘れることができない。

絶望、思いもよらない拒絶がもたらした怒り。

鈴羽は18歳の人生と命——記憶、大切なものをすべて岡部に託す覚悟をして、過去にやってきたのに。

——なぜ、受けとめてくれないのか。

悲憤に満ちた彼女の視線は、抜くことのできない棘（トゲ）となって岡部の心に刺さりつづけている。

「鈴羽は、俺を嫌ってるし……」

「まゆしぃは、そうは思わないよ。スズさんはね……オカリンを怒っちゃったこと、後悔してるんじゃないかなあ。その気持ちを素直に言えないんだと思うのです」

後悔……している？

考えてもいなかった。鈴羽は、挫（くじ）けた岡部を一方的になじれる立場だと思っていたし、それも仕方ないと思っていた。

岡部は、いまは……まゆりのために精一杯の言葉をかえした。

「……わかった。少し考えてみるよ」

「うん」

「あの……ところで岡部さん」るかが岡部にたずねた。「診察はどうでしたか？」

まゆりからカウンセリングのことを聞いていたようだ。岡部に会いたがっていたのは、経過が気になっていたのかもしれない。

るかにも留未穂にも、岡部はずいぶん心配をかけている。

「催眠療法というのは初体験だったが、なかなか興味深かったな。俺は、いままで催眠術なんかにはかからないと思ってたよ。驚いた」

岡部は、なるべく深刻にならないように話した。

「かかっちゃったんですか？」

「見事にな」

「そういうルカニャンも催眠術とかすぐにかかりそうだニャ」

「そんな……」

「ハハハ、たしかに即効でやられるだろうな」

みんなに負担をかけたくない。

だから、うまくいくことだけを……できそうなことだけを積み重ねていくしかない。

「──なあ、おまえたち……なにが食べたい？　おごるぞ？」

たとえば、そういうことだ。年上っぽくふるまってみる。ヨドバシカメラのほうにいけば、食事ができる、そんなに高くない店もあるだろう。

「やったニャ！　凶真……じゃなくてオカリン、太っ腹ニャン♪」

「ありがとうございます」

「えへへ。なに食べようかな〜、からあげかな〜」

「ジューシーからあげ？」

「マユシィは、それぱっかりニャ」

先を歩く高校生たちのあとを歩きながら、岡部は思う。

――ここに紅莉栖がいたら。

牧瀬紅莉栖についてのたらればは禁止していたのに。なのに……こんなふうに考えてしまうのは、やはり昨日の体験のせいだった。

――アマデウス（Amadeus）

あの表情、仕草。

声、話しかた。思いだされた。昨日の彼女との対話が――

＊

2010／11／28

和光市、脳科学総合研究機構、日本オフィス準備室。

パーティションで仕切られた制限区画で、29インチのモニターに映された３Ｄモデルの女性が口をひらいた。

『岡部倫太郎さん。はじめまして、牧瀬紅莉栖(マキセクリス)です。どうぞ、よろしく』

なめらかな唇の動き。

アマデウス・システムによって２０１０年３月に保存された牧瀬紅莉栖の記憶データ、それに基づいた人工知能(AI)だ。

「…………」

岡部は反応できなかった。

モニター内の３Ｄモデルは、リアルに再現されてはいたが、動きにＣＧっぽさはある。

だが、違和感はささいなものだ。リアルの彼女を知る者にとっては、いっそう。

声としゃべりかたが、あまりにも本人そのまますぎて……。

『──あの、真帆先輩。そちらは深夜、というわけではないですよね？』

「ええ。ちがうけれど。なぜ？」

『おふたりとも、もしかして眠いのではないかと』

岡部が無言のまま、返事をしなかったせいだ。

「私はさっきまで寝ていたけれど、いまは、もうシャッキリ目が覚めているわ」

『あいかわらずですね』

「失礼なことを言わないで」
『では先輩、もうひとつ質問しても？』
「ええ、なに？」
『岡部倫太郎さんとは、どういう関係ですか？』
　当然の──だが相手が人工知能だということを踏まえれば、驚くべき質問。
「この前のＡＴＦセミナーに参加してくれた学生よ。なかなか研究熱心だと思ったから、連れてきたの」
　真帆が答えた。
　岡部は気づいた。真帆は、岡部が生前の牧瀬紅莉栖と知りあいだった──嘘（うそ）なのだが──ことを、まだアマデウスには伝えていないらしい。
　テスターとして自分で伝えろということか。岡部は少しプレッシャーを感じた。
『へぇ……先輩にそう言われるなんて、たいしたものですね』
　モニターの３Ｄモデルがほほえんだ。
「あ、その……」
　おちつけ──自分に言い聞かせる。彼女は……これは牧瀬紅莉栖ではない、人工知能だ。
　牧瀬紅莉栖ではない……マキセクリス（仮）。
『岡部さん、専攻は？　やはり脳科学ですか？』
「それは……」

言葉が喉の奥にからんで、つまった。
わかってはいた。相手はただのプログラムだ。声はサンプリング、姿は3Dモデル、この会話さえ作られたもの。
けれども……会話しなければと思うほど言葉はブレーキをかける。
――はじめまして。
さっきのＡＩ(クリス)の挨拶だ。岡部にとっては、これが思った以上にショックだった。
これは岡部と、あの夏の3週間をくりかえしすごした牧瀬紅莉栖ではないのだ。
事前に真帆から注意を受けて、理解したつもりにはなっていた。それでも本人の姿と記憶を持ったモノから直接それを告げられるのは、痛みだった。
心拍数があがる。安定剤を多く飲んでくればよかったと後悔した。唇がカサカサに乾いた。貧血でもないのにクラッと揺れる感じがして、視界は暗くなった。
『どうかしました、岡部さん？』
アマデウス――クリスの声が心配そうな響きを帯びる。こんな微妙なニュアンスまで再現できるとは、音声ソフトウェアの性能もすさまじい。
「彼の専攻は脳科学ではないわ。だけど私たちの研究にとても興味があるんですって」
岡部が黙っているので、真帆がフォローを入れた。
『そうなんですか』

「レスキネン教授も気に入ってるみたいだし、いずれは私の助手にでもしてやろうかと思っているところよ」
「…………え？」
真帆が意外なことを言いだしたので、岡部は驚いて顔をあげた。
助手？　つまりヴィクトル・コンドリア大学に……？
「あら？　お気に召さない？」
「そういう問題じゃなくて……」
「まぁ冗談だけれどね。もしかして本気にした？」
真帆はニヤリと笑った。からかわれたのだ。
「……信じちゃいない」
一瞬、信じそうになったが。
「でも、もっともっと勉強してくれれば、あながち冗談じゃなくなるかもしれないわよ」
「仮にそうだとしても……レスキネン教授の助手がいい」
岡部は精一杯の強がりをかえした。
「レスキネン教授の助手って思ってる以上に大変よ。あの方は、本当に子供だから」
と言いながら、真帆はさりげなく岡部の腕をトントンと軽く叩く。

真帆は……岡部をリラックスさせたのだろう。話しやすいように。真帆は岡部よりずっと大人なのだった……年相応に。

『──あのぉ、先輩？　ちょっと』

と、クリスが突然、なんとも人間らしい感じでモニターのなかで真帆に手招きをした。

「なぁに？」

『もうちょっとこっち……スピーカーに寄ってください』

真帆は立ちあがるとスピーカーのそばに耳を持っていく。

これは……絵面は奇妙だったが、まさか女子のナイショ話……？

「はぁっ⁉」真帆が、いきなり顔をまっ赤にして画面のCGに噛（か）みついた。「そんなわけないでしょうっ！　なにを言ってるの、あなたっ」

『そんなにテレなくても』

「テレてるわけじゃないわ。とにかく、おかしなことを言うのはやめて」

『そうですか？』

「そうです」

「えと……いったい、なんの話を……？」

アマデウスのクリスは、いったいなにをスピーカー越しに耳打ちしたのだ。

真帆が、チラリと岡部を見た。

「…………っ」

　すると真帆は、ますます顔を火照らせて、そっぽをむいてしまう。

　岡部は、めずらしく勘が働いた。

　過去の紅莉栖の言動から類推したのだ。このAI（クリス）は、真帆に「お似合いじゃないですか」とか「先輩にも、ついに春が来ましたね」とか、くだらないことを耳打ちしたにちがいない。男女がちょっとでも親しげに会話を交わすと、なんでもかんでも妄想をたくましくしてしまうのは、紅莉栖そのものだ。

「このスイーツ（笑）め……」

　かつて紅莉栖にむかって用いた言葉（スラング）を、つい、つぶやいてしまう。

　思えばα世界線の紅莉栖は、ラボのPCで、コソコソと巨大掲示板『@ちゃんねる』を閲覧していたものだ。

──ちょ、ちょっと！　入ってくるときはノックぐらいしてよっ。

──クリスティーナ。おまえはやるべきことをサボって、なにを見ていた？

──ちょっ、く、来るなーっ。

──フッ。

──おい！　その「あー、これはひどい、はいはいワロスワロス」みたいな笑いかたはなんだ！

──案ずるな、クリスティーナ。いや、@ちゃんねらークリス！

――その呼びかたは、やめて。
――俺はすでに気づいていた。そう、とっくに気づいていたのだよ。おまえからは@ちゃんねらーとしての匂いのようなものがプンプンと醸しだされていた！
――失礼だな！　ちゃんと毎日、香りがきつくない香水つけてるぞ！
――そういう意味ではない。俺が言っているのは魂レベルの話だ。だが、隠そうとするとはいじらしいな、@ちゃんねらークリス。
――そ・の・名・で・呼・ぶ・な。

もしかしてクリス（こいつ）も、真帆や教授の目を盗んで巨大掲示板（@ちゃんねる）にアクセスしたりしているんじゃないか。煽（あお）りやら釣りやらマジレスやら、やっちゃってるんじゃないか。
――最終的に私たちは、アマデウスに人間と同様の〝魂〟を宿すことができるのではないか、と考えています。
とは、レスキネン教授の言葉だ。
このクリスも、いつかは人工の魂となってストレージ上にいつづけるようになるのだろうか。
そうなったとき……肉体は喪（うしな）われても魂レベルでは在りつづけるという状態を、人類は、なんと呼べばいいのだろう。
生でもなく死でもない――〝存在〟。

もはや科学ではなく、哲学か宗教の話なのかもしれない。平凡な岡部倫太郎の器からは、こぼれおちてしまう話だ。

「バカな話はここまでにしましょう。岡部さんだって、こんな中身のないことを聞きたくて来たわけではないわ」

真帆が仕切りなおした。

『そうやってごまかすところが、ますます怪しいですね』

「ウイルスをぶちこむわよ……」

『嘘です、もう言いません』

クリスが頭をさげた。

もしかすると生前の紅莉栖と真帆も、こんな感じのやりとりをしていたのかもしれない。

「お騒がせしてごめんなさい。岡部さん、彼女となにか話してみる？」

真帆にうながされて、岡部はあらためてモニターと対面した。

目があうと、３Dモデルが微笑む。

初対面で、こんな、外面がいいやつだったろうか……？

もっともα世界線でのふたりの接触は、セミナーの質疑で岡部が紅莉栖の逆鱗（げきりん）にふれた――という最悪のものだったわけで。あのツンケンした態度が異常だったのかもしれない。

『どんなことでも訊（き）いてください。可能な範囲でお答えしますから』

クリスは礼儀正しく応じた。
「そう、だな……」
──まずい。
しゃべろうとするほど声がつかえた。α世界線の記憶が心にあふれてくる。なにから話したらいいか、なにを話してはいけないか、頭のなかで時系列が混乱する。
「タイムマシンは作れるだろうか？」
岡部は、やっとのことで質問した。
まさにα世界線で、初めて紅莉栖と意見を戦わせたのが、このテーマだった。あのときは岡部が一方的に論破されて打ちのめされただけだったが。
真帆が「え？」という感じで岡部を見ている。
突拍子もない質問だったが、岡部にとっては比較検証という点で意味のあることだ。
『タイムマシン？　ですか？』
「なんの話をはじめるのかと思ったら。いきなり、なに？」
むしろ、真帆を途惑わせてしまった。
「ただのテストだよ。アマデウス（かのじょ）が思考実験ができるかどうか、っていう」
「ふぅん……？　どう、クリス？」

『そうですね』クリスは、ほぼノータイムで答えた。『結論から言ってしまうと、タイムマシンは可能ではない――けれど不可能とまでは言いきれない、といったところでしょうか』

岡部は違和感を覚えた。

――結論を言ってしまうと、タイムマシンなんていうのはバカらしい代物だということです。

α世界線の紅莉栖は、そんなことを言ったはずだ。

「俺は」岡部は、さらに検証を試みた。「タイムマシンなんてバカらしい代物だと思うけどな」

あのときの討論を思いだしながら、紅莉栖自身の言葉をクリスにぶつけてみる。

『そう決めつけるのは早計ですよ』

「そうかな……？　たしかに世界中の科学者がタイムトラベル理論を提唱している。主な理論だけで11あるが、どれも仮説の域を出ない。しかも理論同士が矛盾し、否定しあっているものまである。たとえば宇宙ひも理論やワームホール理論、これらは思考実験としてはタイムトラベルを可能にするが……」

――エキゾチック物質、見つけてきてくださいよ。

α世界線の紅莉栖は、そう言って岡部を論破したではないか。

「そもそも宇宙ひもだのエキゾチック物質だの、どこからどう探してくればいいのか見当もつかない。つまりタイムマシンは現実的ではない」

岡部の発言は、ぜんぶα世界線の紅莉栖の受け売りだった。

『それは科学者が、まだ重大ななにかを発見できていないからでしょうね』

クリスは動じた様子もなく、応じた。

「それじゃあ、きみは、いつかタイムマシンを作れると思っているのか？」

『不可能とまでは言いきれない。そう言いましたよ？』

微妙に、紅莉栖とクリスの見解は異なっている印象だ。

「……なぁ、比屋定さん。クリス（カノジョ）は、自分が紅莉栖（オリジナル）の記憶から派生した存在だということは認識しているんだよな」

「もちろん」

「じゃあ……ええっと、上手い例かわからないが、一卵性双生児みたいなことはあるのか？　生まれたときは見分けがつかない。だが育つに連れて差異が出てくる……とか、そういうこと」

「それについては、まだ検証中だけれど……蓄積されていく記憶が異なれば、当然、もとの人間とは〝ちがうモノ〟になっていくと思うわ。私と教授は、そう考えている」

クリスの記憶データは半年以上前のものだ。その間、アマデウスのクリスは何度となく起動して、本物の紅莉栖とは異なる経験を重ねている。タイムマシンに対する見解の微妙な相違は、そのあたりに由来するのかもしれない。それとも、過去に岡部と討論したときは、売り言葉に買い言葉で、ただただ岡部の面目をぶっ潰せればよかったのか……。

どちらかといえば後者のほうが、紅莉栖らしいといえば、らしい。そもそも紅莉栖は、革命的な『中鉢論文』のオリジナルを書いたはずなのだ。タイムマシンに対して頭ごなしに否定的であったわけではあるま

い。
　と、パーティション越しにドアが閉まる音が聞こえた。
「教授かしら?」
『あの大きな足音は、そうじゃないでしょうか?』
　真帆とクリスが言った。
　すぐに、ドンドンドンという大きなノックとともにブースのドアがひらいた。
「倫太郎(リンターロ)!」
　レスキネン教授は両腕を広げてから、岡部の手をガシッとつかんでブンブンとふりまわした。握手をしているつもりらしいが、この巨人にそれをやられるとプロレスラーに技をかけられている状態になる。
「Hey, boy! What's up!?」
「えっ?　あっ、えっと、アイムファインサンキュー、アンド、ユーっ?」
『岡部さん、ひどい英語ですね』
「だ、黙れ、クリスティーナ!」
　…………。
　妙な空気になった。
『、、、、、、、クリスティーナ?』
「うぐ!?」

岡部は、しまったと狼狽（ろうばい）する。あまりにも本物っぽいツッコミが入ったので、つい、その呼びかたをしてしまったのだ。

「……なんでもない。気にしないでくれ」

『気になります。なんで私がクリスティーナなんですか？』

人工知能は強い興味を示した。愛称やニックネームで呼ばれた経験がなかったのかもしれない。

「だから、なんでもないと言うのに」

『なんでもないわりには動揺してますよね』

「しつこいぞ、クリスティー――紅莉栖」

『ふむん』

「ふーむ」

クリスと真帆は、おなじタイミングで咳払（せきばら）いをした。

つまり岡部倫太郎は、オリジナルの牧瀬紅莉栖を、

「〝クリスティーナ〟って呼んでいたのね」

「きみも、そこに食いつくな」真帆をうらめしく見ると、岡部はレスキネン教授に言った。「あの、教授！アマデウスの記憶を外部から改竄（かいざん）することは可能なんですか？」

岡部が質問すると、レスキネン教授はポケットを探りはじめた。耳に翻訳機がついていない。

『私の記憶の改竄ですか……？　理論上は可能です』クリス自身が答えた。『たとえば、私が自分の名前を〝クリスティーナ〟であると思いこむ。そう仕向けることもできるでしょう。ただ、ふつうのデータとちがって記憶はとても複雑です。いまのところ改竄に成功した例はないと認識しています』

「たとえば……催眠術なんかにはかかるのか？」

『どうでしょう……？　ただ、仮に記憶の改竄に成功をした場合でも、私がそれに気づいて、自分で修復してしまうでしょう。私は、私以外アクセス不可の領域にログをとっていますから。つまり秘密の日記ですね。その日記と、現在の記憶との間に不自然な齟齬(そご)があれば、私は高い確率で疑問をいだきます』

　つまりパソコンでいえばバックアップフォルダがあって、つねにデータの控えをとっている。そのファイルは利用者には不可視で、アクセスできるのはシステム本人だけだ。

『さらに言えば、私の記憶データは定期的にバックアップされています。自己修復が不能なほどに改竄されたとしても、復旧することが可能なんですよ。最終バックアップから改竄された時点までの記憶は、なくなってしまいますが』

　復元ポイントだ。仮にシステムごとアマデウスが改竄されることがあっても、あらかじめシステムとは別のストレージなどに切り離して保存したデータの時点にもどせば、その間の記憶は失われるが彼女(クリス)はいつでも復旧できる。

　妙な気分だった。

事前に真帆が言っていたように、だんだん本物の紅莉栖とチャットをしているような気分になってきていた。科学の話になると饒舌(じょうぜつ)になるところなど、本物とよく似ている。

岡部は、あらためてクリスに語りかけた。

「しかし興味深いな……。きみは自分のことを機械として客観的に語ることができている。小説やマンガでよくあるパターンだと、自分は機械ではない、人間だ……とか言いだしそうなものだが」

するとクリスは、画面のなかで、紅莉栖っぽく肩をすくめた。

『それは、まったくナンセンスですね。人間そのものが、自分をハードウェアとソフトウェアの組みあわせとして語るじゃありませんか』

まさに脳の機能をパソコンに喩(たと)えて語るように、か。

『——医学とか心理学とか、そういう名においてね。それと、どこがちがうんです？』

「さすが屁理屈(へりくつ)なら誰にも負けないわね、このコ」

真帆が感心した。

それを聞いたクリスは、クリッとしたCGの瞳で真帆を見つめた。

『ねぇ、先輩？　よけいなお世話かもしれませんけど、口がわるいのをなおしたほうがいいですよ。せっかく春が来そうなのに、嫌われたらどうするんです？』

「だから、その話にもどるのはやめなさいっ」

『けど、私にとっては、いま、いちばん興味があります』

「いちばんどうでもいいことでしょう、そんなのっ」
『これが人生最後のチャンスだったらどうするんですか?』
「あなたこそ、その口をあらためなさいっ」
「Hahahaha!」
レスキネン教授は豪快に手を叩(たた)いて笑いはじめた。この場を和ませる気の利いたジョークなど言えない岡部は、唇をカラカラに乾かして肩を落とすしかなかった。

その後も、レスキネン教授をふくめた3人で、アマデウスのクリスと様々な対話をした。
今日はここまでに、と言われたとき、岡部は寂しさすら感じた。
帰り際に、あらためてレスキネン教授に意思確認をされた岡部は、即答できなかった。
「――テスターをやる気はあるかな?」
それは、あまりにもアマデウスが――クリスが紅莉栖そのものだったからだ。興味とおなじくらい躊躇(ちゅうちょ)が生じた。
「アマデウスには対話サンプルが少なくてね。うちの研究室の子たちを総動員してはいるのだけれどね」
アマデウス・システムは研究段階で、誰彼構わず接触させるわけにはいかない。そこで、クリスの友人だった岡部に、ぜひとも協力してほしいのだと。

「私と教授は、しばらく日本に滞在する予定なの。だからテスターをお願いするのは、そのあいだということになるわね」

具体的なノルマのようなものはなく、気がむいたら話すだけでいい。アマデウス・システムへの接続については専用のアプリケーションを提供する。月に2回程度、テスト経過の報告をすること。

「それと、申し訳ないけれど報酬は出せないんだ。そこもふくめて考えてみてほしい」

レスキネン教授は条件を詰めた。報酬を払うと被験者に義務感が生じて、自然なテストができなくなるからということもあるのだろう。

「…………」岡部は考えた。「俺は……」

いや、答えは決まっていた。ただ決断ができなかっただけだ。

「亡くした友人をそっくりそのまま再現した人工知能(AI)と話をさせる……それはきみにとって、とても残酷なことだとは理解しているつもりだよ」

乗り気でないのなら断ってくれていい、と。レスキネン教授は岡部の心を察した。

岡部は、さっきアマデウスのクリスと交わした最後の言葉を思いかえした。

――『またお会いしましょう、岡部倫太郎さん』

結局……岡部は、そうなることを期待して、ここに足を運んだのだろう。

ノルマはない。数百数千回の試行錯誤もない。

できることを、できることから。

「やります。やらせてください」――

*

……そのときは覚悟を決めて、テスターをひき受けたつもりだった。

まゆり、留未穂、るかと秋葉原駅のヨドバシカメラ側に出たとき、岡部のスマホに着信が入った。

反射的にビクッとする。

また、彼女からだ。

今日だけで、岡部のスマホには何度も彼女からの着信が入っていた。

岡部は、すべてスルーしていた。

なぜって……やはり覚悟が決まってなかったからだ。でも、さすがにこれ以上、無視するのはよくない気がした。岡部はスマホを手にした。

ホーム画面には電話のアイコン、仲間内の連絡に使っているＳＮＳ――ＲＩＮＥのアイコン、そして……。

岡部は画面をタップした。

『――マキセですけど』

昨日インストールした、アマデウス・システムの対話用アプリを起動すると、３ＤモデルのＡＩが表示された。

24時間いつでも、アンテナが立てば、このスマホからヴィクトル・コンドリア大学のサーバーにアクセスできる。
――岡部さんからクリスへ呼びかけることができるのはもちろんだけれど、クリスからあなたに呼びかけてくることもあるから、そのときは、うまく対応して。
真帆に説明されてはいたものの、まさか、こういう感じになるとは……。
岡部にしてみれば電話――女子と通話するなど未経験のデスゾーンだ。用事があるでもなく、オチのない会話を保たせるとか無理難題だ。
『それとも〝クリスティーナですけど〟って自己紹介したほうがよかったですか？』
「…………」
すごく……怒っている気がした。
『テスターの事情は、レスキネン教授や先輩から聞いています。だから最初にひと言、こちらから挨拶しようと思っていたんですが。まさか8回も居留守を使われるとは思いませんでした』
「…………」
『なんで黙ってるんですか？』
それは……。
人通りの多い駅前で、スマホに表示された3Dモデルの女の子を相手にしゃべるのは、いくらここが秋葉原でも痛々しい。

アプリ上のクリスは、スマホの描画性能相応のローモデルになっていて、動きもカクカクしていて、なんだかゲームっぽい。気のせいではなくスマホは発熱していた。
『ま、話す気がないなら、それはそれでいいんですが』クリスは呆（あき）れるばかりだ。『……なんなのよ、せっかくいつも以上に人と話せるチャンスだと思ってたのに。バカみたいじゃない、ったく』
　独り言を聞こえるように言うと、あらためて咳払いをする。
『――ゴホン。いずれにせよテスト中は、私は、あなたといつでも繋（つな）がっていますから。気がむいたら、どうぞ連絡してきてください。こっちも忙しいので、あなたの連絡にいつも出られるかどうかわかりませんけど』
「あ………」
　岡部の秘めた部分に、クリスの態度がふれる。
　昨日の、お行儀がよくて気さくなクリスよりも……。
　不機嫌で強がりで、人一倍、好奇心が強くて、いちいち挑みかかってくる、この――
『それでは、おジャマしました』
　通話は切れた。
　彼女はマキセクリス。
　けれども岡部は、そのむこうに、見えない相手の残り香のようなものを感じた。
　目を閉じて、いなくなってしまった彼女の影をなぞる。
　あの永遠にくりかえされる夏をすごしたラボメンナンバー００４、クリスティーナこと助手……。

「俺は……」
胸が苦しい。スマホを握りしめて立ちつくしてしまった。
この端末とアプリのむこうに、いつも彼女が……。
「凶真……じゃなかった、オカリーン！　どうしたニャー？」
むこうで留未穂が呼んだ。
レスキネン教授は正しかったのだ。アマデウスのテスターになるということは、岡部にとって、ひどく残酷なことだった。
そして、その辛ささえ。
気がおかしくなり声をあげて叫ぼうと、岡部は……紅莉栖を想いたい。
彼女がいる、彼女とともにある未来――
だが紅莉栖を忘れねば、紅莉栖との約束を守れない。
ブレーキとアクセル。理想の幸せをめざそうと、あきらめようと。
紅莉栖を想うかぎり、岡部は、いまいるところから一歩も動くことができなかったのだ。

4

2010／11／29

比屋定真帆は、亡くなった後輩のことを意識する機会が増えた。日本に来たからなのか、アマデウスのクリスと話すことが多くなったからなのか。

それとも――岡部倫太郎という、あの青年と出会ったから？

「私の知らない紅莉栖を知っている人、か……」

はじめて彼と会った日、真帆は彼の前で涙をこぼしてしまった。

初対面の年下の男性に、自分のいちばん弱いところを見られた――ある意味、裸を見られるよりも恥ずかしい出来事で、真帆はぶるぶると首をふって、あのときの記憶をふりはらった。

『さては岡部さんのことを考えていましたね？』

「!?」

アマデウス・システムのブース内で、真帆はギクリとしてモニターを見た。

３DモデルのAIは、フフフ、と小悪魔じみた笑みを浮かべている。

「ええ、そうね」真帆は受け流した。「ふしぎだと思わない？　レスキネン教授が、岡部さんをあそこまで買っているなんて。二度しか会ったことのない相手なのに、あなたのアクセス権もわたしてしまったし。信用していいのかしら」

『誠実そうな人でしたが』

「そう？　向上心があるのかないのか……つかみどころがない人だった」

　ときどき応答がしどろもどろになる。日本人男性にありがちな内気（シャイ）な性格かとも思えたが……。
『好きなんですか？』
「あなたねっ」
　真帆はPCモニターに詰めよった。
『別に、とりつくろう必要はないでしょう。昨日は本人の目の前だったから仕方ないにしても、いまは私たち、ふたりきりですし』
　もともと紅莉栖は、堅物そうに見えてゴシップ大好きっ子だった。ガールズトークってやつだ。
「本当に、そんな感情はないわ。岡部さんがどんな人なのかさえ、よくわかっていないのだから」
『なるほど。まあ、そうでしょうね』
　クリスはあっさり納得した。真帆としては、それはそれで釈然としない。
「気になるのは……」
　──紅莉栖と岡部は、どんな関係を築いていたのだろう。
　──紅莉栖は、死ぬまでの日々を、どんなことを思いながらすごしていたのだろう。
　それを、知りたい。
『なんです？』
「……いえ、なんでもないわ」
　真帆は言葉を濁した。

記憶の空白……岡部倫太郎は、日本留学中の紅莉栖のことを知っている。
『先輩。私のオリジナルと岡部さんは、知りあいだったんですか？』
真帆は人工知能に心を見透かされた。
「……どうしてわかったの？」
『岡部さんの話や、先輩の反応などを聞いて判断しました。状況証拠を積みあげただけですが……証明しましょうか？』
「あなたのことだから反証の余地もないのでしょう」
女の勘ということか。それはそれで……。
『相手だけが一方的にオリジナルの私との記憶を持っているのでは、対話に齟齬が出てしまう可能性が高いです』
「それを踏まえた上で、教授は岡部さんをテスターに起用したはず」
『はい』
「彼と話していく上で、どうするのかはあなたに任せる。岡部さんのほうから切りだしてくるかもしれないし。なんなら、あなたから聞いてみてもいいわ」
『ふむん。知らないフリをする……というのは嘘をついているのとおなじことになりますよね』
興味深いデータがとれそうな気がします。クリスは期待しているようだ。
「………」

そう、たしかに興味深い。
ただ、それは研究している側の意見だ。岡部倫太郎という青年にとってはどうだろう。
彼の心の傷に塩を塗ることにはならないのか。そこまで思いめぐらせたところで、真帆は自分が感傷的になりすぎていることに気づいた。
「やっぱり、日本に来たせいなのかもしれないわね……」
来日したとき、真帆は、まっ先に訪れたいと思っていた場所があった。
なのに紅莉栖が亡くなった場所――秋葉原のラジ館には、まだ行くことができずにいた。

5

2010／12／5

タイムトラベラー阿万音鈴羽は、ついに堪忍袋の緒が切れかけていた。

原因は、おなじ部屋（ラボ）にいる青年だ。

橋田至——通称ダルと呼ばれている彼は、まんまるの肥満体をイスに預けて、ゆるゆるリラックスしてモニターにむかっている。昼前にむくりと起きたかと思うと、カップ麺を3つほど平らげつつネットを巡回しはじめたところだ。

「……ん？　お？　おおお!?　なんですとーッ!?　リア充滅せPとぱるてのん氏って夫婦だったん!?　なにそれ聞いてねえし！」

「…………」

「っつーか〝リア充滅せ〟とか名乗ってる本人がリア充じゃん！　リアルに嫁いるとか、きたない、きたなすぐる！」

リア充滅せPは、いわゆるボカロPだ。再生数ミリオン超えの動画がふたつあるほどの人気を誇り、独特の世界観を持つ歌詞に定評があった。リア充を揶揄（やゆ）したり、友人がいないことを自虐的に謳（うた）いあげて、

おなじ境遇にあるユーザーたちの心の支えになっていた。
　彼の動画には、かならず絵師ぱるてのん氏による愛らしいイラストが添えられており、それもふくめて人気を博していた……のだったが。
「ぐぬぬ、ぼっちの味方だと思ってたのに……こんなん戦争だろ、炎上必至だろ……うお、と思ったらもう@ちゃんもツイぽも炎上してた件について！」
　@ちゃんねるは巨大掲示板、ツイぽは短文ブログ形式のSNSだ。
「──僕としたことが出遅れたっ！　これまでの流れをちゃんとチェックしないと」
「父さん！」
　鈴羽は声をあげた。
「はい？」
　至が、おさげ髪の娘に声をかえす。
「いいかげんにしなよ。1日中ゴロゴロして食べるか、ネットを見るかゲームをしてるかばっかり。即席麺やお菓子ばかり食べてると体に病変を生じるって警告しても、なおそうともしない」
　デスクにはスナック菓子の食べこぼしが散らばっていた。いくら掃除をしても、至はせっせとダニとゴキブリにエサをふるまいつづけている。
　鈴羽と至は、上背は数センチしかちがわない。なのに目方は、たっぷり倍だ。

そして鈴羽はデブに偏見があった。食糧難に喘ぐ内戦下の日本で、肥満しているやつは、利権にあずかっている体制側の人間だったから。

「運動だって、しろって言ってるのに全然しない。そんなんじゃ将来——」

だが鈴羽は、父親が自分の説教を聞き流していることに気づいた。眼鏡の奥の視線はモニターに行っているし、カチカチ、マウスをクリックする音がしている。

「話を聞きなさいっ」

鈴羽は背後から父の首筋に、握ったそれを押しあてた。

「ひいい!」

至は両手をホールドアップした。

鈴羽は拳銃を所持している。必要とあらば、いつでもトリガーをひける。

「す……鈴羽。やめてくんないと、父さん……怒っちゃうお?」

「怒られるのは父さんのほう」

「はいスミマセン」至は、あっさりと歳の変わらぬ娘に謝った。「で……でもさ。僕の秘密の仕事、知ってるっしょ? あれけっこう忙しいんだよ。僕ぐらいのハッカーになると引く手あまたで…… 食事も適当に済まさざるをえないっつーか、海外のクライアント相手だと、時差もあって昼夜逆転しちゃうっつーか」

それらしい言い訳を並べはじめる。まったく反省していない。

「未来の父さんも、そんなことばっかり言って母さんに叱られてた」

「…………」

「百歩譲って睡眠周期は仕方ないとしても、これ以上、健康を損ねるような食事は許容範囲外。即刻中止すること……いい？」

「だけど～……仕事もそうだけど、タイムマシンの研究が大変なんだ。癒しが欲しいんだよね、僕」

「そうやって言い訳して、すぐ、だらけようとする。甘えてるよ、父さん」

こんな人が、よく第3次世界大戦を生き抜いたものだ。鈴羽は逆に感心してしまった。

至は、あの夏以来、岡部倫太郎がラボに寄りつかなくなったあとも、ひとりでラボを守ってタイムマシンの研究をしていた。

鈴羽は、研究についてはロ出しをしていない。未来人の助言は、よけいな過去への介入になりかねないからだ。

「父さん……タイムマシンを作るのに、あのタイムマシンを調べたらダメだからね」

「わかってるよ、そんなこと。でも、ときどき自信なくなるんだよね。僕、ほんとにタイムマシンなんて作るん？」

「当然だよ。しっかりして」

鈴羽は至の首筋にあてがったそれ──スプレー缶をひっこめた。

ふりかえった至は目を丸くした。

「ちょっ、てっきり銃だと思ったら、なんというハッタリ！　父さんを騙（だま）すなんて、ひどいお！」

「次は本物使うからね」

「それマジ勘弁」

鈴羽の拳銃の引き金は、とても軽い。

スプレー缶を棚にもどす。その整髪料は……以前は、半ばラボで暮らしていた岡部倫太郎が置いていったものだった。

「マンガとかゲームだとさ。父親を叱る娘ってのは、もっとこう萌(も)えるんだけどなー……鈴羽鈴羽、ちょっとさ……んもう、ダメだよパパぁ、って言ってみてくんない？　できれば甘やかすような口調で」

「………」

「なんでもないでござる」

鈴羽が狙撃手(スナイパー)の視線でにらみつけると、至はイスの上で小さくなった。

ため息をついて、鈴羽はソファーに身を投げた。

天井を仰ぐ。

「どしたん？」

「ううん、なんでも」

「隠してもダメなのだぜ。鈴羽のなんでもない、ってのは話を聞いてほしいって意味っしょ」

「え？」

鈴羽は父である青年を見かえした。えらく、まじめな口ぶりだ。

「ほら、話してみるといいよ」
　鈴羽は、
「その台詞……この前プレイしてた〝ぎゃるげー〟にあったよね。それでフラグが成立するんだっけ？」
「うっ」
　ラボに居候しはじめて3ヶ月あまり。鈴羽は２０１０年のアキバ文化にも、ほどほどに詳しくなっていた。
「父さん……まちがっても、あたしをオトそうとか思わないでよね」
「ねーよ！　実の娘にそんなことしないって」
「本当かな。未来の父さんは、ちょっと怪しかった。あたしが思春期になってからも、よく、いっしょにお風呂入ろうって誘われたな」
「なにそれこわい」
「あたしは軍属だったし、父さんはタイムマシンの開発に追われてたから、いつも、いっしょにいられるわけじゃなかったけど……とにかくベタベタしてきたよ。鬱陶しいくらいにね」
「………」
　至がしょんぼりする。
　さすがに未来のことまであげつらうのは、言いすぎたか。

「父さんはさ、いつも、あたしに言ってくれてたよ。ここは最低最悪の世界線だけど、鈴羽（あたし）が誕生したことだけは最高だ、って。あたし未来の父さんを失望させたくないんだ。だから絶対にオカリンおじさんを説得しなきゃ」

「大丈夫！　失望したりしないって、絶対に」

至は、なにかを他人に任せたとして、それが成功しようと失敗しようと、相手に失望するような男ではなかった。

「けどね、おじさんは、どうしても話を聞いてくれないよ？」

「………」

岡部のことは、鈴羽だけでなく未来ガジェット研究所全体の問題でもあった。

「このままじゃ、おじさんはタイムマシンに乗らない。過去へ行かない。牧瀬紅莉栖を救わない。シュタインズゲートに到達できない」

観測者・岡部倫太郎を、理想のシュタインズゲート世界線に到達させること。

それがタイムトラベラー・阿万音鈴羽に課せられた使命（オペレーション）なのだ。

でも――岡部は、救うべき牧瀬紅莉栖を刺してしまった。

心が折れた〝狂気のマッドサイエンティスト〟は二度とタイムマシンに乗らなかった。

鈴羽は、やむなく、この時代に留まる。

岡部を説得はした。

──数十億人が死ぬことになる、第3次世界大戦を回避するために。

〈リーディングシュタイナー〉を有した岡部でなければ、シュタインズゲート世界線への遷移を認識できない。

──オカリンおじさんでなくてはならない。

あらゆる説得は正論だった……はずだ。

そして正しいがゆえに空々しく響くのみで、責任をひとりで背負いつづけて、ついに心折れた岡部には届かなかったのだ。

鈴羽の願いを受けとめようとすれば、たちまち、いまの岡部倫太郎の心は砕け散る。

それは戦士である鈴羽の基準では、弱さだ。ふぬけだ。

未来の至（ちち）、まゆねえさん、ルミねえさん、るかにいさん……〈ワルキューレ〉の古株たちは、いつだって亡き岡部（かれ）のことを好意的に語っていた。リーダーシップのある不屈の魂を持った男だった、と。なのに……。

いま、ラボの正式な仲間といえるのは、岡部、まゆり、至の3人だけだ。

そして未来ガジェット研究所は活動を停止していた。

「この世界線にいるかぎり、第3次世界大戦で大勢が殺戮（さつりく）される。最悪を変えるために、あたしは来たのに……あたしは、なにもできない運命なのかな」

鈴羽の想いもまた行き場をなくしていた。

…………。

鈴羽には、そして岡部の説得以外にも、この２０１０年の秋葉原でやるべきことがあった。だから毎日のように街を駆けずりまわっている。
鈴羽は捜しつづけていたのだ。そう、もう10年以上……。

あのことは鈴羽の心に澱(おり)となって沈殿していた。

戦時中なら、精神がつねに緊張を保っていたから、このくらいのことで心が乱れることはなかった。でも、この時代の弛緩(しかん)した空気が、逆に疲労を意識させる。
こんな無防備な状態でウトウトしかかっている自分に驚きつつ、誘惑を断ち切ることができなかった。
睡魔に襲われた。
「ひゃぁああぁあ！」
鈴羽は悲鳴をあげた。
首元に身ぶるいするほど冷たく固いものが押しつけられた。
その後の対応は迅速だった。跳びあがると、目の前に立っていた巨体の背後にまわりこみ、腕をひねりあげてねじ伏せた。
「いててててーっ！」
ドクペの缶がふたつ、フローリングの床に落ちて転がった。

「なっ……なにするの、父さんっ！」
「さ、さ、さっきのおかえしだお！」
「ぼーっとしてたから……あやうく殺しちゃうとこだったよ」
「えええー？」
「そういう訓練受けてきたんだから！　シャレじゃ済まないんだって！」
「わ……わかったから放してくだされ、痛いでござるの巻」
　鈴羽は組み敷いた父の巨体を解放した。
　至は腕をさすりながら立ちあがると、ドクペの缶を拾って鈴羽に手わたした。
「つーかさ、あきらめんの早すぎだろ。もうちょっと、がんばってみるのだぜ」
「…………」
　鈴羽はドクペの缶を受けとる。
「たぶんオカリンは疲れて眠ってるだけだから。いまみたいに冷たいドクペでも首筋にあててやれば、跳び起きるんじゃね？」
　心神喪失、PTSD、鬱（うつ）――症状は理解できた。戦場は、それらを生じさせる。ただ鈴羽の生きてきた戦時中の日本では、そうなった人間は淘汰（とうた）されるだけだった。
「――なんせ、ほら、あのオカリンだし」
「うん……」

正直、この父がいなければ鈴羽の心も折れていただろう。父が岡部を信じているから、鈴羽も、この父の言うことを信じることはできた。

と、外の階段をのぼってくる靴音が聞こえてきた。

ヒールの高い靴を履いているのは、このラボに来る女子ではかぎられる。

調子外れな鼻歌がドア越しに聞こえてきた。

父娘は「あ！」っとホームドラマっぽく顔を見あわせた。

「隠れろ鈴羽っ」

「オーキードーキー」

鈴羽は、さっき至を組み伏せたときよりもすばやい動きで、アコーディオンカーテンのむこうの開発室に身を隠した。

鈴羽がデスクの下に潜りこむのと同時に、玄関のドアがノックされる。

「こんにちは～、まゆりちゃ～ん」

鈴羽は息を殺した。応対に出ようとした父が、まごついている様子が音でわかった。

「あー、はいはい。いま出るお」

至がドアを開ける。

鈴羽は呼吸を浅く、気配を消した。狙撃のために3日3晩、背景に溶けこんでライフルスコープをのぞきつづけたときみたいに。

「おお、阿万音氏。今日は、まゆ氏と待ちあわせ？」
「はい。お料理の特訓をすることになっているんですけど……」
来客は、やはり阿万音由季（ゆき）だった。
――母さん……。
鈴羽の母だ。７年後の２０１７年に鈴羽を産むことになる女性だ。
ガサガサというビニール袋の音が聞こえた。料理の特訓……食材を買ってきたのだろうか。
「まゆ氏、来てないんだよね」
「そうですか。ちょっと来るの早かったかな」
カーテンのむこうで話しているふたりは、いずれ契りを結び、子をなす。
鈴羽は、いろんな意味でハラハラしながら聞き耳を立てた。どうやら由季は、料理を、まゆりに教えに来たようだが。
「まあ、そのうち来るんじゃないかな？」
「待っていてもいいですか？」
「もちろん。ここで料理もするんでしょ？」
「はい！　橋田さんも、ぜひ味見してくださいね」
「まゆ氏のは……あんまり食べたくないお」

高校生のまゆりは、鈴羽にとっては意外なことだが、料理といえば冷凍食品のからあげをレンジでチンするくらいしかできなかった。
「大丈夫ですよ。まゆりちゃん、すごく上達してるんですから」
「へ、へぇ……」
至は、あきらかに緊張していた。
鈴羽が知るかぎり、父が、そんな初な態度になる女性は阿万音由季だけだ。
まゆりはラボ仲間だし、メイドカフェでは留未穂と親しく接している。まゆりの友人の女子たちには〝HENTAI紳士〟とかいうおふざけモードで接していた。年齢イコール彼女いない歴ではあるようだが、女性恐怖症とかそういうのではないのだ。
なのに、なぜか阿万音由季の前では…… 。
「うまくやってよ、父さん……」
つい、小声でつぶやいてしまった。
由季とのあいだに自分が生まれることを、至には伝えてある。でも、それが失敗だったかも……と、いまさらにして鈴羽は後悔していた。
至は…… 由季を、変に意識してしまったのだ。
「あの、今日は妹さんはお留守ですか？」
「えっ、あ、うん」

至の妹——とは、ほかでもない鈴羽のことだ。

阿万音由季は、まゆりとその友人を通じて、夏コミマというイベントで至と知りあって交流を持つようになった。鈴羽も、由季と顔を会わせずにいることは難しく……「至の妹の橋田鈴羽です」と自己紹介をしていた。

とはいえボロを出さないためにも、できるだけ母とは会わないほうが安全だ。なので鈴羽は、こうしてコソコソと机の下に隠れている。

「あ、そうそう、どうですこの服?」

いずれは反体制組織の戦士となる彼女も、この時代は、ただの女子大生なのだった。鈴羽にしてみれば、ある程度は予想どおりだった父より、母のギャップに驚いたものだ。

碧(あお)みがかった瞳、透明感のある、ちょっと日本人離れした目鼻立ち。同性から見ても、きれいな人という印象だ。明路大学の４回生で、一度は趣味の仮装——コスプレを引退して就活に専念していたのだが、結局、ガマンできずに復帰したのだという。

「うん、いいよ。すごくいい」

「ホントですか?」

「うはぁ、天使キタコレ(ktkr)!　って感じ」

「ありがとうございます。橋田さんも、おしゃれしましょうよ。ちょっとだけ痩せれば、すてきだと思うな——」

「ハハハ」
「私、本気ですよー？」
ふたりの会話を聞きながら、鈴羽は未来を思いかえした。
由季(はは)は、まだ戦士として未熟だった鈴羽を庇い、戦死した。
そして鈴羽は、至(ちち)と〈ワルキューレ〉の仲間たちの犠牲の末タイムマシンに乗る。
――スズちゃんっ！　かがりをお願い！
脱出させても意味はない。
それでも母は子を逃がしたいと願うものだ。鈴羽の母が、そうだったから。
あのとき――鈴羽とともにタイムマシンに乗りこんだ10歳の少女がいた。
鈴羽は、まゆりに託された。
（かがり……）
それが鈴羽の心に沈んだ澱。
タイムマシンに同乗したまゆりの養女、椎名かがりは――
＊
彼女は、泣いていた。

涙がとまらなかった。まるで缶詰にされたみたいだ。ここは蓋をされた金属の筐(はこ)のなか。目に映るのは、なにを測定しているかもわからない計器の光ばかりで。



２０３６年から１９７５年へ。
タイムコードが示す現在時刻にリアリティはない。密閉された闇に閉じこめられれば、訓練された人間であっても数十分から数時間で精神に異状をきたすという。まして彼女はパイロットではなかった。軍人でもない。ただの10歳の少女だ。
椎名かがり。
名前と名字──ぜんぶくれたのは、まゆり（ママ）だった。

１９７５／８／13

２０３６年から最初のタイムトラベルに成功したあと、阿万音鈴羽は、同乗した椎名かがりを機体内に残して偵察に出た。
１時間ほどしてもどり、生体認証でタイムマシンのハッチをひらく。
ちがう時代の空気と光が、機体内に流れこんだ。
「いつまで泣いてるつもりだ？」
かがりがまだぐずっていたので、鈴羽はすぐ不機嫌になり、ため息をついた。
「……………」
「しっかりしなきゃダメだ。まゆねえさんの気持ちを考えろ」

「ママ……？」

「だから泣くんじゃない。鬱陶しい」

　鈴羽はいらだちを隠さない。

　仲間たちの犠牲の上にオペレーションは発動した。鈴羽とタイムマシンの在るところは〈ワルキューレ〉の4半世紀にわたる闘争の結実であり、希望であり最前線、最終決戦の場だ。

　なのに同行したパートナーが泣き虫（ガキ）というのは、いかにも口惜しい。任務を正しく理解しない者であったことが。

　鈴羽はかがりの前にしゃがむと、膝をつきあわせた。

　告げる。これは何十億人もの命を救うための任務だ、と。

「いいか……？　これからはかがりも〈ワルキューレ〉の一員とみなす。あたしの部下としてあつかう」

　子供だからといって特別あつかいはなかった。10歳にもなれば銃を握り、少年兵として戦場に立たされ、通過儀礼のように人を殺す。遅かれ早かれ、かがりも、そうなる運命にあった。

「──ここは1975年だ。61年前だ。あたしもおまえも知ってる人間は誰もいない。父さんも、まゆねえさんも出生してない」

「しゅっしょう……？」

「生まれていないんだ。つまり誰も、おまえなんか知らないし守ってくれない」

過去の自分に会ってしまうタイムパラドックスの危険はないが、事情を話せば通じる協力者もいなかった。

かがりは心ここにあらずという感じだ。なにか……別のことを考えているようだった。

「ちゃんと話を聞け。自分の身を守るのは自分だけだ。いいな」

──これは自分自身を、最悪の未来から救う任務だ。

10歳のかがりに、そこまで自覚的になることは求めようもない。でも、ただ泣いているだけなら、ふたつしかないタイムマシンのシートに坐(すわ)る資格はない。

「うん……」

かがりは小さく肯いた。涙をこらえようとしたが、うまくいかず嗚咽(おえつ)はとまらない。

それでも鈴羽は、かがりが泣きやもうとする意思を見せたことに好感を持った。

「おまえは賢い子だ、かがり」鈴羽は声のトーンを落とした。「この時代では、あまり時間がない。タイムマシンが誰かに見つかったら大騒ぎだ」

ラジ館の屋上は、めったに人が来るような場所ではなさそうだ。しかし、この時代には協力者がいない。機体の隠蔽は難しく、長居はできなかった。すみやかに任務を達成し、次の時代へとむかわなくてはならない。

「……失敗したら、またタイムマシンで時間をもどればいいんじゃないの？」

かがりがたずねた。

ぐずっていたかがりが、ふいにスイッチが入ったように具体的な質問をしたので、鈴羽はやや途惑う。

「燃料の問題があるんだ。時間跳躍（ジャンプ）できる回数は無限じゃない」

タイムマシンの搭載電源は使いきりだ。再充電はできない。肝心の２０１０年時点で燃料切れでは話にならない。

「そうなんだ……」

「立てるか？」

鈴羽がうながす。かがりはシートから立ちあがった。

――燦。

時間を遡った、という感覚はなかった。

けれども時代が変わった空気に直面する。青いと呼ぶには汚らしく煤（すす）けた真夏の空。吐きだされる黒っぽい自動車の排ガス、粉塵（ふんじん）、光化学スモッグ……。

でも、それでも、

「きれい……」

かがりにとっては初めての空だった。

第３次世界大戦後の東京は、放射能汚染と気象変動がもたらした、晴れることのない雲に覆われていたから。

太陽の光が、こんなに、まばゆいものだとは。

「見るな」鈴羽はかがりの目を手でさえぎった。「太陽を見るな。目を焼かれる」

まさか目を焼くほどの光があるなんて……！

「――あたしが子供のころは、まだ、こんな感じの空だった。少しだけど覚えてるよ」

鈴羽はしみじみとつぶやく。

「空気が美味（おい）しい……」

焼けついたコンクリートの屋上で、かがりは息を吸った。

防塵（ぼうじん）マスクが必要だった２０３０年代に比べれば、１９７５年の東京は清浄そのものだ。

「父さんたちが出会った２０１０年ごろは、もっと世界はキレイだったらしい」

「これよりも……？」

まったく想像もつかないことだ。

「わかるだろう、かがり……？　父さんたちが、どうしてタイムマシンにすべてを賭けていたのか。世界線がどうとか歴史がどうとか、そんな理屈はあとでいい。いまは、ただ、この空の色を守りたいと思えば」

「………」

かがりはポケットからそれをとりだした。

〝うーぱ〟。
色あせた緑色のキーホルダーを、じっと見つめる。まゆりママがくれた宝物だ。
どんな思いで、まゆりはかがりをタイムマシンに乗せたのだろう。母の心情を的確な言葉にするには、かがりは幼すぎた。
外に出ると、鈴羽はタイムマシンのハッチを閉じた。
「かがり、これを見ろ」
鈴羽は1枚の写真を手わたした。
「これ、なに?」
見慣れない機械が写っていた。キーボードと小さなディスプレイが一体になったコンピューター端末だ。
「これはIBN5100っていうレトロPCだ。2036年に存在していたものは、どれも満足に動かない。けれど、この時代なら完動品が入手できる。これを手分けして探すのが、あたしとおまえの最初の任務だ」
「うん」
なにに使うのか、とか、かがりは聞かない。賢いからだ。
「連絡はこれで」鈴羽は小型のトランシーバーをわたした。「通信できる距離はかなり短いらしいから、気休め程度だと思え」
捜索範囲は秋葉原周辺。インターネットが普及するはるか以前であり、この時代の秋葉原については情報が少ない。事前にあたりをつけた店などは鈴羽がまわる。かがりは、このビルの近くを。面倒になるので

警官には近よらない……などの指示を与える。
「90分ごとに、このビルの前に集合。状況を確認。それをくりかえす……いいな？」
「オーキードーキー」
「いい返事だ」
鈴羽は肯くと、かがりの髪をくしゃくしゃと撫(な)でた。
ふたりのタイムトラベラーの任務が開始された。…………

*

「――橋田さん。掃除機はどこ？」
由季の気配に、鈴羽は我にかえった。
アコーディオンカーテンのむこうの、ラボのリビングから足音が近づいてくる。
「えっと、そのカーテンの……って、危なっ！」
「この奥？」
「あー、僕が持ってくるお！」
由季を制して、至が開発室に入ってきた。
掃除機をひっぱり出すとき、デスク下に潜んでいた鈴羽と視線を交わす。

「バレないようにしてよ、父さん」
「オーキードーキー」
小さく小さく声を交わすと、至はリビングにもどった。
どうやら由季は掃除するつもりらしい。例によってラボは散らかっていた。きれい好き——というか世話焼きな由季の性格なら、そう言いだすだろう。
「なんですか、それ？」
橋田が持ってきたものを見て、由季がいぶかしむ声がした。
「『未来ガジェット5号機』。分解すれば、ふつうの掃除機として使えるはず」
ラボの発明品だ。正式名称は『またつまらぬ物を繋げてしまったby五右衛門』……掃除機の排気をドライヤーとして使うものだ。
「お掃除するための掃除機なのに、分解したら、かえって散らかすことになりません？」
「あう……」
「ふふふ。橋田さんって頭がいいのに、ときどき、うっかりなコトしますよね」
「そ、そっかな」
「でも、そういう人のほうが私、好きだな」
「なん……だと……」
至は動揺し、鈴羽はため息をついた。

由季(はは)は、なんだかんだとラボに通って、もうメンバーの一員みたいになっている。なのに至(ちち)の、この意気地のなさときたら……。

「ただ、生活については見なおしたほうがいいと思うんです。お部屋の掃除は、できれば毎日したほうがいいですよ。埃(ほこり)っぽいですし。それだけじゃありません。食事のこともそうです。今日もカップ麺だったんでしょう?」

「なんで知ってるん?」

「お台所に食べ残したまま放置されてます。それに、お菓子もこんなにたくさん……食べすぎだっていつも言ってるのに」

「一応、気をつけてはいるのだぜ？　うん」

「一応じゃダメです。カップ麺やお菓子ばかり食べてると、病気になっちゃいますよ？　あと、少しは運動すること」

…………。

さっき、鈴羽が注意したのとおなじことを由季が言っていた。

やはり母娘か。というか鈴羽が至を叱るのは、夫を叱る妻のマネだったりするわけで。

鈴羽は懐かしさと寂しさを覚えた。

母の胸に抱きついて、いだかれたい。そんな感傷がないわけがない。

由季は、鈴羽を庇って死んだ。そんな拭うことのできない過去を、やりなおせないならば、せめて、なかったことにしたい…………。

「トゥットゥルー♪」玄関のドアがひらくなり、まゆりの挨拶が響いた。「ごめんね～、由季さん。ちょっと遅れちゃった～」

「！」

鈴羽は身をこわばらせた。まゆりのほかに、もうひとりの気配があった。

「まゆりちゃん、こんにちは」由季が応じる。「岡部さんもいっしょだったんですね」

「おっ、オカリンひさしぶりじゃん」

6

遡ること数時間前。

それはアマデウスのクリスの、ふとした発言がきっかけだった。

『――興味深いわね』

アマデウスのアプリを起動した岡部は、話の流れで、つい未来ガジェット研究所のことをクリスに話した。

「なんだって？」

『聞こえなかった？　興味深い、と言ったの』
　画面のなかの人工知能は好奇心丸出しのリアクションをかえした。
「……まさか、行きたい、とか言いだすんじゃないだろうな」
『ぜひ、お願い』
　池袋駅前で、岡部はスマホを片手に天を仰いだ。
「話すべきじゃなかったな……」
　あれからというもの、岡部は、できるだけアマデウスとコミュニケーションをとるようにしていた。こちらからアプリを起動することも、クリスから連絡してくることも。人通りの多い場所でスマホ相手にしゃべるのにも慣れた。
　――エル・プサイ・コングルゥ
　かつて〝鳳凰院凶真〟という人格で中二病全開だったころ、しばしば誰ともつながっていない携帯電話にむかって会話を演じていたときのことを思えば、人工知能であろうとも相手がいるだけましだろう。
　話の内容は、あたりさわりのないことばかりだった。
　ただ、どうしてもα世界線の紅莉栖と話すときのノリを思いだして、つい調子に乗ってしまう。うっかりラボのことを話したら、くいつかれてしまった。
『あんたがいま話したそのラボ、オリジナルの私は行ったことが？』
「ああ……いや」

『はっきりしないわね。どっち？』

「……ないよ」

　紅莉栖がラボメンナンバー００４となってラボに通ったのは、別の世界線でのことだ。岡部は、紅莉栖と自分は友人だったと嘘（うそ）をついている。虚実がないまぜになってしまったわけだが、この設定が破綻しないためには、やはり人工知能のクリスと紅莉栖の話をするのはタブーだと感じた。

「勘違いしているようだから言っておく。ラボといってもラボじゃない、ただのお遊びサークルだ。それに──」

　いま、あそこには鈴羽が住んでいる。もちろん至もいた。ふたりにアマデウスのことを知られたら、事情がひどく複雑になる予感がした。

『言いかけて、やめないでほしいわけだが』

「なんでもない」

『いずれにせよ、私は、外の世界をいろいろ見てまわってみたい。いままでは先輩や教授と話すときも、研究室のなかばかりだったから』

　まさしくアマデウス・システムとは、新しい体験が、いかにして記憶として保存されるのか。その記憶の取捨選択、記憶による本人の変化──それらの過程（プロセス）の実験、検証だ。

「だから、こうして日曜の朝っぱらから池袋を案内してやっているだろう。なんなら乙女ロードまで連れていく覚悟はしていたんだけどな」

『なによ、それ』
「おまえの知らない世界が広がっている場所、だな」
『待って、いま調べた。ふむん……東池袋3丁目……キャリーケース、くされ……腐女子……』
アマデウスはネットワークと接続している。検索すれば調べはつく。だから現代のネット社会において彼女に欠けた知識はほとんどない。その情報を、いま必要としているか、そうでないかだけだ。
「本当に興味がわいたか?」
『なっ……そっ、そんなわけあるか!』
ボーイズラブに興味を持つとか、エッチなのはいけないことです。そんな自尊心の剣と羞恥心の鎧(よろい)を身にまとって性的嗜好を抑えていたようだ、紅莉栖は。
『──とにかく今日は、あんたのラボに連れていってよ。私に話して聞かせた以上、責任をとりなさい。よろしくね』
言うだけ言って、アプリの通話が切れた。
岡部はクリスの足代わりだ……。彼女はネットワークの世界を自由に動きまわれるが、その視点と耳──カメラとマイクは、オフィスにある専用端末とか、アプリがインストールされたスマホに限定される。
「まったく、わがままなやつめ」
ナメられたものだ。本物の紅莉栖ならともかく、人工知能に屈するとか、人類の尊厳にかかわることではないか。

「これは、なんとかすべきかもしれん」
ひとり悶々(もんもん)としていると、声が飛んできた。
「あれ？　オカリン？」
ふりかえると、まゆりだった。
荷物をかかえている。もうすぐ冬コミマだ。コスプレ衣装用の素材かなにかだろう。
「ねえねえ、いま、誰かと話してなかった〜？」
「……大学の、ゼミの友達だ」
岡部は適当にごまかした。
「そっか〜。今日も遊びに行くの？」
「いや、今日は別に予定はない。まゆりは、これからバイトか？」
「ううん、ラボで由季さんと待ちあわせ」
阿万音由季がラボに出入りするようになったことは、大学で、至から聞いている。
鈴羽が２０３６年にタイムトラベルすることは、α世界線でもβ世界線でも、アトラクタフィールドをまたいだ大収束である可能性が高い。
つまり、どんなカタチにせよ至と由季は、結婚するかはともかく娘をこさえる。
あのスーパーハッカーは、なにげに世界線に祝福されたハイスペック・リア充ではないか……。
「ラボか」

タイミングがいいのか、わるいのか。岡部はアマデウスのクリスとした話を思いだした。
「そうだ、オカリンもひさしぶりに、いっしょに行かない？　由季さんの手料理も食べられるよ。それとね……まゆしぃも、がんばって作る予定なのです」
自分のことで精一杯の岡部だったが、まゆりを悲しませるようなことは……できなかった。

*

未来ガジェット研究所は、秋葉原駅から中央通りを歩いて10分あまり、路地を入ったところにある。
「ずいぶんうれしそうだな」
「えっへへー、うん、うれしいよ〜」
まゆりはニコニコしていた。
でも、岡部は吐きそうだ。大檜山（ひやま）ビルの前に立ったとたん胃液が逆流しそうになる。
いいや、場所のせいではないのだ……人だ。阿万音鈴羽だ。
顔をあわせたくない。
できないことは、いまは、がんばらない。そうやって、この数ヶ月をかけて、やっとポンコツなりに動くようになってきた。
「岡部じゃねえか」

　1階の店舗のドアがひらいて、野太い声が飛んできた。
「店長さん、トゥットゥルー♪」
「おう」
　プロレスラーみたいなスキンヘッドの巨体が、まゆりに挨拶をかえした。『ブラウン管工房』の店主で、このビルのオーナー・天王寺裕吾（てんのうじゆうご）だ。
「ふわ～、Tシャツ1枚で寒くないですか?」
「鍛えてるからな」
　大型テレビをひとりで運ぶくらい、わけない。
『ブラウン管工房』は秋葉原でもふたつとないブラウン管テレビ専門店だ。大檜山ビルの2階のワンルームを未来ガジェット研究所のラボとして借りてから、岡部は、この大家のことをミスターブラウンとあだ名をつけて呼んでいた。
　この店にある42型大型ブラウン管テレビが、偶然にも、過去にメールを送るうえで重要なパーツになっていた。『電話レンジ(仮)』は一種のマイクロブラックホール発生装置で、ブラウン管テレビは電源がついているとき、そのリフターとして機能していた。
　いや……もう、そんなことはどうでもいい。
「ひさしぶりだな、岡部。その様子じゃ、ちゃんと大学生やってるみてえじゃねえか」
「どうも」

岡部は緊張しながら挨拶した。それから、まゆりにたずねる。
「──家賃って、どうしてるんだっけ？」
以前は、岡部が天王寺に手わたしだった。そんな大切なことにも注意を払えなくなるほど、岡部は切羽詰まっていた。
「橋田が、ちゃんと振込んでくれてるから安心しな」
天王寺が言った。
至はハッカーのスキルを生かして副業をしている。このラボを維持できる程度の収入はあるのだった。いまは娘の鈴羽のために部屋を借りているつもりなのかもしれない。
「そうですか」
「おう」
「…………」
岡部が緊張を隠せないのには、理由があった。
天王寺裕吾は──この世界線でもＳＥＲＮの工作員（ラウンダー）なのだろうか。
α世界線の彼は、まゆりを殺した桐生萌郁を陰であやつっていた元締めで、通称ＦＢと呼ばれていた。
そんなことを本人にたしかめるわけにもいかないが、先月、ＡＴＦセミナーで見かけていた桐生萌郁と同様、警戒せざるをえない。できれば、まゆりの安全のためにもラボをひきはらいたかったが……。
「じゃあな。あんま暴れんなよ」

岡部が黙っていると、天王寺は店のなかにひっこんだ。
「大丈夫？　やっぱり帰る？」
まゆりが心配そうにする。
「……行こう」
なぜ岡部は、今日、ラボに来たのか。
――まゆりのため……というのも言い訳なのか。
ただ漠然と、このままではダメだという思いはあった。かといって解決法があるわけでもない。自覚したからと言って決断できるわけでもない。
中途半端な気持ちのまま階段をあがる。
「トゥットゥルー♪」
ドアを開けて、まゆりがラボに入った。
ラボには、至と阿万音由季がいた。
「岡部さんもいっしょだったんですね」
「おっ、オカリンひさしぶりじゃん」
部屋を見まわす。鈴羽は――いないようだ。そのことにホッとしている自分に気がつく。
「入っても？」

岡部は遠慮がちに言った。
「自分のラボで遠慮とかねーよ」
「それもそうか」
家賃のことでうしろめたさはあったが、玄関にあがる。我が家だったはずのラボなのに、そわそわして気分が落ちつかない。
岡部は、由季の様子をうかがった。
「由季さん、そのお洋服、可愛(かわい)い〜」
「まゆりちゃんにそう言ってほしくて着てきたんだよ」
「いいなぁ、まゆしぃも着てみたいのです」
「あとで、お洋服とりかえっこしてみる？」
「サイズあうかなあ？」
明路大学の４回生だったか……就活はどうなったのだろう。
由季には、たしかに鈴羽の面影があった。母娘なのだな、と思えるほど。
でも、こんな透明感のある年上美女が至と結ばれるなんて、やはり信じられない。
なにしろ橋田至という男は、２次元３次元の見境なしに「俺の嫁」認定を連発するＨＥＮＴＡＩ紳士のくせに、本物の未来の嫁に対しては、てんで腰がひけていた。最近はすっかり由季のペースにやられているらしく、彼女への苦手意識をＲＩＮＥで愚痴ったりしてくる。

まさか、暗雲が立ちこめている……？
紆余曲折(うよきょくせつ)を経ようと、ふたりは絶対の収束によって結ばれるはずなのだが。恋の行方ばかりは先が見えない。
「お洋服をとりかえるなら、ついでにシャワー浴びたいなぁ。昨日、バイト遅くて……実は、お風呂入ってなくってね」
「まゆしぃも！　うちは冬、お風呂は2日に1回なのです」
「じゃあ、いっしょに入ろうか」
「うんうん」
至がいるのにシャワーを使うほど由季はラボに馴染(なじ)んでいるようだ。でも、どうも、なんか、ちがう。
と、岡部のポケットの中身がふるえた。
着信音。この音は──アマデウスだ。岡部はカーテンのむこうの開発室に駆けこんだ。
「──なんだ？」
『そろそろラボに着いたころかと思って』
画面に現れたクリスが言った。
「おまえ、けっこうヒマなんだな」
誰もシステムにアクセスしていないとき、クリスはどうしているのだろう。真帆の説明では、アマデウスのクリスという視点と人格はひとつだとはいうが……。

『……どうして声を潜める？　もしかして私のことを、お友達には知られたくないとか？』
「あたりまえだろう」
真帆やレスキネン教授から、第三者にアマデウスのことを教えていいのか確認をとっていない。
『まあいいわ。状況はなんとなく理解した』クリスも声を潜めた。『部屋のなかを見せて。スマホのカメラを掲げてくれるだけでいい』
「まったく……」
ため息をつくと岡部はスマホを掲げた。カメラで動画を撮る要領で、ぐるりと1回転する。
『部屋、汚すぎ』
「最初の感想が、それか……」
とはいえ開発室は、たしかに以前よりも散らかっていた。
犯人はあきらかで、増えているのは至の私物だった。アニメやゲームの特典グッズ、フィギュアの箱が目立つ。見おぼえのないパーツや機械類も目についた。
「ダルめ……」
タイムマシンの開発に本腰を入れはじめたという話は、本当だったようだ。
以前、岡部は、タイムマシンをめぐって至と一度だけケンカをしたことがある。
――僕は、ひとりでもやるよ。鈴羽と約束したからね。
その言葉が、岡部の耳にはっきり残っていた。

橋田至というやつは、基本、有言実行の男だ。
岡部としても、そこをリスペクトしている。ゆえに生半可な宣言ではなかった。至は２０３６年までの半生をかけて、タイムマシン開発という困難に挑むことを決断した。
なぜって、鈴羽のために決まっている。
『ごめん、言いなおす。ガラクタだらけね』
「たいして変わらんな」
そして、このクリスにだけは絶対にタイムマシンのことを知られたくない。
『研究室というのはどこも雑然となるものだけど、これはひどい。真帆先輩の部屋といい勝負』
比屋定真帆……彼女も、こっち側の住人なのか。そういえば和光のオフィスでも彼女のデスクはとっちらかっていた。
「そういう個人のプライバシーを暴露してもいいのか？」
『あんたからも先輩に言っておいて。部屋はちゃんと片づけたほうがいい、って』
「そんなこと言ったら噛みつかれそうだ」
真帆はビジネスホテルに宿泊しているようだが、部屋の様子を想像するのがちょっと恐ろしい。
『まあ、でも……こういうルームシェアみたいなの？　少し憧れてた。人が集まってるところを見ると居心地はいいんでしょうね』
そう言った、スマホ画面の３Ｄモデルに彼女が重なる。

紅莉栖(クリス)。
α世界線でも、そんなことを話した……気がする。
「クリス……おまえ――」
「おじさん、誰と話してるの？」
ふいにデスクの下から声が飛んだ。
「どわあっ!?」
岡部は、つい悲鳴をあげてしまった。
「シッ！　黙って！」
「おまえ……鈴羽!?」
開発室のデスクの下には阿万音鈴羽がいた。
隠れていた？　なんで？　岡部は混乱した。
「オカリン、どうしたの～？」
まゆりがアコーディオンカーテンをひらいてしまった。
「あれ？　鈴羽さん……？」
由季が橋田妹の姿を目にとめた。鈴羽はバツのわるい顔をした。

＊

『──次のニュースです。…………』
鈴羽は、テレビのボリュームをあげた。会話がシャワー室に届かないようにするためだ。
リビングとはスライドドア1枚で隔てられたシャワー室から、水音と笑い声が聞こえてくる。
まゆりと由季だ。
鈴羽が開発室に隠れていたことがバレたとき、ラボは気まずい空気になった。
で、まゆりが、とっさに気を利かせた。まゆりは由季をシャワーに誘ったのだ。鈴羽もいっしょに3人で、という謎な提案で。
まさか裸のつきあいで、母娘の、ぎくしゃくした関係を解消しようとしたのか……。
半畳ほどしかないシャワー室に3人同時は狭すぎる。鈴羽は断ったわけだが。
「まいったな……」
「鈴羽のせいじゃないお。オカリンがわるいんだ」
「ダルが教えてくれなかったからだろ」
「教えるタイミングなんてなかったじゃん」
岡部がラボに来たときには、すでに由季がいたのだった。
まぁ、誰のせいでもない。間がわるかった。
「──つーかオカリンさ、スマホ片手にブツブツしゃべってたけど、なにしてたん？」

　至がいぶかしむ。
「誰かと話してたよね？」
「……そういうアプリがあって、試しに使ってみたんだ」
　嘘（うそ）はついていない。
「あ、ギャルゲーっぽいやつ？　オカリンもそういうのやるようになったのか。そういうことなら僕のオススメアプリ、教えるお」
　至が勝手に勘違いしてくれたので、とりあえずアマデウスのことはごまかせた。
「あたしが迂闊（うかつ）だったよ。おじさん、さっきは驚かせてごめん」
　鈴羽が言った。
「……そもそも阿万音由季（かのじょ）から隠れる必要があるのか？　妹で通っているんだから」
　コソコソするほうが変ではないか。
「そうなんだけど……母さんがさ、思った以上にあたしとなかよくなりたがるんだ。会話しすぎるとボロが出かねない」
「自分とよく似ている人間が現れたら、嫌悪するか興味を示すかのどちらかだろうな」
「嫌われたほうが、ずっと楽だよ」
「いっそ事実を打ちあけ……るわけにもいかないか」

　鈴羽がタイムトラベラーであることを知っているのは、岡部と至、まゆり……８月21日にラジ館の屋上にいた者と、あとはタイムマシン隠蔽に協力してくれた留未穂だけだ。

「つーか、このままなにも説明しなくていいんじゃね？」至が言った。「阿万音氏は、なんつーか……秘密とか無理に聞きたがるような人じゃないと思うんだよね。鈴羽なら、よくわかってるんじゃないか？」

「たしかに未来の母さんは、そんな人じゃなかったけど」

　阿万音由季という人は、ふんわりした空気感の人だ。

　でも、ちゃんと、なにが大切なのかを見ている。感情にふりまわされない。そして、いざとなれば行動できた。自分の命を抛（なげう）ってでも……それが鈴羽の母親評だ。

「じゃあ大丈夫だって。いずれ時が来たら僕から……ちゃんと説明しとくよ」

「本当？」

　鈴羽はちょっとうれしそうだった。至が男らしいことを言ったからだ。

「ああ」

「わかった。父さんに任せる」

　鈴羽は肯いた。

「じゃ……今後は阿万音氏を露骨に避けるのは、やめるっつーことで」

「おまえが言うなって話だけどな、ダル」

　岡部は茶々を入れた。

「ん？」
「さっきだって、あいかわらず苦手意識、出しまくってたじゃないか、おまえ」
「僕のことはどうでもいいっしょ……いまは」
　…………。
　ぶつっと会話が途絶えた。
　すると声が気になってしまう。女子大生と女子高生が、薄板1枚隔てたむこうでイチャイチャしながらシャワーを浴びっこしているわけだが。
「つーわけで」
　健全な電大生であるふたりは耐え難くなった。至が強引に話題を変えた。
「──ニコ生、見てもいいかな。ブラチューの生特番があるんだ」
　なぜか鈴羽に許可を求める。
「不許可って言っても視聴するんでしょ？」
「うん」
「じゃあ、どうぞ」
　鈴羽は呆(あき)れ半分、あきらめ半分だ。至はPCの前に坐(すわ)ってヘッドフォンをつけた。
「フッ」
「なに、おじさん？」

鈴羽が岡部を見た。
「いや、仲のいい親子だと思ってさ」
「そうかな？」
「ああ。未来でもダルはこんな感じだったんだろ？」
世界人口の半分が死亡した未来――というと地球が壊滅したようにも感じる。被害は主たる戦場になったアジア圏、食糧危機の起きたアフリカなどの新興国に集中していたようだ。文明が滅びてモヒカンのバイク軍団がヒャッハーする世界観が訪れたわけではないのだ。
「もっと痩せてて格好よかったけどね」
「想像もつかないな」
岡部は痩せて格好いい親友を思い浮かべようとしたが、無理だった。
鈴羽と由季は……これからも自然体でつきあえばいいのだろう。
けれども鈴羽と岡部は、無理にでも顔をつきあわせて……嫌でも、とことん話を詰めなくてはならない関係だ。
ふたりは当事者だったからだ。
だからこそ岡部は、そのひと言が口にできない。鈴羽も、そうなのかもしれない。
テレビでは昼のニュースがつづいていた。

『――今日、東京銀座で、フランスのファッションブランド〝ル・パラディ〟のオープニングイベントがおこなわれました』

　女性客が数百人、早朝から並んでいる映像が流れた。

「平和だね」鈴羽は言った。「あたしが物心ついたころには、こんな光景は存在しなかった」

　鈴羽は２０１７年生まれ。２０２５年に死んだという岡部のことは、あまり覚えていないようだが……

そのころには空襲で東京は様変わりしていたらしい。

　着飾った女性たちが、笑顔でインタビューに答えている。

「うらやましいな。彼女たちは誰も殺さなくていいし、誰にも殺されないんだね」

「…………」

「あたしが育った時代はさ、相手が男だろうと女だろうと容赦なく殺さなきゃいけなかった。次には自分の命が終わるかもしれない。そんな恐怖が寝ても覚めてもつきまとってた。恐怖を忘れるためには、自分が殺す側にまわるしかなかったよ」

　それが戦争というもので、鈴羽にとっての日常だった。

　岡部は悪夢のような世界線をわたり歩いてきた。

　それでも、戦闘はあっても戦争は経験していない。その点で岡部はテレビに映っている女性たちとなんら変わらない。

「父さんたちは、タイムマシンのことで反政府側と見なされてね。あたしは軍から離脱して、父さんたちの組織にくわわった。それで治安部隊に追われることになった」

複雑なパワーバランス。露欧米によるタイムマシン大戦、その後の冷戦下において、日本列島は世界の火薬庫となった。

「──それからは、もっともっとひどい戦闘が何度もあったよ。正義のための戦い、なんてキレイな言葉は使いたくない。たくさん殺したし友達や仲間も大勢殺された。そのなかには、あたしの母さんもいた」

ＰＣでニコ生を見ていた至の背が、ぴくっと動いた。

鈴羽は、あえてという感じで語った。

「軍の無人機からあたしを守ろうとして、機銃掃射で死んだよ」

岡部は言葉を失った。阿万音由季の最期を具体的に聞かされたのは、はじめてだった。

いま、そこでシャワーを浴びている彼女が……そんな非業の死を遂げる。

機銃弾を浴びた人間がどうなるか、岡部には想像がつく程度の、よけいな知識はあった。

「この目でズタズタにされていく母さんを見た。この全身で、母さんの生あたたかい血を浴びた」

鈴羽が母親とあまり接したがらないのは、絶対に、そんな未来のことを知られたくないからなのかもしれない。

「ねぇ、オカリンおじさん」

鈴羽は涙ぐむ。

この時代にタイムトラベルしてきてから数ヶ月――この強靭(きょうじん)な戦士も、心はつねにギリギリのところにいた。

「この世界線の行き着く先は、地獄しかないんだ……！　いますぐじゃなくていい。時間切れには、まだ少しだけ時間がある。だからもう一度だけ……考えて、お願い……」

「…………」

「お願いだよ……」

理想への到達をたしかめることは、〈リーディングシュタイナー〉を有する岡部にしか為せない。

わかっている。

「俺は……」岡部は口をひらこうとした。「…………」

理性では、わかっていた。鈴羽の願いを受けとめたい。『中鉢論文』がロシアの手にわたるのを防ぎたい。牧瀬紅莉栖を救いたい。

もしも岡部が過去を変えられたなら――

――死にたく……ない……よ…………。

紅莉栖を刺した。

ナイフを彼女の肉に刺した。好きになるはずの女性の命を、この手で奪った。

「…………！」
おぞましい感覚は、拭えぬ記憶とともに岡部の手から全身へと広がっていく。
寒気。
視界がぐにゃりとゆれた。たまらず口をおさえた。胃の腑がひっくりかえる。吐き気と痛み。
「おじさんっ？」
「大丈夫か、オカリン」
鈴羽と至が案じた。
「……わるい」
鈴羽が持ってきたコップの水を、岡部は安定剤ごと飲み干した。
「ごめん。こんなこと、まだ話すんじゃなかった……」
「いや、たいしたことない。大丈夫だ」
こうして鈴羽と会っても悲鳴をあげなくなっただけ、ましだ。
──『中鉢論文』
紅莉栖の論文を盗んだ、あの男がロシアで自分のものとして発表した論文だ。そこにはタイムマシン理論が書かれていた。
去る7月28日、中鉢教授はラジ館の一室でセミナーをひらいていた。そこを訪ねた娘の紅莉栖から論文を奪った。私欲のために、殺意を持って、娘を。

井崎准教授が言うところのトンデモ科学の系譜の最先端たる『中鉢論文』は、学会ではまったく相手にされていない。中鉢は、渇望した地位も名声も手に入れていなかった。ワイドショーを騒がせていた科学者枠のコメンテイターは、嘘を真実と思いこむことで自己陶酔しているのだろう。

皮肉なことだが、『中鉢論文』――紅莉栖の理論はあまりにも正しく、革命的すぎた。

現在、それが他国に流出することを恐れているロシアは、対外情報庁が中心となって徹底的な情報管理態勢を敷いているらしい。岡部は紅莉栖のタイムマシン論文を読んだことはないが、世間に発表された『中鉢論文』は、おそらく本物の劣化版であり、笑いの種にしかならないものに改変されているのだろう。にもかかわらず、すでに水面下では真の『中鉢論文』をめぐる情報戦が、EUやアメリカとのあいだではじまっている。

このまま世界は第3次世界大戦へと――でも、そのことで思い悩むことさえ辛い。いまの岡部には、薬が効いてくるまでの十数分を、じっと耐えることしかできなかった。

「鈴羽の言いたいこと……気持ち……わかるんだ」

もとより岡部に、鈴羽の行動を否定するつもりなどなかった。未来の自分たちの作戦をジャマする気などあるはずがない。

「…………」

「俺は、何度も世界線を漂流してきた……ここではちがう世界線で、タイムマシンに運命を翻弄される人たちを見てきた。α世界線の、おまえの非業の結末さえ、見てきた」

「…………！」

「俺は……無力だってことを知ってしまった」

世界線。

アトラクタフィールド理論。世界の構造の前で、人は無力だった。

「タイムマシンを使って世界線を改変するのは、アトラクタフィールド理論――宇宙の仕組みから逸脱することだ。俺たち人間が手を出していい領域じゃない」

――神の領分なんだ。

岡部は断じた。α世界線の紅莉栖は、だからこそ世界に殉じた。

「ロシアはタイムマシンで歴史を改変している……！　それは、いいの？」

「どうかな……いくらタイムマシンがあっても収束は回避できないはず」

タイムマシンがあっても、人ひとりの死さえ回避できないのだ。

過程はちがえど世界は収束する。ロシアの勝利はゆるがないし、かといってアメリカを滅ぼすまで勝利することもないのだろう。α世界線の岡部が、数百数千回のタイムリープをくりかえしてもまゆりを救えなかったように。まゆりの死のパターンが変わっただけだったように。

第３次世界大戦の濃度や分布、経過が異なるだけで結果は変わらないのだ。アトラクタフィールドそのものが移動しないかぎりは。

すべて――決まっていることだ。

「神の領分にふれれば、俺たちは、もっともっと残酷な罰を受けることになる」
俺は、そう思う。岡部は語った。
「それが、オカリンおじさんの答えなの？」
「少なくとも、いまはな」
「そう……」
「ただの逃げだ。なじってくれていい」
鈴羽は、まさに、このβ世界線の〝神〟を跳びこえていこうとしている。岡部の言葉は、鈴羽への回答にはならないだろう。
それでも、岡部には。
α世界線の紅莉栖との約束が……美しすぎた。あまりにも辛く、尊く、だからこそ居心地がよかった。

7

2010／12／＊＊

千葉県××市。

造成された住宅地、ゴルフ場、産業廃棄物の集積所——最後の集落から耕作放棄地を抜けると、あたりは山中の景色に様変わりした。長閑（のどか）な田園風景は、たちまち街灯ひとつない鬱蒼（うっそう）とした林道となった。

地図では行き止まり。

道は、だが、ふいに分不相応な高規格で整備されはじめた。幹線として峠を越えるわけでもない道なのに、だ。

さらに山奥へと数百メートル進むと、ぶっつりと、そこで予算が絶たれたかのように道が途切れる。

そこに、施設があった。

高い塀と柵で囲まれた建物。守衛の詰め所がある門には、表札がなかった。

施設ができた当時、地元では、あそこは新興宗教かなにかかと気味わるがるむきもあったようだ。だが、それにしては寺社や神殿といった雰囲気ではない。であれば病棟——だが、そうした施設であれば地元への説明があってしかるべきだ。

施設は外資系企業の日本法人として登記されていた。研究施設かセミナーハウスらしいということで、とくに妙なことも起きなかったことから、その後は話題になることはなかった。税金をきちんと納め、地元の商店にも時折、注文が入るとあってからは、誰も、なにも文句を言う者はいなくなった。ときどき施設から焼却炉の煙らしきものがあがっていたが、このあたりの農家はふつうに野焼きをしていたし、一般家庭や学校でも焼却処分をおこなっていた。廃棄物処理についての法改正後も、基準を満たした焼却炉に更新されている。

施設内部は、少し造作の古い研究所といった印象だ。
セキュリティは厳重で——なにかしらの生化学、医薬分野の研究をしているとわかる。動物実験に使用するラット、そのほかの動物たち。日本では国立感染症研究所と理化学研究所にしかないはずのBSL・4レベルの安全基準を満たした区画を有する施設だった。
非公式で。

別棟。
そこは一種の病棟を思わせる施設だった。清潔感こそあるが、刑務所の独房を思わせる個室群があり、そこに検査服を着た人々が居住している。彼らを、白衣の研究スタッフたちが管理していた。他の建物と決定的に異なったのは、すべての窓に鉄格子が嵌められていることだ。要所には鉄柵のゲートがあり守衛が配置されている。
その守衛がスタン警棒、銃器を装備していることから、ここが尋常ならざる施設であることがあきらかになった。

未明。
連絡を受けて、急遽、車で施設に到着した人物が、担当スタッフと守衛を前に声をあげた。
「いなくなった……？　なにがあったの！」

スタッフは日本人、守衛は白人だ。
「教授、実は……」
守衛がことの経緯を報告する。すると教授と呼ばれた者は、日本人スタッフにむきなおった。
「なぜ、アレを施設から出したの？」
詰問する。
「アレに変化が……！」
研究スタッフは興奮気味に、答えになっていない答えをかえした。
「変化……？」
「アレが知りえないことを口にしたのです！　記憶の断片を読みだしたのかも……！」
スタッフは興奮を抑えきれない様子だった。
「……Amadeusの？」
「はい！　まさに！」
興奮が先走り、いまひとつ要領を得ないスタッフから話を聞きだしながら、教授は、あらためて言った。
「アレは高い適応力を示した被験体だったから」
「はい！」
「だからこそ……！　なぜアレを許可なく部屋から出して、みすみす逃がしたのかと訊(き)いている」
瞳に、たしかに殺気じみたものが宿っていた。

プロジェクトの大きな進展にばかり気が行っていたスタッフは、教授と呼ばれた人物が怒りを帯びていることにやっと気がつき、うろたえた。
「じ……自傷行為を……」
個室の扉を殴りつけて、頭をぶつけはじめたのだという。
どこかに行きたがっていた。救いを求めていた。誰かに会いたがっていた。
動揺のあまりスタッフは個室のドアを開けてしまった。本当に自殺をされてはたまらないという判断だった。
すると被験体は、そのときを狙っていたかのように、驚くべき身のこなしで彼に体当たりをしてＩＤカードを奪い、そのカードキーを用いて屋内のゲートを抜けて逃走した。
「射殺は可能でしたが……」
回収した職員のＩＤカードを手に、守衛は、もう片方の手を腰の拳銃（グロック17）にかけた。
別棟から出られてしまった時点で、ここでは一般職員の目もあり、保護を優先したがために被験体の脱走を許すことになってしまったと主張する。
「その腹をひっこめておけば、走って捕まえられたものを」
「はぁ……」
あからさまな侮辱だったが、言い訳がましい守衛は、だらしなく肥満した体をゆするだけだった。
教授は、さらにスタッフを質（ただ）した。

「ケッヘル（Köchel）は？」
「え……あ………」
自身のミスに気づいたのか、スタッフはいよいよ顔を青くしはじめた。
教授は息をついた。
「アレが、逃げた……」
この施設を出たところで、行くあてなどないはずだ。
とにかくアレは唯一無二の被験体だ。無能なスタッフの処分はあとまわしにして、身柄を確保しなくてはならない。
「捜して。ただし保護を優先……騒ぎになるようなら監視にとどめる」
外国人にしては達者な日本語で、その場にいた者たちに命じる。守衛と研究スタッフたちは肯（うなず）き、行動した。

*

焼却炉には火が入っていた。
この研究施設では生体実験がおこなわれている。マウス、ウサギ、その他の哺乳動物——研究に使用された動物たちは、その後、専用の焼却炉で処理された。ここでは1日あたり2トンの肉と骨を処理できた。

作業員が、死骸の頭部に被（かぶ）せられたスカルキャップをひっぺがした。

腐汁が飛び散り、変色した脳が露出する。

霊長類（サル）だ。

頭につけられていたのは脳波センサー、それも直接、電極を脳に打ちこむための人工頭蓋だった。

人工頭蓋（ブレイン・インターフェイス）——神経細胞群の信号を拾うための装置だ。ドリルで頭蓋骨に穴を開けて、電極を脳に挿入する。脳を刺激するのではなく、内部から脳波を受信するのだ。そうして被験者が「考えただけで」コンピューター制御の義手を動かしたりできる装置は、すでに実用レベルに近づいている。

脳に異物を挿入することは、出血や感染症、免疫反応のリスクが伴う。インプラントに使用する装置には生物適合性がなくてはならない。その装置は、無毒ではなかったのだろう。被験動物の脳は腫れ、膿（う）み、腐っていた。

皮と頭髪、脳組織が付着した人工頭蓋を回収すると、作業員は死骸を炉に放った。

人間（サル）が燃える脂の臭いが鼻をついた。

断章　楽園追放のインデックス（２）

第３次世界大戦の発端となった地、秋葉原。

阿万音鈴羽（あまねすずは）にとっては戦場のイメージが色濃く、臭いが染みついた場所だ。駅前の傾いだ高層ビル、幾度となく死地となった万世橋。神田川にはいつもゴミと死体が積み重なり、気象変動によるゲリラ豪雨が鉄砲水となってそれらを海へと流していった。中央通り沿いの建物には店舗の広告が残置されていた。

橋田至（はしだいたる）――父が、時折ぼうっとそれらの煤（すす）けた美少女キャラクターたちを眺めては「ああ、昔はよかった」と懐かしんでいた姿が思いだされた。

１９９８／８／＊＊

１９７５年から再度タイムトラベルを実行した阿万音鈴羽は、ラジ館前にいた。

23年後、秋葉原は大きく変化した。

電気街というよりはＰＣとゲームの街。マニアむけの高価な品だったコンピューターは、この時代には売れ筋商品となり、中央通りには専門ショップの看板が並んでいた。携帯電話が普及して、インターネット

も常時高速回線が一般化する直前、いわゆるＩＴ革命という変革が起きていた。
　秋葉原のランドマークだったラジ館も、この時代になると、より高いビルがまわりにいくつも建っていた。屋上にあるタイムマシンのことを考えると、鈴羽にとっては居心地がよくない。テナントも様変わりしていた。パーツ屋だけでなく、ホビー、ゲームとかアニメとか父が言うところの〝2次元〟の商品をあつかう店がいい場所を占めていた。「萌(も)え」という概念が秋葉原をおおっぴらに染めたのも、この時代であったらしい。
「父さん……母さん……」
　橋田至と阿万音由季(ゆき)は、もう生まれている。いま、この秋葉原で幼い両親と出会ってしまう可能性は、かぎりなく低いだろうが……。
　ラジ館の屋上にもどると、鈴羽はタイムマシンに駆けよった。
　夜。
　この時代では店舗をまわる予定はなかったので、それらが閉店して人通りが減る時間帯にタイムトラベルした。次の任務だ。すべての作業を手早く済ませなくてはならない。
……………！　……………！
　と、人の動く気配がした。
　タイムマシンのなかからだ。鈴羽は生体認証ロックを解除してタイムマシンのハッチを開けた。
　ヒステリックな声が響いてきた。
「あーもうっ！　訳わかんないっ！」

タラップに足をかけて機内にあがると、かがりが騒いでいた。操縦席についてコンソールをバンバン叩(たた)いている。
「おまえ、なにをしてるんだ!?」
「あっ」鈴羽の顔を見て、かがりは身を縮こまらせた。「ちがうのっ……これは、そのっ……」
「答えろ」
鈴羽はかがりの腕をとって拘束すると、問いつめた。
かがりはタイムマシンを操作しようとしていた。あきらかな造反行為だ。
「だ、だ、だって！　だってっ！」
言い訳をする子供みたいにふるまって許してもらおうとしたようだが、鈴羽が10歳の子供にも容赦しない性格であることを思いだしたのだろう。声をふるわせながら、かがりは抗弁した。
「目を覚ましたら、鈴羽おねーちゃんがいなくて……まっ暗で明かりもつかないし、狭くて怖くて苦しくて！　だから、かがり……ドアを開けたくて！　それで、あちこちいじってるうちに……」
そう言ってポロポロと涙を流しはじめる。
最後には、頭をさげた。
「ごめんなさい鈴羽おねーちゃん、ごめんなさい。でも……本当に怖かったんだ、だから……」
「そうか」
鈴羽はかがりへの怒りと警戒を解いた。

勝手に２０３６年に帰ろうとか、任務を放棄したわけではないとわかったからだ。

かがりは戦災孤児だ。ＰＴＳＤを患っており完治はしていない。暗所や閉所を怖がることがあると、まゆりも話していた。タイムマシンに閉じこめられてパニックを起こしたのは仕方ない。

「かがり、おまえは時間移動のショックで気を失っていたんだよ。だから休ませておいたんだけど……わるかった」

「うわ……暑い……」

置き手紙（メモ）くらい残すべきだった。鈴羽はかがりの手をひいて機体の外へ連れだした。

夜だというのに、立っているだけで汗ばんだ。

「かがり、約束するんだ」鈴羽は言った。「今後、どんなことがあっても操縦席のスイッチに触ったりするな。いいな？」

「うん」

かがりは素直に肯いた。生体認証があるのでタイムマシンを操作できるのは鈴羽だけだと、あらためて言って聞かせる。

「じゃあ、あたしは仕事にかかるから。おまえはそのへんで休んでるんだ。これは適当に食べていい」

購入した飲み物と食糧をレジ袋ごとかがりにわたすと、鈴羽は機内にもどった。

荷物のリュックを置くと、操縦席の下にあるカーゴスペースに頭をつっこむ。

ＩＢＮ５１００。

１９７５年の秋葉原で、鈴羽は首尾よく目的のレトロＰＣを調達できた。
持参した携帯端末をＩＢＮ５１００と接続する。見た目はこの時代の携帯電話に似せてあるが、中身は小型量子コンピューターだ。
タイムマシンから電源をとったＩＢＮ５１００を起動させると、携帯端末の画面にパラパラと数字が羅列されていく。
「なにをするの？」
マシンの外から、かがりがのぞきこんできた。作業しながら鈴羽は応じた。
「『２０００年問題』は勉強したか？」
「施設の学校で、ちょっとだけ」
『２０００年問題』は主としてシステムの西暦表記に起因するトラブルだとされている。コンピューター黎明期(れいめいき)から、様々な制約のかねあいで、多くのデータベースにおいて西暦を下２桁で管理する方式を採用していた。ところが１９９９年から２０００年になったとき、それら古いシステムが不具合を起こすことが懸念されて、いわゆる世紀末論、ノストラダムスの大予言などとあわせてセンセーショナルな社会問題となった。銀行預金が消えるとか、交通システムが事故を起こすとか、核ミサイルが誤発射されるとか。
「──結局、なんにも起こらなかったんでしょ？」
「表むきはね……公表されてないけど、実は当時『２０００年問題』のせいで、いくつかの地域や国に深刻な問題が起きたんだ」

「そう、なの？」
　かがりは意外そうな顔をした。
「問題だったのは、このＩＢＮ５１００なんだよ」鈴羽は語った。「このコンピューターには独自の古いプログラム言語が搭載されてるんだけど、そのプログラムの問題点を技術者たちが修正できなかった。というより、そんな言語で書かれた重大なプログラムが存在すること自体、まったく知られてなかった。第３次世界大戦はタイムマシンの開発競争が発端だけど……もしかすると『２０００年問題』で発生したある事象と、それに付随する対立こそが、もっと深いところの原因である可能性がある」
　それが橋田至の説だった。
　いまの話が10歳のかがりに理解できるとは思えなかったが、だからと言って一から十まで説明するつもりも、鈴羽にはない。
「――しかも西暦２０００年というのは特殊な年でね。すべての世界線が、いったん、ひとつに収束してしまうらしいんだ」
　すべての世界線、すべてのアトラクタフィールドの大収束。
　世紀末は、たしかに特別だったのだろう。
「それに関連して、ＩＢＮ５１００に起因する『２０００年問題』が、あらゆる世界線の因果に重大な影響をひき起こすかもしれない。あたしたちがめざしてる狭間の世界線――シュタインズゲートも例外じゃないはず」

鈴羽はＩＢＮ５１００に接続した携帯端末に目をやった。

至が作成した修正プログラムを、ＩＢＮ５１００用の言語に変換しているところだ。あとは、そのプログラムをコンピューターウイルスとして全世界に拡散させれば、この時代のエンジニアたちが見落としてしまう『２０００年問題』は解消されるはずだ。

携帯端末のサブ画面に〝CONNECT〟の文字が浮かびあがった。

「OK。つながった」

この時代、日本ではＡＤＳＬ回線がテスト運用の段階で、一般ユーザーのネット環境はＩＳＤＮ等を用いた低帯域のダイヤルアップ接続が主流だった。それでも大都市部では、大学や研究所、ＰＣ関連企業などを中心に、常時接続の光ブロードバンド回線が備えられつつあった。なかには無線ＬＡＮを使用している施設さえあったという。

鈴羽は、そのひとつに侵入した。２０３６年の技術と量子コンピューターをもってすれば、20世紀末のネットワークセキュリティなんぞザルだと父は笑っていたが、そのとおりだった。

「未来を変えちゃったら……」

「ん？　なんだ」

かがりはタラップに足をかけて、タイムマシンの機内にあがってきた。

しゃがんで作業をする鈴羽を見おろす。

「タイムトラベルした鈴羽おねーちゃんが、未来を変えたら、かがりたちがいた未来の世界も、ぜんぜん変わっちゃうんじゃないの……？」

意外にも、かがりはさっきの鈴羽の話の、もっとも重要なところを理解したようだ。

つまり、この作戦の目的だ。タイムマシンに乗った者の任務だ。

「そういうことだ」

短い返事に、すべてをふくめる。

過去を改変し、未来を変える。より正しくは世界線を移動させる。

「もう、あの世界は存在させない。あたしたちはシュタインズゲートをめざすために、ここへ来たんだ」

奇跡を起こす。

あの最悪の世界線で生きた自分たちの記憶を、自分たちで消すことで。

「…………」

と、

タイムトラベルしてからずっと、かがりの表情に浮かんでいた冴えない不安の影が、すっと抜け落ちた。

「かがり……？」

まるで悪魔憑き。

かがりは目を見ひらいたまま不気味に表情を失っていった。そして——

「……声」

——タイムマシンは悪いものだ。

カミサマは言っていた。

だから、ちゃんとカミサマのところに置かないといけない。タイムマシンはカミサマのところにないと世界が危ない。

あのとき——

２０３６年のラジ館、タイムマシンの秘密の研究所に、カミサマの天使たちは間にあわなかった。

かがりが、もっと早くカミサマに連絡していれば、まゆりママは助かったのに。でも仕方がなかった。かがりは〈ワルキューレ〉の研究所の場所を、そのときまで知らなかったし、隠し通路を携帯電話で連絡するタイミングもあのときしかなかった。

かがりは、まゆりママを守りたい。

＊

駆けつけた天使たちの銃で、たとえダルおじさんや鈴羽おねーちゃんが撃ち殺されても、まゆりママは助かる。
だってカミサマが、そう言っていたから。

――タイムマシンは悪いものだ。

カミサマは言う。
だから、ちゃんとカミサマのところに置かないといけなかった。
もし、それができないのなら…………。
まゆりママがいなくなってしまう。かがりが大好きなママが。
過去を変えちゃいけない。
未来を変えてはいけないからだ。かがりとまゆりママの思い出を、誰にも奪わせはしないのだ。

――がんばるんだ。

かがりはカミサマの天使なのだから。

＊

「カミサマの、声……聞こえる……」
　つぶやきつづけるかがりを前に、鈴羽は困惑させられた。
「かがり……？」
「ダメだよ。よくないよ……ダメなんだよ、鈴羽おねーちゃん。そんなことしちゃ、いけないんだ」
「おい？」
　鈴羽は作業を中断して、立ちあがると、かがりに手をのばした。
　か、か、か、か、かかった。
　無防備にのばされた腕を、かがりは捌（さば）く。
「っ!?」
　相手のバランスを崩す。体力は関係ない。虚を衝かれた鈴羽のみぞおちに、かがりの肩がくいこむ。
　鈴羽は体を折って、ぶざまにシートに倒れこんだ。
　すかさず、かがりはIBN5100に接続されていた携帯端末をつかむと、ケーブルをひき抜いて床に投げつけた。画面はエラー表示になる。
「おまえっ、なにを――」

答える必要はない。かがりは鈴羽のリュックをつかんで中身をぶちまけた。

携帯糧食、医薬品、パーツ類……自動拳銃。

「やめろっ！」

鈴羽は痛みをこらえ、かがりに飛びついてきた。

かがりはカウンターで当て身をくらわせ、シートに押しもどす。

「…………!?」

苦痛と驚きの表情で固まった鈴羽の眉間に、かがりは銃口をつきつけた。

「動いちゃダメっ！」

グロック17──子供の手には、両手でもあまるほど太い拳銃のグリップを握る。

鈴羽は確認したはずだ。かがりの手が、まったくふるえていないこと。安全装置（セイフティ）を冷静に外したこと。

本気だと。

かがりに銃の使いかたを教えたのは、鈴羽だったのだから。

「いますぐ銃をおろせ。こんなマネはやめろ」

「やめるのは、おねーちゃんのほうだよ！」

「なに……？」

「世界を変えちゃいけないんだ！　おねーちゃんは、おかしいこと言ってる！」

かがりは決意したのだ。

ひとりになっても、カミサマの天使として戦いつづけるのだ。銃を握るのだ。まゆりママを……未来を守るのだ。

「じゃあ、このまま……戦争が起きてもいいって言うのか！」

「そんなのわかんないよっ。かがりは……もとの世界にもどりたいだけだもんっ」

まゆりママのところに帰るのだ。

ちょっとでも変わってしまったらダメだ。あの、まゆりママじゃなきゃ嫌なのだ。

「なら……もう、無理だ」鈴羽が告げる。「あたしたちはタイムマシンで、すでに過去に干渉してる。世界線だってズレてしまってるはずだ。本当の意味であのままの、あの未来にもどれる可能性は――」

「うるさいうるさいうるさい！」

かがりは喚いた。

カンショウ？　セカイセン？　カノウセイ？

だから……なんなんだ。

悪いのはタイムマシンだ。悪いのは……悪いことをしてきたのは、〈ワルキューレ〉だ。

「かがりは、ママを絶対に助けるんだぁぁっ！　この世界を消すなんてダメだよっ！　絶対に、やらせないからっ！」

かがりは銃口を――床に転がった携帯端末にむけた。

「や……やめろ！」

鈴羽の叫びを、発砲音がかき消す。
小型量子コンピューターが砕け散った。
鈴羽の表情に、あきらかな失意と焦りが浮かんだ。
これで『２０００年問題』は解決できない。つまり、かがりが生きてきた未来から、これ以上大きくは変わらないはずだ。
それをたしかめたかがりは、鈴羽に銃口をむけたままあとずさり、タイムマシンの機体から飛び降りた。
「かがりっ！」
「動くな！」
さらに発砲。銃弾はハッチにあたって跳ねる。かがりを追ってシートから起きあがった鈴羽は、怯(ひる)まされた。
「かがりっ！　やめろっ――」
声をあげる鈴羽をあとに、かがりは走りながらレジ袋を拾うと、ビルの屋上扉を開け、脇目もふらずに階段を駆けおりた。
もう二度と、もどってくるつもりはなかった。

4章　閉時曲線のエピグラフ・後

2010／12／10

1

阿万音鈴羽（あまねすずは）は秋葉原の夜景を見わたした。

２０１０年――ラジ館の屋上からの景色は、また変わった。そして、この後４半世紀をかけて、さらに破滅的に変わるだろう。

ほかの人と、ちがう時間を生きている。

孤独感。

８月からの数ヶ月間、鈴羽は連日、秋葉原を歩きまわっていた。人を捜していたのだ。

椎名(しいな)かがりは迷子になった。

1975年でIBN5100を入手したあと、鈴羽は次の任務にむかった。1998年へ——そこで、かがりは失踪した。任務を妨害して逃亡したのだ。

時間の迷子。

戦前の日本であれば、10歳の少女が迷子になったとしても安全に保護されている可能性はある。12年もの時間が経過し、いまも、かがりが秋葉原にいるとは思えない。手掛かりはない。それでも鈴羽は、かがりを捜さねばならなかった。

この日の捜索も徒労に終わった。

かがりのことは、至(いたる)にも岡部(おかべ)にも、誰にも話していなかった。もちろん、まゆりにも。鈴羽はひとりで、そのことを抱えこんでいる。

「…………」

1日の終わりに、ラジ館の屋上に立ち寄ることは鈴羽の日課だった。

もし、かがりがもどってくる場所があるとすれば、ここしかない。あとは、父親が研究のカンニングに来ていないかを確認するためでもあったが。

至は、隙あらばタイムマシンを調べて参考にしようとする。タイムパラドックスを起こしかねないからダメだ、自力で開発するように言っても楽をしようとする。

──タイムマシンに関することは、それだけで世界線を変動させかねない。
未来の、至自身が警告していた。
タイムトラベルそれ自体でも、世界線はごくわずかに──岡部の〈リーディングシュタイナー〉すら感応しない微少なレベルで移動している。
このアトラクタフィールド──岡部倫太郎が名づけたところのβ世界線は、露欧米によるタイムマシン開発競争に端を発する第3次世界大戦の世界線だ。タイムマシンの開発にかかわることは、至が好きな〝ぎゃるげー〟で喩えれば、なにかのフラグが立った時点で、過去から未来にわたる大きな歴史改変と世界線変動を生じかねない。
たとえば、このタイムマシンC203が悪意の第三者の手にわたれば、覇権の行方はどうなるかわからない。仮に世界線が移動してしまったとして、その事実を感知、覚えていられるのは岡部倫太郎しかいない。
とにかくタイムマシンに関して、神経質になりすぎるということはないのだ。
ギィ、と屋上の扉がひらく音がした。
薄暮のなか、鈴羽は目を凝らした。現れたのは──猫耳のメイドだった。
「ニャニャ、いたいた～！　スズニャン、こんばんはだニャン♪」
「ルミねえさんか」
鈴羽は警戒を解いた。

「ルミねえさんって誰のことかニャン？　フェイリスはフェイリスニャ♪」

「ルミねえさんは、ルミねえさんだよ」

留未穂（るみほ）は自分を〝フェイリス〟と呼ばせたがる。理由を訊くと「フェイリスはフェイリスだからだニャ♪」という意味不明な答えしかもどってこないので、鈴羽は困っていた。

「ラボに誰もいなかったから、こっちかな～と思ったら正解だったニャ。はい、差し入れ。あまりものでわるいんニャけど」

留未穂が持ってきたのは『メイクイーン＋ニャン^2』印のケーキ箱だった。

「……父さんがラボに不在でよかったよ」

こんなものをひと箱、ぺろりといったら、また太ってしまう。

「ダルニャンじゃなくて、スズニャンへの差し入れニャ」

「あたしに？　なんで？」

「ニャフフ、好きなくせにぃ～♪」

留未穂はニヤニヤ、肘で鈴羽の脇腹を小突いてきた。

「あたしは別にっ」

「アップルタルトにモンブラン……あとイチゴのショートケーキもあるニャン？　ほ～ら、おいしそうだニャ～」

わざわざ箱のフタを開けてケーキを見せつけてくる。

上品な生クリームの匂い。
甘いものなんて……戦時中はギトギトした糧食のシリアルか、たまにシロップ漬けのフルーツ缶が手に入るくらいだった。
「さぁ、いますぐ、おいしく食べるといいニャ～？　心おきなく食べるといいニャ～？」
「ぐ……」
「ほら、あ～んして？　その、かわいいお口に食べさせてあげるニャン♪」
留未穂は、ご奉仕するはずのメイドなのに、こんなふうに調教癖がある。
「冷蔵庫にしまって、明日食べるっ」
鈴羽は戦士の思力で誘惑を断つ。
「ニャハハ。スズニャンはストイックニャン♪」留未穂は朗らかに笑って、鈴羽にケーキ箱をわたした。「賞味期限は明日ニャン♪」
ウインクすると、傍らのタイムマシンを見あげる。
「――ダルニャンのタイムマシン研究のほうは、どうかニャ？」
「がんばってはいるみたい」
留未穂にタイムマシンのことを話したのは当初の計画どおりで、この時代の人間で〈ワルキューレ〉の任務をあかすべき相手は、まず岡部倫太郎、橋田至、そして秋葉留未穂だった。
――彼女には、この途方もない作戦を受けいれるだけの度量がある。

　と、いうのは未来の留未穂本人の見こみであったわけだが。結果的に、それは慧眼（けいがん）だった。

「ルミねえさん、このマシン、まだここに置いておいても？」

「うん。この屋上はフェイリスが借りあげちゃったから平気ニャ。オーナーさんには体感ゲームの研究をしてるって言ってあるニャ。ちょっと苦しい言い訳ニャけど」

　ラジ館は近いうちに建て替えが決まっていた。ビルのオーナーにとっては、テナントの撤退が終わるまでのあいだ屋上の賃料が入るだけでも、うまい話なのだろう。

「助かるよ」

「気にしないでいいニャ。この世界の四精霊（エレメンタル）をバイアクヘーたちの魔の手から救うためなら、フェイリスはいつでも協力するニャン」

「昔から……いや、いまからしたら未来だけど。ルミねえさんの話って、ときどきすごく難しくなるんだよね。いったい何語？」

「考えるんじゃない、感じるのニャ」

「いやいや……」

　鈴羽にとって留未穂という女性は、いつまでも謎多き人だった。

「う～、寒いニャ。フェイリスはおうちに帰ろうかニャ」

「送っていくよ。いっしょに出よう」

「ニャ？　それじゃ、ついでにうちでご飯も食べてくといいニャ」

「そういうつもりで言ったわけじゃないんだけど」

「スズニャンのストイックさを見てると、フェイリスがなんとかしてあげニャきゃーって思っちゃうニャ！　保護欲？　母性？　とにかくそういうのが、かきたてられるのニャ」

秋葉留未穂という人は、そう……親分肌なのだった。

一方で、鈴羽には飽食への恐れがある。

自分だけが、おいしいものを、安全を、あたたかい寝床を……。

節制したからといって未来の仲間が豊かになるわけではない。わかってはいたが、食事も、モノも、心さえ……恵まれすぎることを戦士の本能が拒否する。

そして……。

椎名かがりのことを考えると、ひもじい思いをしているかもしれないと思うと、鈴羽の心は重く沈むのだった。

2

2010／12／15

比屋定(ひやじょう)真帆(まほ)は気も漫(そぞ)ろだった。

その理由は、彼女自身わかってはいた。モヤモヤとおちつかない理由は、それが、あまり認めたくない事実だったからで。

「マホ、準備はできたかい？」

「はい」

レスキネン教授の声に、立ちあがる。

脳科学総合研究機構、日本オフィス準備室。看板だけで、室内は殺風景なままだ。

「ふーむ」

「なんですか？」

「少しはおめかしするかと思ったんだが。マホはマイペースだね」

頭から爪先まで助手を観察してから、アレクシス・レスキネン教授は言った。

真帆は、普段着だ。

「パーティに出席するわけじゃないんですから」

「あのときだって白衣のままだったじゃないか」

「…………！　あれは服を忘れたんですっ」

ふたりの会話は日本語だ。

レスキネン教授は近ごろ、いつも翻訳機を身につけてお気に入りにしている。真帆に対しても日本語で会話をするように求めた。

日本人研究者と接することが増えたからだろうか。考えてみれば、アマデウスのサンプルとなったふたり――比屋定真帆と牧瀬紅莉栖（まきせくりす）は日本にゆかりがある。真帆の思考は英語だが、紅莉栖はそもそも日本人だった。言語や民族によって記憶のメカニズムの〝感じ〟は異なるとも考えられる。レスキネン教授自身、より日本語に興味を持ったのかもしれない。

「さて、クリスと倫太郎（リンターロ）はどういう関係を築いているかな。会うのが楽しみだよ」

　ふたりは、これから東京まで出る予定だ。

テスターを依頼してから2週間あまり。今日、岡部倫太郎から最初の報告を受けることになっている。

真帆がそわそわ、モヤモヤしている理由――だ。

岡部と会うことにではない。実は、クリスと会うことに緊張している。

システム管理者である真帆は、24時間いつでもアマデウスを起動することができた。けれども岡部にテスターを依頼してからは、自分からは、なるべくクリスに接触しないようにしていた。

「教授、ひとつ聞いても?」

「なんなりと」

「なぜ、岡部さんなんですか?」

　真帆は根本的なことをたずねた。問うなら、このタイミングしかない。

「ふーむ」

　レスキネン教授は思いの外、深刻げに考えこむ。

と、例のごとくニヤリとして、
「――嫉妬しているのかい、マホ？」
「それは……っ」
とたんに真帆の顔は熱くなった。つまり……図星なのか。真帆自身がうまく言語化できなかったモヤモヤの正体だった。
要は、自分が知らない牧瀬紅莉栖を知っている岡部への、嫉み。
言い換えれば、あの天才少女が他人を――岡部倫太郎を評価していたことへの……？
「正直、納得はしていません」認めたくはない、けれど。「クリスの話し相手なら、ほかにも適任がいたはずです」
「たとえば、きみとか？」
「いいえ。私は紅莉栖ともアマデウスとも近すぎますから」
研究者みずからがテスターになるのは、実験が意図的になりやすいし、分析に主観が入ってしまう。脳で脳を観察するのは難しいのだ。
「リンターロは、いい青年だよ」
「本気でそう信じているなら教授はお人好しです。人の本質を、一度や二度会っただけで理解することなんて不可能ですよ。もし彼が、私たちに隠れて、ほかの研究者にアマデウスを売りわたしてしまったら？

最初はそのつもりはなかったとしても、お金を前にしたら気持ちがゆらぐことだってあります。それが人間というものです」

「仮にリンターロがアマデウスを売ったとしよう。それで、どうなるかな？　アクセス権を手に入れたその何者かは、クリスとなかよくなって、アマデウスを乗っとったりできるかな？」

「……いいえ」

　その可能性は皆無に等しい。岡部のスマホにインストールしたアプリは、アマデウスとのチャットツールでしかない。ユーザーが操作できるのはタップしてのオン、オフくらい。なんの設定もいじることはできない。

「不正は、ありえません」

「そう、ありえない。なぜならクリスのほうが対話を拒否するだろうからね」

　アマデウス自身が、悪意ある不正な第三者への情報提供を、自分の判断で拒むだろう。そして管理者である真帆に通報するはずだ。

「──アマデウスは、とても面倒くさいシステムだよ」

　レスキネン教授は、彼にしてはめずらしく、ため息をついた。

「教授？」

「うん……なかなか、こちらの思いどおりには動いてくれない。もちろんアマデウスが説得される可能性もあるだろうけれど。そうならないように私は、モデルとなる人格にクリスとマホを選んだ、とも言えるわけ

でね」
　レスキネン教授はウインクした。
「私も紅莉栖も気難しいですからね。やすやすと説得はされないでしょう」
　自負があった。アマデウスのマホは絶対に不正な取引になびかないはずだ。クリスもだ。そもそも人工知能にとって、金銭などの利益供与にメリットはない。
「いかにも、きみたちは本当に容赦がない。これぞ最強のセキュリティだよ。我が研究室が誇る最高のレディさ」
　楽しそうな顔をして、レスキネン教授は笑った。
　人工知能研究は一筋縄ではいかないのだ。だからこそ、おもしろい。
「――そんな彼女たちを、身内だけで独占していても進歩はないだろう？　アマデウスが劇的な進化を遂げるための起爆剤がほしいと考えていたところなんだ。リンターロは聡明（そうめい）だし適任だと思った。クリスの友人でもあったわけだし」
「……………」
　レスキネン教授にとっては、亡き紅莉栖の友人であったことが、岡部倫太郎という青年をプロジェクトに抜擢（ばってき）した理由なのだ。その千載一遇のチャンスを生かせるかは、あの青年次第ということだ。
　手応えがあったテストの答案がかえってくるのを、ワクワクして待つ子供みたいに。

「とりあえず今日の報告のあとで判断してもいいんじゃないか？　クリスがリンターロとすごして、どう変化したのかを見極めてからでね。私たちが見たことのないような、意外な一面をのぞかせてくれるかもしれないよ」

「はい」

そう――だから真帆はモヤモヤする。

クリスが、自分の知らないクリスに変わっていたら。もしかして、それは7月28日に亡くなったときの牧瀬紅莉栖に、少しだけ近づくのではないか……？

3

秋葉原、柳林神社。

岡部倫太郎は夕暮れの境内にいた。

師走も半ば。乾いた寒空のもと、猫たちが残りわずかな日を浴びていた。参拝客の姿はない。るかは、まだ学校から帰っていないようだ。この時分は、よく境内を箒（ほうき）で掃いているのだが。

アマデウスのアプリを起動して話すときは、場所に気をつかう。人の多い場所だと周囲に白い目で見られるし、実家や大学だと気分的に難しい。

その点、この柳林神社は都心にしては閑散としているのだった。

今夜、岡部はテスターの報告をすることになっていた。その前に、クリスに確認すべきことがあった。

アイコンをタップしてアプリを立ちあげる。

『──ハロー』

「話がある」

岡部は単刀直入に切りだした。

『今日は、このあと教授と先輩に会う予定なのよね？　その件について？』

天才少女のＡＩは明敏だった。

「ああ」

『緊張する必要はないんじゃない？　基本的にはログを提出して、あとは、あんたから見た私がどんな印象だったのか、軽く聞かれるぐらいだと思う』

「それだ、ログだよ」岡部はうなった。「それを聞きたかった。もしかして、これまでの会話はぜんぶ記録されてるのか？」

『最初に話したでしょ。私は私以外アクセス不可の領域に記録（ログ）をとっている、って。聞いてなかった？』

「それを今回、提出するのか？」

『たぶんそう』

クリスの記憶日記……。

それは、まさに彼女のプライバシーだったが、レスキネン教授に要請されればクリスとしても拒む理由はない。
「ということは、俺のプライベートのことをおまえにしゃべろうものなら、比屋定さんやレスキネン教授に筒抜けっていうことか！」
『いまさら？　そこ？』
　３Ｄモデルのクリスは呆(あき)れてみせた。
たしかに、いまさらだった。岡部とクリスは、もう半月ほども対話をくりかえしてきた。
　α世界線での濃密な夏に比べれば、はるかに軽薄な時間だったが。それでも岡部は、あれ以来で、もっとも頻繁に誰かと会話をしただろう。
「なあ、俺……なにか、まずいことを話さなかったか？」
『合コンで、ろくに女の子と話せなかったこととか？　実家が八百屋さんなのにナスが嫌いなこととか？』
「ナスは嫌いなんじゃない。苦手なだけだ」
　そんなことなら、どういうことはない。
『あんたが最初に私と話したときに〝クリスティーナ〟って呼んだこととか？』
「それについては忘れてくれ」
　岡部は眉間を指で押さえた。
　やっぱり、なにかボロが出そうだ。岡部は目の前がまっ暗になった。

クリスは大仰に息をついてみせた。
『人の記憶は曖昧なの。時間が経てば経つほど、事実に主観が入りまじる。自分にとっての物語が付与されていく。その内容がポジティブかネガティブかに関係なく、印象的な言葉しか思いださないことも多い。それにひきずられて前後の会話の記憶はねじ曲げられていく』
「は……？　なんの話だ？」
『それが、わるいことだと言ってるわけじゃない。人の記憶というのはそういうものなんだから。でもアマデウスは人じゃない。まだ研究段階の不完全なAIよ。これは教授たちにとって大きな壁のひとつなんだけど……実は、人の持つその曖昧さを、アマデウスは完全には再現できていない』
「……………？」
『つまりね、忘れるという脳の高度な機能。それを完璧には模倣できてないってこと』
「でもレスキネン教授の講演だと、アマデウスは不必要なことは忘れてしまうって……」
『たしかに忘れるわ。けど……言ったでしょう？　私は秘密の日記のようにログをとってるって。結局、そこにすべての情報が残ってしまってるわけ。そして、それをロードしてくれれば、忘却したはずのデータは私の記憶にもどってきてしまう……OK？』
「…………」
記憶をセーブ、ロードすることで、アルツハイマーなど医療分野への応用を探る、というのがアマデウス・プロジェクトの主旨のひとつだ。

つまり岡部がいくら忘れてくれとクリスに頼んでも、だめだ。

『代替案はログを消すことだけど……私にとってログはバックアップでもあるから、絶対無理。仮に一カ所だけ消去してもおなじ。前後の文脈を参照して、その不自然に消去された部分を私は自動的に修復してしまう。それでも、なんとか私の記憶を改竄したいと言うのなら、おおもとのプログラムそのものをいじるしかない』

岡部にそんな権限はない。プログラムだって、ちんぷんかんぷんだ。

そしてクリスは〝クリスティーナ〟の件に関して、岡部が白状するまで、いつまでも忘れず、しつこく聞きたがるわけだ。

まったく、厄介な……。

『で？　どうして〝クリスティーナ〟？』

「本当にひきさがらないな。いますぐ通話を切ってもいいんだぞ」

『はぐらかされると、かえって気になってしょうがなくなるのよね。それとも……あえてそうすることで、私に構ってほしいっていう合図を送ってる？』

「かまってちゃんはおまえだろう。こっちが大学の講義を受けてる最中でも、お構いなしで連絡してくるくせに。RINEでまでコメントしまくってきて」

『う……』

「好奇心旺盛すぎる。そんな調子で無邪気に首をつっこむと、いつか痛い目を見るぞ」

『研究者は、それぐらいじゃないとやっていけないのよ』
　クリスはひらきなおった。
「そんなに〝クリスティーナ〟の件が気になるなら、推論でも立ててみたらどうだ？」
『一応、いくつか可能性を考えてはみた。聞いて』
　ノリノリなAIを相手に、岡部は話につきあうことになった。
『可能性その1。あんたはクリスティーナ・なんちゃらという名前のハリウッド女優が好きである』
「自分がハリウッド女優なみの美貌の持ち主だとでも？」
『見た目は関係ない。おなじ名前の人に親近感を持つのと、似たような意味よ』
「つまり、こう言いたいわけか。〝私は岡部倫太郎から親近感を持たれている〟」
『た……単なる、たとえ話でしょ！』
　岡部がまぜっかえすと、クリスはあたふたした。
「冗談だよ」
　クリス相手だと、つい、からかうような話しかたになってしまう。
　気をつけないといけないとは思うが、紅莉栖（オリジナル）に対するように接してしまう。
『可能性その2。あんたが昔つきあっていた彼女が外国人でクリスティーナっていう名前だった。これについては、あんたの絶望的な英語力を聞くかぎり、絶対にないわね』
　仮定と結論を自炊するな、と。

「もしかしたら日本語ペラペラの金髪ブロンド美女とつきあっていたかもしれないだろう」
『もしかしたの？』
「……すいません」
『可能性その3。オリジナルの私と面識があって、直接あるいは間接的にそう呼んでいた』
「…………」
『これも確率低いでしょうね。そんなふうに呼ばれたら、私なら不愉快にこう答える……〝ティーナってつけるな〟』
「…………っ」
岡部は息をのんだ。
──そう。
紅莉栖は、たしかに、そう言って岡部を叱った。
でも岡部はやめなかった。だって──
「テレくさかったんだ……」
『……どういうこと？』
サイエンス誌に論文が載った天才少女は、岡部にとっては最初から憧れの存在だった。
「素直に名前を呼べないから、テレ隠しで茶化した言いかたをした」
『テレ隠し？』

「ああ。オリジナルだけじゃなくて……おまえと話すのも、だ」
岡部は、暗に牧瀬紅莉栖と面識があったことを認めた。
するともう、流れだす感情をとめられなくなる。
『私……？』
たとえアマデウスのクリスであっても。データに変換された記憶であっても。
「モニターのなかにいる女の子と話すなんて、一度もない経験だったから」
『なっ、ちょっ……』クリスのほうがしどろもどろになった。『それは……どうも』
「……？　なんで赤くなってるんだ」
『赤くなんてなってないし！　ただ……女の子あつかいされるなんて、思ってもみなかったから、ちょっと、びっくりしただけで……』
「…………」
そういう反応の仕方まで、紅莉栖そのままだ。
――好きだった。
別の世界線で交わした、口づけ。
α世界線で、岡部と紅莉栖は、たしかに心と記憶を重ねた。
重ねたのに……。
抱きしめたのに。約束したのに。いいや約束したからこそ。

「俺は、おまえのそういうところが、す――」
岡部は呼吸をとめた。
いま、なにを言おうとした……？
スマホの液晶画面に映った、３Ｄモデルで人のカタチを模した０と１の集合体に、なにを言おうとした？
『……聞いてもいい？』クリスは話を整理した。『私たち、知りあいだったのよね？　つまり、あんたとオリジナルの私が、っていう意味だけど』
答えはＹＥＳ。
岡部の記憶のなかではＹＥＳ、しかし世界はＮＯと告げるだろう。
自分の記憶すら不確かだった。岡部倫太郎の秘密の日記に書かれていることは、すべてが事実であり、すべてが矛盾している。
そこに付与された主観は、想いは――、
『答えたくないならそれでいいけど……どういう関係だったの？　興味ある。〝クリスティーナ〟って呼ばれても私は怒らなかった？　怒ったけれど、それでも笑って許した？』



〈リーディングシュタイナー〉を有する世界の観測者、岡部倫太郎の物語は。

「あ……」

脳裏に散る。

赤く。

ぬるっとした錆(さび)の臭いだ。

——死にたく……ない……よ……。

吐き気。

血まみれの紅莉栖が、凍えた目で岡部を見ていた。

——あんたが私を殺した。

っ……！　っ……！　っ……！　っ……！　っ……！　っ……！

『……どうしたの？　ねえ、顔がまっ青——』

岡部はスマホ画面をタップした。

アプリを切る。切った。アマデウスとの通信は切断された。

「うう……………………………」
空嘔吐（おえ）をくりかえす。

過去は改変できない。収束は回避できない。
——なのに、俺は………。
死んでしまった紅莉栖（クリス）の記憶と、おしゃべりごっこをしている。
クリスと紅莉栖を同一視することで、自分がタイムマシンに乗って、しでかしてしまったことから目をそらそうとした。
ごまかしただ。
「もう……紅莉栖（クリス）とは話すべきじゃない……！」
呼出音が鳴る。
鳴る。
鳴りつづけた。強制切断したのでクリスは気分を害したのだろう。怒っている。
——怒っている？
あれは人工知能、AIだ。その怒りとやらはプログラムなのだ。紅莉栖とクリスは——ちがう。同一視して罪の記憶から目をそむけるな。ただの依存だ。こんなの歪（ゆが）んでいる。もう対話すべきじゃない。呼出音を

聞くだけで、あの赤い記憶がフラッシュバックする。血まみれになって倒れた紅莉栖のイメージが脳に焼きつく。スマホの電源を……切れ……。吐き気をこらえた。アマデウスに依存していてはダメだ。こんなに歪んだ状態に岡部の心と体は耐えられない。そんなの最初からわかっていた。冒瀆（ぼうとく）ではないか。あいつは自分を犠牲にして、岡部をβ世界線に送り帰した。まゆりを救うためだ。岡部を生かすためだ。約束した。生きると。だから岡部は、せめて死ぬまではα世界線の牧瀬紅莉栖に誠心誠意、応えなければならない。裏切るな。媚薬（クリス）にうつつを抜かすな。

　牧瀬紅莉栖は救えない。

　事実を受けいれて生きろ。スマホの電源を切って……着信をシャットアウトしろ。このあとレスキネン教授に会う。そのときに話すのだ。テスターを辞退すると。パニックになるな。おちつけ。スマホの電源を……切れ……！

　……………………

「…………なんだ」
岡部は……画面をタップしていた。着信を受けた。

アマデウスのクリスと出会ってしまったことを、なかったことにはできなかった。

『なんだ？　じゃない。急に切るなんて失礼──』言いかけて、クリスは岡部の変調に気づいた。『……どうかしたの？』

「なんでもない」

『ひどい顔色じゃない』

「本当に、なんでもない。放っておいてくれ。しばらく連絡してこないでくれると助かる……」

『……あまり無理せずに、誰か、知りあいに連絡しなさいよ？』

それじゃ、と。クリスは詮索せず、自分から通話を切った。

まずい。

澱(よど)んだ沼にひきずりこまれてしまった。タイムトラベルから帰還した直後の、最悪の精神状態にもどってしまった。

「あ…………あ…………！」

紅莉栖のことを考えただけで叫びそうになる。まわりに人がいても、奇声をあげて心を気絶させようと。

昨日──12月14日、岡部は19歳の誕生日をむかえた。

あれから数ヶ月も経っているのに、まだ、このザマだった。なにも快方にはむかっていない。

岡部は、ただ後悔する。

「手を出すべきじゃ、なかった……」

4

秋葉原駅前。

ＵＰＸビルにつづく陸橋の上で、安定剤をミニボトルのミネラルウォーターで飲みほすと、岡部は重い体をひきずって歩いた。

レスキネン教授と真帆との約束の時間まで、まだ少しある。それまでに心を回復しなければならない。メンタルクリニックを受診していることは隠したかった。テスターばかりかヴィクトル・コンドリア大学へのルートも閉ざされてしまう気がした。

陸橋から、景色をぼんやり眺める。

クリスマス。

街は浮かれきっていた。深呼吸。吐き気は消えない。頭痛もする。

「………」

あっちの階段をのぼってきた女子ふたり組が、こっちを見ている気がした。

そんなに病人っぽいのだろうか。そのふたりは……岡部の顔をたしかめながら近寄ってきた。ショートカットのコが手をふる。

「やっぱり！　オカリンさんだ」
「こんにちは」
ツレのロングヘアの女性も会釈をした。
「ああ、まゆりの友達の……」
まゆりの友達――コスプレ仲間だった。以前、顔をあわせたことがある。阿万音由季（ゆき）とも友人関係のはずだ。
「大丈夫ですか？　具合わるそうですけど……」
「ああ……」
ショートカットに応じる。まゆりに連絡されたら、あとのフォローが大変だ。
「オカリンさんって、いつも、なんだか辛そうに見えます」
ショートカットが言った。こちらは女子高生で、ロングヘアは女子大生だったはず。
「そう……か？」
「そうだよっ」
はっきりした性格らしい。こういうのは自分に自信があるから言えるのだろうか……。
「フブキちゃん」
ロングヘアの女性のほうが、たしなめる。
ふたりのコスプレネームは……そう、カエデとフブキだ。では、髪の長い女子大生のほうがカエデか。

「でも！　そんなオカリンさんを見てるマユシィも辛そうで……私も、オカリンさんとマユシィのこと見てると泣きそうになって……って、私、なに言ってんだろ」

まったくだ。

岡部は苦笑いを浮かべるしかない。たいして面識もない、一応、年上の男にむかって。

フブキというコは、まゆりのことを、とても大切に思ってくれているのだろう。

彼女たちは、まゆりの味方だ。わるい印象を与えたくない。

「あのっ」フブキが身を乗りだした。「オカリンさんの好きな人って、誰ですか？」

「…………!?」

――好きな……人……。

ふだんなら、どうにでもごまかせたはずだ。

このときの岡部は、よほど心に余裕がなかったのだ。

――好きな人はいる。だが、ここにはいない。

――この世界線では死んでしまった。

――話してはならない。

――彼女たちには関係ない。

さまざまなことが頭に浮かぶ。

質問の答え。質問に答えるべきかの答え。うまくしゃべろうとして、ごまかそうとして、たくさんのことを考えて、先まわり先まわりしようとして、結局、なにをどういう順序で話せばいいのかわからなくなってしまう。そして無口な人と言われる。

うまくいかなくなるときの典型的なパターンだ。そうなると頭はフリーズしたパソコンみたいに動作しなくなる。

「…………っ！　…………っ！」

おちつけ。叫ぶな。悲鳴を噛め。呼吸を殺せ。

「オカリンさん……？」

「ごめんなさい、失礼なこと聞いちゃって！」

フブキとカエデは、岡部が気分を害したと受けとったようだ。

「──あの……でも、私……」

着信。

スマホが鳴る。RINEだ。ラボの連絡用SNS。スマホが鳴る。そのとき──────

世界は、再び、

断章　楽園追放のインデックス（3）

彼女は、椎名（しいな）かがり。
まゆりママとの思い出だけが、家族の記憶だった。

1998／8／＊＊

阿万音鈴羽（あまねすずは）と決別し、かがりはラジ館の屋上から飛びだした。
夜の街に身を投げて。
ほとんどの店舗の閉店時間をすぎており、秋葉原は人通りも減って静かだった。人目を避けて、駅から充分に遠ざかると、かがりは立ちどまった。
夜――時間は……。
昔の日本はボケがつくほど平和だったというが、10歳の子供がひとりで出歩くには、少し遅い時間かもしれない。

所持品をたしかめる。奪った拳銃、レジ袋には飲み物と食糧。鈴羽は大きな札で支払ったようで、お釣りがそのまま入っていた。

「…………」

子供が拳銃を持っているのはマズい気がした。でも武器を手放すのは不安だ。

あたりを見まわす。地域の掲示板に貼られていたポスターを剝がして、紙で拳銃をくるんだ。

「壊したから……世界は変わらない、未来は変わらない……」

量子コンピューターを破壊したことで、『２０００年問題』は解決できなくなった。

だからまだ、ここは、かがりの育った未来につながっている。

――はずだ。うまく理論立てて考えられたわけではなかったが、そういうことだ。この世界の先にいるのは、かがりの知るまゆりだ。

と、道路のむこうを数人が歩いていた。

家族連れのようだ。両親、かがりとおなじくらいの女の子、お兄ちゃん……。

「ママ」

会いたいよ……。

泣きそうになった。それでも顔をくしゃっとして、がまんする。

過去の日本では、とにかく堂々としていることだと注意されていた。困ったような素振りをしたり泣いたりなんかしていると、迷子と思われて警察に通報されてしまう。めんどうは避けろ、と言われていた。

「ここ……どこかな……」
なにしろ風景がまったく変わってしまっていた。不用意に、人に道をたずねるのも避けたい。
運よく川に出た。行きあたりばったりで秋葉原から遠ざかるほうに歩くと、別の駅が見えてきた。
曖昧な記憶を頼りに、かがりは地下鉄の階段をおりた。
改札口。切符売り場で路線図を見あげる。見方がよくわからない。まごまごしていると、どうしたの、と声をかけられた。
びっくりしてふりかえる。
制服――駅員だ。警官でも軍人でも治安部隊でもない。戦争はしていない。誰も、かがりの命を狙ってはいない。
「い……」かがりは声がうわずってしまった。「池袋……！」
そこまで口にしたものの、言葉がつづかない。
「ああ」
駅員は、やさしくほほえんだ。池袋だったらこの電車で行けるけど……と教えてくれた。券売機の前でまごついていると、駅員が買いかたを教えてくれた。
「ありがとう……」
切符と釣り銭を手に、かがりはうつむいた。

見ず知らずの大人が、そんなふうに親切にしてくれた経験があまりなかったので、どうすればいいのかわからない。

とにかく怪しまれず、この場を離れたい。

「ひとりなの？」

「あ……大丈夫です！　池袋から歩いて……家に帰れるので」

とっさに口から出た言葉だったが、結果的に、それで駅員は納得した。

改札を通って、地下鉄に乗ると池袋へむかう。

かがりが施設を出てから、母親と暮らしていた地元だ。もちろん土地勘はある。

池袋駅からは歩くことにした。人混みで酔うほどだった駅前を抜け、廃墟（はいきょ）になる前のサンシャイン60を横目に首都高の高架に沿って歩く。しばらく進み、高架下の大通りから狭い路地に入った。

わかる。

見覚えがあった。もちろん景色はちがうが勝手知ったる感じだ。

「この先……」

家だ。「椎名」という表札をたしかめたとき、かがりは、

ここは、かがりの家だ。

ここは、でも、まだ、かがりの家ではない。

考えを整理しきれないまま、かがりの脳は、10歳の語彙では説明しようがない奇妙な懐かしさに襲われた。

外から家の様子をうかがった。

明かりはついており、住人は在宅のようだった。かがりは門から庭にまわった。

テレビの音と家族の会話が漏れ聞こえる。

母親……そして祖母？　ママは小さいころ、おばあちゃんと暮らしていたはずだ。どんな人なんだろう、ママのおばあちゃん……。

――まゆりちゃん。

家族団欒（だんらん）の会話のなかで、祖母らしき声が名を呼んだのが聞こえた。

そのとき、窓から室内をのぞきこもうとしていたかがりは凍りついた。

「…………！」

束の間。

迷ったあと、目をつぶって、幼い母親の姿をたしかめることなく身をひいた。庭から道路に飛びだす。あとは一目散に、ふりかえらず早足で家から遠ざかる。

「ダメなんだ……！」

口にする。

泣きながら。もう涙はとめられなかった。

「ダメなんだ、過去を変えたら……いけないことなんだ」

――タイムマシンは悪いものだ。

カミサマは言っていた。

「もし、いまここで……私がママに会ったら……！」

ポケットに入れていた、それをたしかめる。

〝うーぱ〟。

緑の妖精のキーホルダー。この大切な宝物がなくなってしまう気がした。ママが、いなくなってしまうかもしれないと思った。うーぱをくれた、あの２０３６年のまゆりママに会えなくなる。

過去を変えちゃいけない。

未来を変えてはいけないから。

かがりは、まゆりママを助けたいのだから。

「カミサマ……かがりは、わるいことはしないよ……！」

泣きながら涙を拭う。

とにかく、ここを離れよう。もう夜も遅い。かがりは疲れていた。どこかで一晩、明かすしかない。

10歳の子供が深夜に店などにいれば通報されかねないことは、鈴羽からレクチャーされていた。かがりは、たしかに賢い子だった。不安や寂しさよりも、それに耐えてリスクを避ける選択をした。

かがりは戦災孤児となってストリートチルドレンに育てられていたときのことを、もちろん覚えてはいないが、彼らが、どんな暮らしをしているかは知っていた。寒い冬はマンホールを開けて下水道で寝たりする。とにかく寝るときは人目につくのを避ける。

いまは夏、凍死することはない。かがりは記憶の奥を浚（さら）った。このあたりで眠れそうなところは……。

眠い……公園とか人が来そうなところはだめだ。…………

＊

2035／＊＊／＊＊

内戦下の東京。

まったく復旧の見こみがない都電荒川線、その近くに荒れた墓地が広がっていた。

雑司ヶ谷（ぞうしがや）霊園。

供えられる花はない。ここに葬られている者の多くは戦前の亡骸（なきがら）たちだ。第3次世界大戦による被害者の大半――数度にわたった東京大空襲と、放射能汚染による死者の多くは、墓すらないまま遺棄され

た。重機で掘った穴に埋められた者はましなほうで、死体は炎と蛆（うじ）に処理されるに任されていた。
あの高層ビルの残骸が卒塔婆（そとば）であり、東京そのものが巨大な墓地となった。
雲は蠢（うごめ）く。
赤黒い空の下、彼女は、そこにいた。
墓前に立つ少女は、まだ十（とお）かそこら。きれいな少女だった。よほど大切に育てられたのか、放射線による皮膚炎の痕は見られない。瞳と髪の色は日本人にしては淡く、光の加減によっては仄（ほの）かな炎のように輝いた。
「かがりちゃん」
少女のもとに女性が歩み寄った。
少女がふりかえる。女性はにこやかに笑むと、娘——かがりの肩に手を置く。ずいぶん若く見える母親だった。
「ママ」
——椎名家代々之墓。
墓前に立つと、束の間、静かに手をあわせた。母親がそうすると娘も倣う。
大空襲が、すべてを変えた。
価値観を破壊した。こんなふうに整備された霊園は、だから、ほとんど唯一といっていい昔と変わらない場所だ。死ねば墓に入る。子が孫が代々墓を守ってくれる。そんな、まっとうな死とむきあうことができ

る清浄な場所だった。
「おばあちゃんと、お話しできた？」
「うん」
ここに眠るのは母親の祖母だ。亡くなったのはずっと昔――２００４年のこと。
「じゃ、帰ろうか。また雨が来そう」
母親は娘の手をとった。
娘は、うれしそうに母親にじゃれつく。ストラップで首から提げた携帯電話が弾んだ。
「まゆねえさん」
むこうの墓石の陰から声が投げられた。
母親が顔をあげる。
「スズちゃん」
現れた女――阿万音鈴羽はポンチョを被ってマスクをつけていた。簡易防護服だ。現在の東京では、長時間の外出をするとき、そうした服装をしなくてはならない。
椎名まゆりの家は雑司ヶ谷霊園の近くにあった。
焼け野原となった東京だったが、このあたりの住宅地は幸運にも火災をまぬがれていた。しかしインフラの復旧は進まず、電力すら安定しない厳しい生活を強いられていた。

あの戦争で、世界人口の半分が喪（うしな）われた。
まともな統計はないが、現在、東京には１００万人ほどしかいないそうだ。生き残った人間も、内戦のつづくこの地に厭気（いやけ）がさして流出していった。日本の各地、さらに海外へと――幸運にも難民として受けいれられたとしても、現地では日本人というだけで差別、蔑視の対象になっているという。
第３次世界大戦の発端になったのは日本人だったからだ。

雨戸が閉ざされたままの居間を、暖色のLEDが照らしていた。
昼間、太陽光パネルで蓄えた電気を使っている。橋田至（はしだいたる）が作ってくれたもので、曇り空でも日常生活には不便のない程度の電力は確保できた。
「こんなにいいの？　わるいよ」
「いいんだ。クリスが手配してくれた」
鈴羽は、持ってきた糧食をテーブルに並べた。米軍のものもあれば日本のもの、他の国のものもある。



世界各国から集積された人道支援物資は、ほぼすべてが横流しされて、闇市で捌かれていた。生産活動の絶えた東京の経済は、こうした品でまわっていた。それが〈ワルキューレ〉のような反体制組織を支えてもいる。役人や軍人は、それで私腹を肥やしている。
鈴羽は、治安部隊と戦闘をくりかえしながら、各所にある組織の拠点を転々としていた。戦士が腰をおちつけることはない。鈴羽にとっては生きることが闘争だ。空には無人機の目がつねに光っている。こうして組織の協力者――民間人の家に匿われることもあった。
「それじゃ遠慮なく……お肉とか、ひさしぶりだねぇ」
スパムの缶を手に、まゆりは、ほくほくと笑んだ。
椎名まゆりは、以前は養護施設の職員という公務員に準じる職にあった。終戦と、その後の内戦によって東京は崩壊。現在、まゆりは職を失っている。
「かがりは、こっちのほうがいいだろ」
鈴羽は糧食のシリアルバーを出して、かがりにやった。
「わーい」
かがりは無邪気によろこぶ。
「かがりちゃん、ありがとうは」
「ありがとう鈴羽おねーちゃん」
シリアルバーを握るなり、かがりは袋を破ってしまった。

「あ、ゴハンの前に、だめよ……もう」
　母親がとめる間もなく、かがりはシリアルバーにかじりついてしまう。
　躾がなっていないとかいう話ではなく、この時代の子供はこうなのだ。食べられるときに食べなければ生き残れない。
　まゆりは缶詰を持って、奥の部屋に歩いた。
　仏壇に、椎名家のものではない位牌が置かれていた。
「オカリン……スズちゃん、来てくれたよ」
　戒名はない。本名と享年が刻まれた霊位の前に、缶詰を供える。
　――岡部倫太郎
〈ワルキューレ〉の初代リーダーだ。鈴羽の父・橋田至の学生時代からの親友で、まゆりの幼なじみ。亡くなったのは10年ほど前だ。強盗に刺されたのだ。襲われたまゆりを庇ってのことだったという。
「鈴羽おねーちゃんは、オカリンさんのこと知っているんだっけ?」
　かがりが鈴羽にたずねた。
　当時、鈴羽はまだ幼く、岡部倫太郎のことはあまり覚えていなかった。面影はかすかに――ひょろっとした、至とは別な意味で不健康そうな人だった。
「前にも話さなかったか」
「んー」

子供というのは、おなじようなことを何度もたずねるものだ。自分が納得できるまで。
「オカリンおじさんが死んだとき、あたしは、だいたいおまえくらいの歳だった。だから、よく覚えていない」
「なんで」
「なんで、って……」説明がめんどうくさかった。「かがりも、あたしくらいの歳になればわかる。人間っていうのは昔のことを忘れてしまうんだ」
「そうなの？」
「そうだよ。記憶喪失みたいにね」
鈴羽は、そう思いたい。
忘れなければ人生は重荷ばかりになってしまう。人の死なんていうものは、特にだ。敵を殺したことも、家族を殺されたことも。
「スズちゃんは、そうなんだねぇ」
「正確には……そのとき、その瞬間に感じた気持ち……？　そういうのが薄らいで、勝手に別な記憶になってしまうってことかもだけどさ」
鈴羽が、母・由季の死の悲しみを、戦士としての義務感に変えたように。
「ママは？」
「うーん……毎日なにをしていたかとか、ふだんのことは忘れちゃうかなぁ。日記をつけていないとね」
まゆりが娘に語りかける。

「にっき……」
「学校の宿題で、日記をつけることもあったなぁ。でも、そういうのはぜんぶ処分したり、戦争で燃えちゃったりで、なくなっちゃうよねぇ……あ、かがりちゃんは、施設にいたときのことはわかるかもね。毎日のことを養護官（ママ）が記録していたから」
　まゆりは娘が幼児だったときのことを思いだしたのか、ほほえんだ。
「どんなこと？」
「体温とか、なにを食べて、なにを残したとか。おねしょをしなくなったのが、いつかとか……」
「えー……そういうのは、どうでもいいよぉ」
　かがりはシリアルバーをかじって、むくれた。
「とにかく、その岡部倫太郎は父さんの親友だった人だ。あたしにとっては……うん、伝説のリーダー？　そんな感じ」
　鈴羽は答えた。
「でも……うれしいなぁ！　やっぱり鈴羽おねーちゃんも……オカリンさんのこと……うん、褒めるんだねぇ」
「食べるのかしゃべるのか、どっちかにしなさい」
　口にものを入れたまましゃべる娘を、まゆりは叱った。
「まゆねえさん……なんで急に、かがりは〝オカリンさん〟なんだ？」

やけに熱心じゃないか、と鈴羽がたずねた。
「あはは……それはねー、スズちゃん」
「知ってる？　ママにとって、オカリンさんは〝彦星(ひこぼし)〟様なんだよ！」
かがりが声をあげた。
「彦星……？」
七夕の日に、短冊に願いごとを書いて、笹(ささ)の葉に吊(つ)るす行事がある。
日本じゅうで、平和、あるいは勝利、大切な人の無事を祈願した短冊が捧(ささ)げられたはずだ。そして、叶(かな)うことなく灰になった。
いま、夜の空を見あげても、星はない。
天の川ではなく漂う死の塵(ちり)が、宇宙の光を覆い隠してしまった。たしか七夕というのは、曇っていると織姫と彦星は逢(あ)えず、願いは叶わないのではなかったか。
「オカリンさんは、ママを助けてくれたの！　だからオカリンがママの彦星様なんだよ……って」
助ける……彦星様……。
「まゆねえさん、それ、いつの話？」
「子供のころだよぉ。まゆしぃが小学生のころ……」
娘の前で、まゆりは、つい自分をまゆしぃと呼んでしまった。
まゆりの話は、こうだ。

小学生のとき、まゆりの祖母が死んだ。大好きだった祖母の死がショックだったあまり、まゆりは声を失ってしまった。文字通り、失語症のようになってしまったのだという。毎日、祖母の墓前で空にむかって手をのばすばかりで、家族にも心を閉ざしてしまったまゆりをつなぎとめたのが、幼なじみで、当時中学生の岡部倫太郎だったのだという。

「ふーん……」

「オカリンは、まゆしぃにとって大切な人なのです。いまでも、ずっとね」

それは甘酸っぱい初恋なのか。それとも大人になってから、まゆりと岡部のあいだには男女の関係があったのか……。鈴羽は、それを聞きだそうとするような軟弱者ではない。

でも、かがりは興味があるのだろう。母親の恋の話は――鈴羽だって、父と母のなれそめは知りたいと思う。

要は、かがりは成長したのだ。

もうじき戦士として銃を握る歳になる。かがりはまゆりの子だ。〈ワルキューレ〉に近すぎた。いつまでもレジスタンス組織のことを隠しとおせるものではないし、もう、おおよそ気づかれてしまっている節もある。かがりは好奇心が強く、妙に勘のいい子だった。

隠せないのであれば仲間にするしかない。さもなければ……まゆりも、そのことはわかってはいるはずだ。

「鈴羽おねーちゃんは、いつまでここにいるの？」

　かがりがたずねた。
「しばらくやっかいになる。いつも言ってるけど……」
「おねーちゃんがいることは誰にも言わないように、でしょ」
「ああ……賢いな、かがりは」
　鈴羽はかがりの髪を撫(な)でた。汚れてギスギスした自分の髪とはちがう、びっくりするくらい柔らかくてキメ細かな髪が、鈴羽は好きだった。
「鈴羽おねーちゃん、まだ治安部隊をやっつけられないの？」
「ん……」
　鈴羽は答えを濁す。
なにがどうなっているのか。なにがどうなって、こうなったのか。
みんな、よく、わかってはいない。ただ日々を、軍の無差別空爆と治安部隊の襲撃に怯(おび)えながら、必死で生き抜こうとしている。
「……治安部隊を倒すために戦ってるわけじゃない」
　物量の差、戦力の差……いずれ〈ワルキューレ〉は全滅する。
「勝てないの」
「ああ」
「じゃ、なんで戦うの？　勝てないのに」

かがりは子供らしい疑問をぶつける。
まったく……そのとおりだと鈴羽は思う。なぜ戦いつづけるのか。
「父さんを守るためだよ」
「ん？」
「かがりだって、まゆねえさん……ママを守りたいだろう？」
「うん！」
かがりは強く肯く。正義感のあふれた瞳で。
口にして、だが、それが正しいのだと思えた。かがりのような子供にわかるように説明できないのなら、それは無意味な戦いなのだろう。
「鈴羽おねーちゃんは、ダルおじさんを守りたいんだね」
「ああ。父さんは……この最悪の世界を救うための研究をしているんだ」
「サイアク……」
「糞(くそ)みたいな、ってことさ」真の目的たるタイムマシン開発のことは口外できず、鈴羽は曖昧に答えた。「父さんがしているのは、戦争のない世界をとりもどすための研究だ。でも……父さんの研究を、よく思わないやつらもいる。治安部隊のやつらやロシア……」
「どうして？　戦争がなくなるのに」
「やつらは、この糞みたいな世界のほうがいいんだよ」

戦勝国、そこにぶらさがり既得権益を得た者たち。糞の穴の住人たちが欲を充たしている。

「かがり……わかんない」

「いいんだよ、かがり……おまえたちみたいな子供が銃をとる世界なんか、あたしは認めない。絶対に……それが、この国をこんなふうにしてしまった、あたしたちの世代の使命なんだ」

空の青さを知らない子供たちに。…………

でも、かがりは。

このとき鈴羽の言っていたことに心から納得はしていなかった。

——サイアクのセカイ。

鈴羽は言った。

でも、かがりにとっては……たしかに生い立ちはサイアクだったかもしれない。

けれども、そんなこと覚えてもいない。

こうしてママと出会えたのだ。大好きな、まゆりママと。

——シアワセなセカイなのに。

*

鳥の羽音で、かがりは目を覚ました。

柵の上に降りたったそいつは、黒い瞳でかがりの様子をうかがっていた。

カラス。

「生きてるよ……！」

ムッとして石を投げて追い払う。びっくりしたカラスは逃げていった。

朝――まだ早い。

身を起こして土を払う。布団は工事現場にあったブルーシートだ。

かがりは霊園で夜を明かした。眠れたのは3時間ほどか。蠅(はえ)はいなかったが、蚊が多くて苦しんだ。

塀と植え込みの隙間から抜けだす。寝ていた場所は、記念碑みたいに巨大な墓石の裏だ。安全な場所だったのかはわからない。夜、墓地を訪れる者などふつういないだろうが、夏場は若者が肝試しに訪れることもあった。

レジ袋の中身をたしかめる。紙にくるんだ拳銃、食糧の残り、お金……両手が空くリュックが欲しいと思った。

体が痒(かゆ)くて、墓地の水道で手足と顔を洗った。残りのパンをかじって水をがぶがぶと飲む。

「………」

墓には花が供えられていた。そんなふうに、きれいに整えられた霊園を見ていると、かがりはふしぎな気持ちになった。

なんとなく歩いていると、足が自然とそちらにむかった。
早朝、まだ人の姿はない。
——椎名家代々之墓。
まゆりの祖母の墓だ。かがりの、ひいおばあちゃんが眠る墓。いいや……亡くなるのは、いまから数年後なのだが。
供える花はなかったが、かがりは未来でそうしていたように墓前で手をあわせた。

過去を変えちゃいけない。
未来を変えてはいけないから。

だから、かがりは、この時代のまゆりママに会ってはいけない。
かかわってはいけないのだ。であれば、この時代で、かがりが行く先は……。
「あそこだ……!」
〝約束の家〟を忘れるわけがない。
かがりは必要なものを考えた。リュック、地図……交通費は足りるだろうか。昼のうちに着かないと、また寝場所に困ることになる。
——どちら様……?

ふいに声をかけられて、かがりはギクッとした。
思わずふりかえる。
老婦人が立っていた。かがりが返事をできずにいると、老婦人はふしぎそうな顔をしつつも墓前に立った。
かがりは、やっと相手が誰だか察した。
「おばあちゃん……？」
と、思わず口にしてしまう。
老婦人は、なぁに、という感じで、あらためてかがりを見た。
「あ……まゆり……ちゃんの、おばあさんですか」
老婦人はにこりとして、そうよ、と答えた。それから、まゆりのお友達かしら、とたずねてくる。
早起きなのね、ラジオ体操？　ああ、でも、いまの子はやらないのよね……と。かがりにはよくわからない話をされた。かがりは、散歩中、と言って話をあわせた。
――過去を変えちゃいけない。
この場を離れなければ、という思い。でも逃げるのも変だろう。それに……このおばあちゃんは、かがりが生まれるずっと前に亡くなっている。なんの根拠もなかったが、まゆりにさえ会わなければ……たいむぱらどっくす、それは起きない。過去は大きくは変わらない……かもしれない。
そもそも、過去を変えることで未来を大きく変えることのほうが、難しいのだ。

だから〈ワルキューレ〉は、あれほど戦いつづけても、かんたんに未来を変えられなかった。〝じゅたいんず・げーと〟？　そんな名前の場所に行けずにいる。

老婦人は手桶（ておけ）の水で墓石を清めた。

夏の日射（ひざ）しで傷んでしまっていた花をとりかえる。それを見たかがりは、もう一方の花立の花を抜いて、手伝った。

あら、ありがとう……と。老婦人は笑った。

「それじゃ……私、行きます」

立ち去ろうとしたかがりを、老婦人が呼びとめた。

いいものあったかしら、と、バッグから小さな箱を出した。おじいさんがね、好きだったのよ……と。その箱をいったん墓前に供えて合掌する。かがりも、あらためて手をあわせた。そのあと老婦人は箱をとって、かがりにわたした。

――お供えものだけど。もう、おじいさんは食べたから、いただいていいのよ。

キャラメルの箱を持たせてくる。かがりは受けとった。物資不足の戦時中に育ったかがりは、物をもらうことに遠慮や抵抗感はなかった。

「ありがとう!　それじゃ……おばあちゃん」

うしろ歩きをしたあと、かがりは小走りで霊園をあとにした。

――おばあちゃんは、まゆりママにかがりの話をするだろうか。

そんな友達はいない、ということで、ふしぎな話だねぇということで終わりだとは思うけど。

まさか、こんなふうに、会えるはずのない人に会えるなんて。

でも、それは、とても怖いことなのだ。

あらためて、かがりは自分がするべきことを考えた。

——カミサマ……。

困ったときは、かならずカミサマのところにもどること。

カミサマは言っていた。

養護施設……でも、まゆりママと出会った養護施設は、この時代、まだあるはずがない。

「いまは1998年……1998年……カミサマは……」

かがりは計算してみた。

カミサマは……カミサマの名前は……。

「きょうじゅは、もう生まれてる」

養護施設のほかに、かがりが知る場所が、もう一カ所あった。

あそこは戦争前から、ずっと古くからあったはずだ。東京ではなくて……そう、千葉だ。何度か、特別な治療を受けるために連れていかれたことがある。

カミサマは言っていた。

——困ったときは、かならず家（ここ）にもどること……。

約束の家。

かがりにとって家といえば、まゆりと暮らした池袋の家、そしてカミサマの家、そのふたつだけだった。

5章　亡失流転のソリチュード

STEINS;GATE 0

1

視界は歪んだ。

目眩――

だが、日常に起きる起立性低血圧、三半規管の失調とはちがっている。

世界が〝時〟とともに歪んだ。

どこかにある自分という視点がねじれて、知覚――考えがおよぶ、思い至るすべての事象がマーブル紙の模様のように、とめどなく流れだしていく。

岡部倫太郎は知っていた。これは――

＊

7

２０１０／12／17

東京電機大学。

講義が終わると、ざわざわと学生たちが教室から出てきた。

――なあ、岡部。おまえ、このあと授業は？

知人のひとりが声をかけてきた。臨時収入があったとかで、大学生にとっては豪勢な店でのメシのお誘いだった。

「俺はやめておくよ。今月、ちょっとピンチだし」

岡部が答えると、「んじゃ、また今度な」――と、そいつは笑って手をふった。

以前の岡部であれば……こんな会話すら考えられなかった。

入学早々、身の置きどころがないなと感じていた大学のキャンパス。でも、いまや居心地はわるくない。

ふつうの大学生らしい生活にも慣れた。

以前の岡部は――自分が、特別だと思っていたのだろう。

いまは、ちがった。知人の輪のなかに入っていければ、なにも橋田至のような腹を割って話せる親友でなくても、自然と居場所はできるのだ。

望んだようにしかならないのだろう。孤独になるのは孤独を望んでいるから……というのは誰の言葉だったか。

人は変われるのだ。

いいや、否応なく変わっていくしかなかった。他人を変えることは、とても難しいだろうけど。ただし変わることは成長とはかぎらない。

キャンパスのあるビルから出ようとしたとき、廊下の人垣のむこうに、知りあいの姿が目に入った気がした。

「……レスキネン教授？」

行きかけた岡部は、立ちどまった。

少し迷って、一応、追ってみたが、見かけた外国人の姿はすでになかった。

学内には留学生も多く、外国人はめずらしくない。それにしたってレスキネン教授ほどの大男、そうそう見まちがえるわけはないのだが……。

考えてみれば、レスキネン教授がこの大学を訪れたとしても、ふしぎはなかった。交流のある井崎准教授と約束があったのかもしれない。

岡部は大学をあとにした。キャンパスのある神田から、今日も秋葉原へむかった。

＊

秋葉原駅、電気街口を出たところに、建て替えの決まったラジ館がある。
以前なら近づいただけで吐き気がした場所だ。そんな岡部が、今日、あえてラジ館を訪れたのは、かがりの捜索のためだった。
昨夜、岡部が自宅に帰ったあと、るかと留未穂から早速、連絡があった。
るかは父親に、留未穂は執事に、それぞれ1998年にラジ館で失踪した10歳くらいの少女について訊いてくれた。やはり、そんな話は聞いたことがないということだった。
ただ、ひとつだけ留未穂が興味深い話をした。

——おさげの幽霊が現れるって話を聞いたニャ。
なんでもその幽霊は、何年かに一度現れて、
小さな女の子を見なかったかと捜してまわってるそうなのニャ。
何年たってもその姿が変わらないから、おさげの幽霊だって言われてるニャ。

「鈴羽のことだな。どう考えても」

1998年から小さなタイムトラベルをくりかえして、かがりを捜したと言っていた。
自分が都市伝説の幽霊になっていると知ったら、鈴羽はどんな顔をするだろうか。

*

ラジ館周辺の店舗を訪ね、路地裏の古くからありそうなパーツ屋などもあたったが、めぼしい成果はなかった。
留未穂とおなじ、おさげの幽霊の話をする人はいた。しかし失踪した10歳の少女そのものについての手掛かりは、ない。
誘拐とか事故とか、事件性のある出来事なら目撃証言もあっただろう。けれども失踪となると別なのだった。椎名かがりが自分の意志で鈴羽のもとを去ったというなら、10歳の子供がひとりで歩いていただけなら誰も気にはとめない。SFの未来人みたいに奇抜な格好でもしていたなら別だが、かがりの服装はふつうのワンピースだったようだ。
考えかたを変えてみる。
椎名かがりは生きている。しかし戸籍も存在しない彼女は、裏の世界の……。
「アンダーグラウンド……ね」
言葉にして、岡部は首をふった。

なんという中二病な考えかただろう。そういうのは、もうやめたのだ。

そういえば……以前にも、こんなふうに足を棒にして秋葉原の街を探しまわったことがあった。人ではなく物――IBN5100を探した。レトロPCに隠された高度なデバッグ機能を利用して、SERNにハッキングをかけるためだった。

あのときは……紅莉栖もいっしょに。

柳林神社にIBN5100が奉納されていると知った岡部は、紅莉栖とふたり、あの重たいPCをラボまで運んだ。

――あんたね、前に進まないでよ。私がうしろ歩きしなくちゃいけないでしょ。横に動きなさいっ。

紅莉栖は文句ばっかり言っていた。

負けん気が強くて、生意気で、そのくせ人一倍、寂(さみ)しがり屋(や)で……。

アマデウス(Amadeus)――紅莉栖(クリス)。

気がつくと岡部は、また無意識のうちにスマホを手にしていた。

昨日も何度かあった着信をとらなかったせいか、今日は一度もかかってきていない。

アイコンを見つめたまま、怠惰な逡巡(しゅんじゅん)に身を置いたのち、岡部はスマホをポケットにしまった。

*

ラボを訪れた岡部を待っていたのは、やつれたアザラシみたいに横たわった至の姿だった。
手掛かりは皆無、ということだ。至も、岡部に委細を訊いてくることはなかった。徒労感であふれた表情から読みとったのだろう。
「考えてみたらさ……これまでだって鈴羽がそれなりに捜してたわけでさ。それを僕ら素人が蒸し返したところで、新しい発見なんてあるわけないんだよな」
それを言ったらおしまいで。あえて口にはしなかったことを、至がぶっちゃけた。
「手伝ってくれてありがとう。捜索は、あたしだけで続行するよ」
鈴羽は、あきらめるつもりはないようだ。彼女はこの数ヶ月、椎名かがりを捜している。戦士とは期待も絶望もしないのだ。
「――かがりの件は、あたしの責任なんだし」
「バカ言うなよ。子供の責任は親の責任だろ常考」
「父さん……」
「……ね、いまのどう？　かなりパパっぽかったと思うんだけど。なんなら『パパ大ちゅきっ』って言って抱きついてくれてもいいのだぜ」
「はぁ……」
そんなふたりを見ていると、岡部はふしぎな気分になった。

未来の父親(ダル)を知っている鈴羽はまだしも、未来の嫁すら定まらない至は、いったいどんな気持ちなのだろうか。処女受胎ならぬ、童貞で、配偶者や恋人よりも前に娘を授かるというのは。

「とにかく僕が言いたいのは、ただ無闇やたらに捜したところでダメだろってこと」

「じゃあ、どうしろと言うんだ？」

　岡部は試みにたずねた。

「餅は餅屋って言うっしょ。こういうのは、やっぱ専門家に……ある程度、裏の世界の情報にも精通してる人に頼むのがいちばんだろ常考」

　裏の世界……岡部の中二病とおなじ思考回路に頭痛がした。

「心あたりがあるの？」

「ちっちっち、父さんを甘く見ないで欲しいな、鈴羽。僕はオタだけど顔は広いのだぜ」

「横幅も広いけどな」

「オカリン、茶化すなっつーの」

「っていうか本気で言ってるのか？　本気で、裏の世界の人間とやらに？」

「ちょっと連絡とってみる」

　言うなり、至はスマホでメールを打ちはじめた。

　まさか……？　そもそも裏世界というのはメールで連絡をとりあえるのか。

「どう思う、おじさん？」

鈴羽は半信半疑といった様子だ。
「実際にそういう人物が本当にいるのなら、頼んでみてもいいとは思うが……」
考えてみれば、「俺の知りあいのスーパーハッカー」がこうして実在して身近にいるのだから、裏世界の人物も実在するのかもしれない。
「よし、送信、と。あとは返事が来れば……」
至がメールを送信すると、10秒とかからずメールの着信がかえった。
「ん？」
「え？　もう返事が来たの？」
岡部と鈴羽は驚いた。
「うん……『いまからそちらにむかいます』って」
「ずいぶんと話が早い相手だな」
「遅いよりはいいんじゃね？」
たしかに、そのとおりだ。至が折りかえしでメールを打つ。その裏世界とやらの人物が、ラボに来るのを待つことになった。
と、騒がしいことに今度は電話が鳴った。
岡部のスマホの着信だった。発信者は……漆原るか。

るかが電話をかけてくることは、あまりなかった。いつもはメールかＲＩＮＥなのだが、急ぎの用件だろうか。

「──もしもし、ルカ子か？」

『あ、岡部さんっ。す、すみません、いま、だいじょうぶですか？』

「ああ、どうした？」

『あの……実はその……ボク、岡部さんに相談したいことがあって……』

「相談？」

『いまから、お会いしてもらえないでしょうか？』

会って相談は構わないが……いまからというのは、ちょっと難しい。るかがこんなことを言うのは気にはなるのだが。

「いまから？　電話じゃ言いにくいことなのか」

『はい……少し……』

どうしたものか。こっちは至と鈴羽に任せてしまってもいいのか……。

「……わるい、ルカ子。これから客が来ることになっているんだ」

岡部はるかの話を留保した。相談内容はわからないが、すぐに人の命にかかわるようなことではないだろう。至の知りあいの裏世界の人間が、どんな相手なのかが気になる。

『そう……ですか……』

「そのあとからじゃ、ダメか？」
『そのあとはボクも用事があって……』
「そうか……」
『えっと、それじゃあ……』
電話を切ろうとしたとき、
「…………！」
鈴羽が、気配に反応した。
階段をあがってくる——聞き慣れないヒールの硬い靴音。
岡部は、無意識のうちに全身の筋肉を緊張させた。
ラボの玄関がノックされた。
「はぁい、どうぞ」
至が応じる。
「わるい、こっちのお客が来たようだ。あとで連絡を——」
だが、そこで岡部の呼吸はとまった。
ラボに現れた、女の姿に。
桐生萌郁（きりゅうもえか）だった。

8

11月の、ATFコンベンション以来だった。
井崎准教授の講演の出欠受付をしていた岡部は、スタッフルームのあたりで桐生萌郁を見かけていた。あのとき彼女は記者として、レスキネン教授に取材を申しこんでいたらしく、真帆と話をしていた。
目が、玄関に立った相手に釘（くぎ）づけになる。
「………?」
萌郁が視線に気づく。
眼鏡の奥の瞳は、あいかわらず生気が感じられず、なにを考えているのか読みとれない。ATFの会場で一瞬、目があったかどうかという岡部のことを、覚えてはいないようだった。もっとも、それさえ演技かもしれない。
――おちつけ、ここはβ世界線だ。
岡部は視線をそらした。
――まゆりは生きてる。
何百何千という記憶の傷が、ひとつひとつ瘡蓋（かさぶた）を剝（は）がされていく。〈リーディングシュタイナー〉は記憶していた。α世界線で、まゆりに収束の死をもたらしつづけた無慈悲なSERNのラウンダーのこと。

――桐生萌郁……また、おまえなのか？　ここでも、また、おまえが……。

近しい者たちに死の予兆をもたらすのか。

萌郁がラボにあがって、坐(すわ)った。

あいかわらず、人と話しているときも携帯電話だけを見て文章を打ちこんでいる。萌郁は――α世界線の彼女だが、重度の携帯依存症で、日常会話にもメールを使うコミュ障だった。

誰に……連絡しているのだろう。

想像したくもなかった。ラウンダーである彼女に指示を出していた人物、通称FBは、岡部もよく知る、とても身近にいる人物だった。このラボの階下にいる……。

それとも……ただの思いすごしで、このβ世界線の萌郁はSERNのラウンダーではなく、ただの雑誌記者なのだろうか。

沈黙。



岡部が無口になる裏では、これだけの思考が駆けめぐっている。

「お茶、どうぞ」

「…………」

至が茶を出すと、桐生萌郁は黙ったまま、ほんの少し頭をさげた。

彼女がラボにいるという現実に、岡部の心臓はしめつけられ、鈍い痛みを刻みつけられる。

なぜ至は萌郁に依頼をしたのだ？　岡部の思考はがんじがらめになった。

「どしたん、オカリン？」

「…………？」

首をかしげて、こちらを見た萌郁から岡部は目をそらした。

――まゆりを殺さない。

――まゆりを殺さない。

仮にだ。この桐生萌郁がラウンダーであったとしても、『電話レンジ（仮）』を廃棄した以上、未来ガジェット研究所とSERNを関係づけるものはない。DメールをめぐってSERNがこのラボをマークすることはない。

「おじさん、顔色わるいよ。大丈夫？」

「気にしないでくれ……　それよりもダル、説明してくれ」

「あぁ、この人は桐生氏。編プロのライターさんだよ」

至が紹介した。雑誌などの記事を作成する編集プロダクションのライター。それが、このβ世界線の桐生萌郁の肩書きだった。

「桐生……萌郁です……」

差しだされた名刺には『アーク・リライト』と会社名があった。社会人で、大学生から見れば大人びて見えたが、萌郁はまだ20歳だ。

至は手短に、萌郁に、学友と妹を紹介した。

「なあ、ダル。どうして……この人と知りあいに？」

岡部は言葉を選びながらたずねた。

「前にさ、桐生氏の担当している雑誌で、アキバ関係の都市伝説をあつかった特集があったんだよね。そのときに僕のバイトのこと取材したいって申し出があってさ。僕のバイトって、ほら、あんま大きな声で言えないやつっしょ？　だから取材に関しては丁重にお断りしたんだけど」

「…………」

「ただ僕って、ふだんから足がつかないように、かなり注意してるんだよね。なのに桐生氏は、その僕にたどりついた。それが気になって……で会ってみたらこのとおり、すげー美人さんだったわけだお。都市伝説を追う美女ライターとか萌えざるをえないだろ常考」

それで積極的にお近づきになった、ということらしい。

デレデレしている至に、鈴羽は顔をしかめている。「母さんという人がありながら」と顔に書いてあった。

「ま、探偵とかってわけじゃないけど、アキバについてはかなり詳しいみたいだし。結構、裏のほうの事情も知ってるっぽいから、頼んでみるのもありかなって」
「人捜し……そう聞いた……」
萌郁は蚊の啼くような声を漏らした。
「ん。実はね……12年前にアキバで失踪した女の子を捜してほしいんだお」
至は話していいことだけを伝えた。
萌郁は黙って、至の話を、ものすごい速さで携帯電話に打ちこんでいく。文章入力に関しては、タッチパネルの精度の関係で、ガラケーのほうがストレスがないのかもしれない。
岡部は萌郁を観察した。
α世界線ではSERNのラウンダーだった女だ。銃で人を殺せる女だ。はたして頼っていいのだろうか。
──まゆりを殺さない。
栗立つ心を静めようとする。とどのつまり岡部にとって、すべての不安の源は、まゆりの安否だった。紅莉栖の命とひきかえにした、守るべき約束であり願いだったから。
「つまり、その、椎名かがりという人を捜せばいいの……？」
「そういうこと。どうかな？」
「やってみても……いい……」萌郁は答えた。「でも……見つかるかはわからない……」
「もちろん、その場合はしょうがないよ」

至と萌郁は条件を詰めていった。その様子を見守りながら、岡部の心はゆれていた。
ふつうに考えて、このβ世界線で、岡部と桐生萌郁が接点を持つことはないはずだった。せいぜい秋葉原でニアミスする程度だったろう。だが結局は、こうして直接かかわりあうことになった。
岡部と桐生萌郁は、いずれ、どの世界線でもなんらかのカタチで互いの時間を重ねるのか……。
世界線を跨（また）いだ、運命というものは存在するだろう。であるなら……避けるのではなく、いっそ桐生萌郁の行動を監視したほうがいいのかもしれない。こうして彼女がラボの敷居を跨いでしまったからには、そう考えるよりほかなかった。
「――んじゃ、報酬は成功報酬で。その他の必要経費はこっちで持つってことでおk?」
「問題ない」
「オカリンも鈴羽も、それでいい?」
「あたしは手伝ってもらえるなら文句はない」
鈴羽が答えた。岡部も同意した。
「んじゃ、契約成立ってことでひとつ」
「……………」
萌郁は小さく肯くと、かがりについての手掛かり――失踪時の服装、特徴などを聞いて、ラボをあとにした。
緊張の糸がぷっつりと切れて、岡部はソファーに崩れ落ちた。

「ふぅ……」
安定剤を口にふくみ、水で流しこむ。あとは安静にしていれば立てなおせる。
「おじさん」鈴羽が言った。「桐生萌郁って人のこと、知ってたんだね？」
「え？」
見抜かれた……岡部は小さく動揺した。
「マジで？　オカリンいつの間に？」
至は至で、美人ライターと岡部の接点に妙な嫉妬をしたようだ。
「どうしてそう思ったんだ？　鈴羽」
「見ていればわかるよ」
修羅場をくぐり抜けてきた人間というのは、誰が敵で、誰が味方か……目線や表情などから読むことができるらしい。岡部は萌郁に対して、恐怖を帯びた敵意を丸出しにしていたようだ。
「いや、知らない人だ」
「別の世界線では知ってた？」
「………」
無言は、肯定。
そして岡部がこれほど消耗しているということは、α世界線における桐生萌郁は、心を許すことなどできない危険人物だった――ということ。

「わかった。これ以上は聞かないけど、あたしなりに警戒はしておくよ」
　鈴羽は、つねに現状を再確認する。
　世界線が変われば、その人物の人間関係のポジションも変わりうる。桐生萌郁が、岡部倫太郎という世界の観測者にとって深いかかわりのある人物であることが、わかればよかった。
「それでいい……いまはな」
「いったいなんのこと？　オカリン」
「緊張した、っていうことさ」
　岡部は苦笑をかえす。
「あ、わかるわー。桐生氏は美人で巨乳で、スタイル抜群でメガネ属性まで持ってるもんな。しょうがない」
　どうせ……かかわるなら利用するだけ利用する。
　椎名かがりを捜す、という目的がはっきりしているからかもしれない。岡部は、それくらいのことは考えられるようになった。
　だが、次に桐生萌郁を目の前にしたときも冷静でいられるのか。あの女が忍ばせている銃器を想像したとき、岡部には恐怖しかわかなかった。

２０１０／12／20

「ふぁ～………」

比屋定真帆は欠伸（あくび）をかみ殺した。

オフィスの制限区画でアマデウスと対話をしていたのだが、ついついガールズトークで盛りあがってしまい、気づけば明け方になっていたのが夜更かしの原因だ。

最初こそ研究や実験についての議論だったのに、話題は二転三転、結局また岡部倫太郎についての討論会になってしまった。

テスター岡部君は、ここ数日、アマデウスとのコミュニケーションを拒否しているという。

そんな岡部に対してのクリスの憤りは、最初のころ８回連続で居留守を使われた云々（うんぬん）でもめていたころに輪をかけた状態になっていた。

もっとも、その放置プレイによって誘導されたクリスの現状は、真帆がはじめて見た牧瀬紅莉栖の少女らしい一面でもあり、新鮮であり……かわいさのあまり、これまでさんざん岡部のことでいじられていた真帆は、意趣返しとばかりにクリスをからかっているうちにハイになってしまった。

眠れなくなった真帆は、コーヒーをすすりながら、例の紅莉栖の遺品――ノートPCをひっぱりだして、いじっていた。

「パスワード……ねぇ……やっぱりプロにでも頼んだほうがいいのかしら……」

近ごろ真帆は日本語でボヤくようになっていた。

「なんの話だい？」

「ひゃっ⁉」

背後から声をかけられて、真帆は飛びあがりそうになった。

「ハハハ、そんなに驚くことないじゃないか」

「教授……もどってたんですか」

オフィスに現れたのはレスキネン教授だった。

「ついさっき、ね」

レスキネン教授はコンビニエンスストアのレジ袋を提げていた。

10分ほど前に「食事に行く」と出かけたので、てっきり外食して、しばらくもどってこないものだと思っていた。

「それにしてもニッポンのコンビニは本当にすばらしいね！　毎日ちがうベントーを食べても、1週間もすれば、すぐに新しいベントーが出る。しかも店によっても味がちがうから、毎日コンビニでも飽きないよ」

「コンビニのお弁当ばかり食べていると、栄養偏りますよ」

「ハハハ。それでもアメリカでの食事に比べれば、かなりヘルシーだよ。第一、食事についてのお説教だけは、マホには言われたくないね」

「うっ」

　真帆はうならされた。シリアルやサプリに頼っている真帆は、栄養バランスはともかく、他人に指導できるような健全な食生活ではない。

「ところで、なにをプロに頼むって？」

「ああ……あれはその……なんでもないです。なんでも」

　紅莉栖の遺品であるノートPCのパスワードを解きたい。レスキネン教授になら、知られて困ることではなかった。けれども真帆は、そのときは咄嗟にごまかした。

　ノートPCは形見分けの品だ。レスキネン教授にわたせば、それこそ大学のそっち系の研究室をまきこんで、総力をあげてパスワード解析にあたってしまうかもしれない。それは、なんというか……ちょっとちがう。

　遺品のノートPCは亡き後輩についての……ただひとつ残された、真帆が知りうる未知なのだ。二度とできない紅莉栖との対話とでも言おうか。

「そうかい？　私でできることならチカラになるよ」

「ありがとうございます。そのときはお願いします」

　立ちあがると、真帆はオフィスのゲートに歩いた。

「マホ？　どこへ行くんだい？」

「気分転換をかねて秋葉原に行こうかと」

「気分転換で行くにしては、ずいぶん遠いね」

「う……」

ゲート前で真帆は固まった。

「リンターロに会いに行くと、素直に言えば許可しよう」

「そ、そんなんじゃ……！」

クリスの話では、岡部は秋葉原に彼の研究室を構えている。レスキネン教授は……ログをたしかめたか、それとも岡部と話して知ったのだろう。

「ちがうのかい？」

「……ついでに、会いに行ってもいいですけど」

ラボ……真帆も少しだけ興味はあった。

「ふ～ん」

「い、言っときますけど、ちがいますからね。そういうのじゃないですからね」

「私は、まだなにも言っていないよ？」

「っ……というわけで、今日は研究は休みますっ」

真帆はゲートから出ようとした。

「リンターロによろしく。……そうだ、マホ！」

「はい？」

呼ばれて、真帆は閉じかけたゲートからふりかえった。

「リンターロの……秋葉原のラボだったかな？　どんな人が出入りしてるのかな」
「？　興味あるんですか、教授も」
「うん。たとえば日本にいたクリスは、そのラボに通っていたのかな、とかね」
　アマデウスのクリスの話では、女の子がふたりも３人もいて、誰かが来ると誰かが机の下に隠れるような状況のようだが……。
「岡部さん、紅莉栖とのこと、あまり話したがらないんですよね」
「うん。機会があれば、それとなく頼むよ……リンターロ以外にも、クリスの友人がいるかもしれないしね。もしかするとリンターロの彼女とかも」…………

　まったく、クリスといいレスキネン教授といい、なぜ、ものごとを恋愛感情に結びつけたがるのか。
「……ていうか、ああいうのもセクハラよね、いまの世の中じゃ！」
　彼氏いるの？　と部下の女子にちょっかいを出すだけで、大問題になるご時世だ。
　真帆が岡部を訪ねようとしているのは、率直な興味からだ。
　具体的には、遺品であるノートＰＣのパスワードについてヒントが欲しかった。岡部は知らないと言っていたが、真帆がひとりで考えるよりは、なにかヒントが見つかる気がした。

根拠はない。でも岡部倫太郎という青年は、なにかを隠している。秘めている──と言ったほうがいいか。それはテスターのアマデウスに対する態度を観察しての所見だ。

彼は、ヴィクトル・コンドリア大学に進学する希望を持っている。であればテスターの件は、またとないチャンスだろう。少しでもポイントを稼ごうと、やる気を見せるのが、まぁ、ふつうだ。

なのに岡部のテスターとしての行動は、ともすると消極的だった。やる気がないというわけではない。であればクリスは怠惰な学生に対して、あんなふうに興味深い反応を示すことはないはずだ。

言ってみれば岡部倫太郎は、クリスを意識しすぎている。

ひとりの女性として？　本物の紅莉栖と重ねて？　なにを感じ、なにを恐れて……？

彼の心の機微まではわからない。けれども岡部は、真帆の知らない紅莉栖を知っている。日本にいたときの紅莉栖。それも極めて重要な──そこらへんは勘でしかなかったが。

そんなことを考えながら、和光から電車を乗り継いで秋葉原駅の改札を出た。

「…………」

誰かに見られているような気がして、真帆はふりかえった。

駅は、とても混雑している。

「気のせい……よね……」

誰にでもなくつぶやくと、真帆は歩きだした。

岡部のラボ――未来ガジェット研究所の住所は、クリスから聞いて地図で確認していた。

「でも、いきなり訪ねていって、岡部さんがいなかったら……」

ちょっと後先考えなしだったが、不在ならばそれで素直に帰ればいいだけだ。

街はクリスマスセールで賑（にぎ）わっていた。

せっかくなので大通りではなく裏路地を通っていくことにした。ショップの店頭に並んだパーツやらジャンク品やらに目移りしながら、ディープな空間に足を踏みいれていく。真帆は、この秋葉原の雰囲気が嫌いではない。

「…………」

そこまで歩いて、真帆は、やはり気になった。

視線を感じたのだ。だが、ふりかえっても知りあいがいるはずもない。

再び歩きだす。角を曲がって、さらに奥の路地へ。人通りはまばらになる。

そこで真帆の疑惑は確信に変わった。

足音…………

背後から。その足音は、どこまでも、どこまでも真帆の歩幅にあわせて、ついてくるのだ。

「っ…………!?」

映画などでこうした場面を観ていると、自分なら不審者の股間めがけて蹴りの一発でも——とか、つねづね思っていた真帆だったが、実際にこうした状況に遭遇すると、情けないことにふりかえることすら怖かった。歩きながら膝がふるえているのがわかった。

スマホを手にする。

警察に電話するという選択肢は、とっさに頭に浮かばなかった。早足になりながら履歴にあった名前をタップする。いまから会おうと思っていた相手だ。

——お願い……！

足音が重なる。

——岡部さんっ！　助けてっ…………！

コールは鳴りつづける。足音は、すぐ背後に迫っていた。それでも真帆はふりかえることができなかった。ついに走りだしかけたとき——

『——もしもし？』

「もしもし、岡部さん⁉　私、比屋定ですっ！　いま、あなたのラボの、すぐ近くまで————」

そこで真帆の言葉は封じられた。

羽交い締めにされた真帆は、スマホを道路にとり落とした。

＊

未来ガジェット研究所、ラボ。

無言で差しだされた紙束を受けとると、岡部は内容をたしかめた。

「これは……？」

「報告書」

桐生萌郁はボソッと答えた。

これからそちらにむかう、と至に連絡があったのが、つい数分前だ。メールを寄こしたときには、もうラボの近所まで来ていたのだろう。

萌郁を前にしたときに感じる不安を、未だに岡部はぬぐえない。それでも、連絡があってすぐに飲んだ安定剤が効いてきたのか、前回よりメンタルの状態はましだった。

報告書を目でなぞる。

「どう、おじさん？」

「やっぱり、そう簡単に見つかるもんじゃないな……」

結論を言えば、萌郁の調査でも収穫はなかった。

鈴羽はあきらかに落胆した。期待するものはあったのだろう。それは岡部もおなじだ。

「かがり……どこでなにしてるんだろう……」

生きていれば22歳になっているはずの、まゆりの養女は……。

「ん？」
「どしたんオカリン？　なんか有力な手掛かりでもあったん？」
　岡部はふたりに報告書を見せ、その部分をしめした。
――調査の中でひとつ、興味深い事実が浮かびあがった。
　椎名かがりという名の女性を捜している人物が、
　秋葉原で、私たち以外にも存在するらしいということ。…………
「どういうこと？」
「読んだままのとおり……」
　萌郁が鈴羽に答える。
　つまり……どういうことだ？
　そのときだった。岡部のスマホの着信音が鳴った。
　発信者は……比屋定真帆？　アマデウスはともかく、真帆からの電話連絡を無視するわけにはいかない。
「わるい、ちょっといいか」
　至たちに断って、岡部は電話に出た。

「もしもし？」
『──もしもし、岡部さん⁉　私、比屋定ですっ！』
真帆の声はひどく切羽つまっていた。電話を受けた岡部のほうが緊張してしまう。
「比屋定さん……？」
『いま、あなたのラボの、すぐ近くまで──』
直後、電話越しに、なにかがぶつかる音が響いた。
そして叫ぶ声が遠くで──スマホを……落とした？
「比屋定さん⁉　比屋定さん、どうした！」
そのまま声は途切れた。
いまの真帆の悲鳴は……なにか事件が起きたのは明白だった。
「オカリン？　なにかあったん？」
「知りあいが誰かに襲われてるっ！」
「ちょっ、マジ⁉　知りあいって誰⁉」
混乱する至をよそに、岡部は手近にあった武器になりそうなものをつかむと、ラボを飛びだした。
真帆はラボの近くにいると言っていた。
駅からのルートで、白昼襲われるような人通りの少ないところとなると──

「…………！」
ラボから目と鼻の先にある路地。
岡部は、そこに不審な人影を見とがめた。そのむこうで小動物がもがいていた。
「やめて……放してってばっ……！」
真帆だった。何者かに羽交い締めにされていた。
「比屋定さんっ！」
岡部が声をはりあげる。
「――」
真帆を押さえこんでいた不審者が、なにかを口走り、驚いた様子でふりかえった。
そこではじめて、相手が女で、しかも日本人ではないと気がつく。
「おい、比屋定さんを放せっ！」
岡部は叫んだ。強く言ったつもりが、つい声がうわずってしまう。
外国人の女は反応が鈍かった。日本語が通じていないのか……？　それでも、敵意丸出しのジェスチャーを見せれば、こちらの警告はわかるはずだ。
「そのコを……放せ！」
岡部は手にした得物を構えて、凄んだ。

　よりによって持ってきたのは『サイリムセイバー』だった。血糊をしこんだドッキリ用の大型ケミカルライトだ。それでもハッタリくらいにはなるだろう。
「もう一度言うぞ、そのコを――」
「岡部さん！」真帆は、なぜか、そこでバツがわるそうな顔をした。「……ちがうの、岡部さん」
「え…………」
　なにが……ちがうというのだ？　わけがわからなくなった岡部が立ちつくしていると、
「Oh～！」
　外国人の女は抱えていた真帆をぽいっと放して、満面の笑みを浮かべて両手を広げ、岡部に近づいてきた。
「Are you Maho's boyfriend?」
「はぁっ!?　え？　あ、ちょっ……」
　岡部が声をあげるよりも早く、女の両手が背中にまわされた。
　ハグされた。ジムかなにかで鍛えているのか、かっちり、女性とは思えないチカラで。
「だから、ちがうって言ってるのに……」
　真帆は、げんなりした顔をして、うつむく。
　なにがどうなっているのかわからないまま、岡部は、胸元に押しつけられた弾力のあるアメリカンサイズのふくらみに、なすがままにされて立ちすくんでいた。

結論を言えば、さまざまな思いこみと、わるふざけと勘違いによる喜劇だった。

「I'm Judy, Judy Reyes. Pleasure meeting you, Mr. Okabe.」

その理知的な印象の女性は、太陽のような笑みを浮かべて岡部に右手を差しだした。

「あ、ええっと……ナイス・トゥ・ミーチュー……」

「ふふ……日本語でいいわよ」

と、日本語で応じる。

「え？　教授って日本語しゃべれたんですか」

岡部よりも驚いたのは、真帆だった。

「ええ」

「知らなかった。でも、どうして？」

「ふふっ、女もワタシくらいの年になると、いろいろあるのよ」

テレビドラマみたいなウインクが、さまになっている。教授――ということは若く見えるが40代くらいなのか。

「それじゃあ、あらためて。ジュディ・レイエスよ。よろしくね」

ジュディ……以前、レスキネン教授が口にしたことがある名だ。

「岡部倫太郎です」

やっと、まともに握手を交わす。

「レイエス教授は、こんど日本で開かれるＡＩ関係の学会に出席するために、来日したんですって」

「教授っていうことはヴィクトル・コンドリア大の？」

「psychophysiologyを研究しているわ」

「サイコフィ……？」

精神……なんだろう。岡部の語彙力では理解が追いつかなかった。

「精神生理学のことよ。つまり脳の活動によってもたらされる心の働きとか、心の病気なんかについての研究をされているの」

単に脳科学というより、もう一歩二歩、医学の実地に寄った研究のようだ。

「──そういう意味では、私たちの研究よりもずっと、人の役に立つ研究をされていると言っていいかもしれないわね」



「そんなことないわ。アナタたちのアマデウス（Amadeus）だって、これからの発展次第では充分に役に立つ技術になるわよ」
人類の繁栄と発展に。
――より正確には、アメリカ合衆国の繁栄と発展ということだな。
以前の鳳凰院凶真であれば、そんな皮肉を忘れなかったことだろう。でも、いまの岡部は初対面の相手によけいなことは言わない。
ようするに――
来日したレイエス教授が、秋葉原で、たまたま真帆の姿を見かけて、抱きついて驚かせた。
それだけの話だった……。
「でもレイエス教授も人がわるいですよ。駅から尾（つ）けてくるなんて」
「尾ける？　マホを？　ワタシが？」
「ええ……うしろ、ついてきてましたよね？　ずっと……」
「そんなことしてないわ。ワタシはさっき、そこのショップでたまたまマホを見つけたから、ちょっと驚かそうと思っただけよ」
「え？」
レイエス教授の答えに、安心しきっていた真帆の顔色が、また変わった。
「比屋定さん、尾けられていたのか？」

岡部はたずねた。
「ええ……たしかに、そう感じたんだけど……」
「レイエス教授……誰か怪しい人物を見かけたりは？」
岡部がたずねると、レイエス教授は肩をすくめる外国人特有のジェスチャーで否定した。
路地には、ほかに誰もいない。
「……勘違いだったのかしら」
真帆は困惑した。
「きっとそうだわ。だってニッポンは世界一、治安のいい国でしょう？」
レイエスは楽天的に告げた。
そう……なのだろうか。岡部には判断がつかない。
「マホは、このあとどうするの？」
「私は……」
真帆は口ごもって、それから岡部を見た。
するとレイエスは、なにかを感じとったのだろう。
「ンふ、なるほど！　そういうこと！　それじゃワタシは行くわね。リンタロも、そのうちゆっくり話しましょ！　Bye！」

意味ありげなウインクをよこすと、レイエスは嵐のように去っていった。そっちは駅とは逆方向なのだが……。

変に勘ぐられたらしいが、岡部も真帆も、いちいち否定するのもめんどうになっていた。

＊

なりゆきで、真帆を伴ってラボにもどった岡部は、彼女を紹介することになった。

「――というわけで、彼女が比屋定さんだ。ほら、前にＡＴＦのセミナーでヴィクトル・コンドリア大学の人と会ったって話、したことがあっただろ？」

「お騒がせしてごめんなさい」

真帆は謝罪した。

ラボには至と鈴羽、萌郁がいた。鈴羽は岡部を追っていったん外に出たようだが、そのときには岡部の姿は見あたらなかったという。

「ま、でも、なにごともなくてよかった」

至は、なにやらニコニコしている。

真帆は、面識があった萌郁がそこにいたことに驚いていた。ラボについても色々と質問したそうだったが、岡部には先に済ますべき話があった。

「すまん、どこまで話したんだったか……」
「ほかにも、かがりたんを捜している人間がいるって話」
「そう、それだ」岡部は仕切りなおした。「その……それは本当なんですか、桐生さん」
「本当……」
萌郁の報告書に目を落とす。話の裏をとるために興信所まで使っていた。ということは、それだけ信憑性も高い。
「それが鈴羽という可能性はないんだろうか」
「それはあたしも考えた。でも……」
「捜していたのは男の人……なかには外国人も……」
外国人？　それも複数……。
「こっちでかがりとかかわりがあるのは、あたしだけだ。それなのに、いったい誰が……」
重要なのは、椎名かがり、という名前の人物を捜している者が、いま、存在するという事実だ。
まさかSERNが？
椎名かがりが未来人だと知ればSERNは動くだろう。その場合、目の前にいる萌郁は危険きわまりない存在だ。彼女の発言の、どれひとつ信じられなくなる。
あれこれ考えたが、どれも推測の域を出なかった。真帆の前ではおおっぴらな話もできない。

「椎名かがりは失踪して12年にもなる。そのあいだに知りあいができたとしても、おかしいことじゃないな」

「つーか、むしろ誰かの世話にならないと生きていけないっしょ」

　岡部が言うと、至が相づちを打った。

「この報告からわかるのは……何者かが、なんらかの理由から彼女を捜しているということ。少なくとも椎名かがりは生きていたっていうことだ」

「……！」

　岡部の結論に、鈴羽がはっとなる。

「あ、そっか……そいつらが、かがりたんを捜しているのは、ここ最近の話で……」

　至が肯（うなず）いた。生きていたからこそ捜している。あるいはそいつらの周辺から、最近になって椎名かがりは再び失踪したのではないか。

　萌郁の報告は、以上だった。

「どう……する？」

「ひきつづき調査をお願いできますか？」

　岡部は萌郁に頼んだ。かがりを捜している連中が秋葉原にいるということは、そいつらは、彼女がこの近辺にいると考えているということだ。

「わかった……」

萌郁は、ここまでの経費を受けとるとラボをあとにした。支払いは至がしてくれた。探偵みたいな仕事の依頼料は高額なのだが、娘のためとなると財布の紐（ひも）もゆるくなるようだ。

「人を捜しているの？」

萌郁と話しているあいだ、ラボを見学していた真帆が、岡部に訊（き）いた。

「ああ。ちょっと知人を、な……」

岡部は曖昧に答えた。

椎名かがりを捜していたやつらのなかに外国人がいた、というのが気になる。SERNでなくとも、タイムマシンが存在するとわかれば、それを狙う連中は世界中に存在するだろう。覇権国家をめざしているロシア、EU、アメリカだって……。

かがりが、未来から来た人間だと知られたとする。そのせいで大きな事件の渦中にいるのだとしたら……。

「それじゃオカリン、そろそろ比屋定氏のことをkwsk」

至は手ぐすねをひいて本題に入った。

「詳しくって言われても、もう説明したぞ？」

比屋定真帆は日系アメリカ人。ヴィクトル・コンドリア大学、脳科学研究所に所属、アレクシス・レスキネン教授の助手で、岡部はテスターとしてアマデウス・システムの研究に参加させてもらっている。過不足なく、以上だ。

「たとえば比屋定氏がこのラボのメンバーに加わってくれる的な超展開はありますか？」
「ないだろ」
冗談ではない。牧瀬紅莉栖にもっとも近しかった研究者を、タイムマシンに近づけるわけにはいかない。
「じゃあせめて真帆たんと呼んでもいいですか？　つーか呼ぶ」
「真帆……たん……？」
目を白黒させた真帆に、至はひるまずたたみかけた。
「あれ？　名前、まちがってた？」
「そうじゃなくて！　その変な呼びかたにひっかかったの」
「でも、真帆たんは真帆たん、って感じじゃん。なあ、オカリン？」
「俺にふるな」
「とにかく、その呼びかたはやめて」
「だが断る」
至は腕を組んで瞑目（めいもく）した。
「こいつ、ブレないな……」
岡部が〝狂気のマッドサイエンティスト〟の設定を投げたのに対し、至は〝HENTAI紳士〟の道を突っ走っている。

岡部は、それを演じているところがあってストレスを抱えてしまったのに対して、至はこれが自然体なのだろう。

「それで比屋定さん、今日はどうして？　俺、ここのことはきみに話したかな？」

岡部はたしかめた。

「アマデウスに教えてもらったわ」

真帆が答えた。

クリスか……岡部は合点がいった。

「今日は、岡部さんと話したいことがあったのだけれど……まあいいわ。噂（うわさ）のラボを見ることができたし、それに、なんだかあなたたちも大変みたいだから」

真帆は人捜しの話には深入りしてこなかった。

クリスは真帆に、岡部が人捜しについて相談したことも話しただろうか。知っていてもおかしくはないが、かかわるつもりはないようだ。

「ひょっとして、あいつ怒ってたか？」

「ええ、とても怒ってたわ。いくら連絡しても出ないって」

「…………」

真帆の返事を聞いて、岡部は気分が重たくなった。

「え？　ちょっ、なになに？　それなんの話!?」

至はハスハス、敏感すぎる反応をした。
「別に……浮いた話じゃないから、いちいち反応するなって……」
岡部はうんざりだ。
「岡部さん、やっぱり辛いの？　だったらテスター、やめてもらっても……」
「いや、そういうわけじゃないんだ。ただ……」
牧瀬紅莉栖、そしてアマデウスのクリス。
──あいつの存在に依存してしまいそうな自分が嫌だ。
紅莉栖（クリス）。
アマデウスのアイコンをタップすると、スマホの画面に現れる人工知能が……記憶のなかの牧瀬紅莉栖と重なるたびに。
岡部は、とても充たされるのだった。
そして、そのことが終わらない不安を呼び起こす。刹那に充たされ、あとに残るのは後悔、そして未来への不安。
まるで──麻薬だ。
「また気がむいた時にでも話してあげて。あのコも寂しがってるわ」
「わかった……」
クリスが寂しがっている、という言葉に心が痛んだ。

その日も、岡部はアマデウスと対話することはなかった。

12

２０１０／12／23

数日がすぎた。

至は、その後も萌郁に確認を入れているようだが、椎名かがりの調査に進展はなかった。出版業界では、印刷所の関係で年末進行というものがあるそうで、萌郁は〆切があって時間がとれないのだという。

椎名かがりを捜しているという連中の存在に、岡部は幾らかの不安を感じていた。

といって萌郁の本業をさしおいて、そちらを優先してもらうわけにもいかない。第一、萌郁の存在自体が、岡部の不安でもある。

「はふぅ～、まゆしぃはとっても残念なのです……」

ラボのソファーで、まゆりはため息をついた。

「ん？　クリスマスパーティの話か」

「うん！　カエデさんとフブキちゃん、用事ができちゃったって〜。フェリスちゃんはお仕事で〜、絢(なえ)ちゃんも店長さんとすごすことになってて〜」

　絢――というのは、このラボのある大檜山(ひやま)ビルのオーナー、ミスターブラウンこと天王寺裕吾(てんのうじゆうご)氏の愛娘(まなむすめ)（小６）だ。

「――ダルくんは由季さんと遊びに行くんだって」

「結構なことじゃないか」

　拍手喝采したい。あのダルがクリスマスにデートとは。聞くところによると鈴羽がお膳立てしたらしいが。

「――由季さんに対する態度がどうにもハッキリしないと、いつもボヤいていたからな」

　鈴羽にしてみれば、ふたりの関係の発展には、自分の存在がかかっている。

　阿万音鈴羽が〝２０３６年のタイムトラベラー〟になるのは、おそらく世界線を跨(また)いだ運命だ。その両親である橋田至と阿万音由季が結ばれることもまた、収束によって定められている……はずだとはいっても、そこは男女の仲のこと。なにかの拍子で、こじれることだってある。

　鈴羽は、父と母が結ばれる瞬間をたしかめたいのだ。

　もし彼女が課せられた作戦を完遂したとき。このβ世界線という可能性は、なかったことになり世界は再構成される。すべての人の記憶ごと上書きされる。であればこそ、失われるからこそ――鈴羽の立場であれば、こだわるのも仕方がないことだ。

失うということはゼロではない。白紙や無にも意味はあるのだ。

「まゆりも、クリスマスは家ですごしたほうがいいんじゃないのか？　この前、おじさんがケーキを予約してたぞ」

「お父さんに会ったの～？」

まゆりが声をあげた。

「家の近くでバッタリな。まゆりをビックリさせるために、おっきいのを予約するんだって、はりきってた」

「そっかぁ……ん～、じゃあ、そのほうがいいね」

「あ、いまのは聞かなかったことにしてくれ。せっかくのサプライズだからな」

「うん、わかったよ。でもオカリンはどうするの？　クリスマス」

「とくに予定はないかな。うちはもともと、そういうことする家でもないし」

男子比率９割超の東京電機大学の連中は「ドキッ！　男だらけのクリスマス飲み会」をひらくと盛りあがっていたが、岡部は誘われなかった。

何度ちがうと言っても、連中はまゆりのことを岡部の彼女（ＪＫ）だと思いこんでいるのだ。あてつけに「リア充××せよ」とか不当な文句まで言われてしまった。

「たしかサンタさんにプレゼントが欲しいって言ったら、朝、枕元にお野菜がおいてあったんだよね？」

「どう見ても、前の日の売れ残りのな」

岡部の実家は青果店だ。そのときは父親にクレームをつけたら、うちはキリスト教じゃねぇ、と逆ギレされた。岡部少年は、よく道を踏み外さなかったものだ……。まっとうな道を歩いてきたとも言い難(がた)いが。

「クリスマスが終わったらコミマがあって、そしたらもうお正月。1年、あっという間だね～」

「そうだな……」

あっという間……ではなかった。なにしろ岡部は、あの夏の3週間を何百何千回とタイムリープして、やりなおした。

「そうだ！　ねぇ、オカリン……クリスマスパーティはできないけど、お正月パーティをするのはどうかな？　みんなで初詣に行って～、それからおせち料理を食べて～、今年もよろしくって言って～」

「ああ、いいんじゃないか」

「だよねだよね～。うん、じゃあ、あとでみんなに訊いてみるね～」

まゆりは、これから買い物に行くのだという。友人のフブキのために作っているコスチューム用に小物が必要なのだと。

「気をつけて行ってこいよ」

「うんっ！　……あと、そうだオカリン、るかくんがね、オカリンになにか相談があるみたいなの」

「あ………！」

うっかりしていた。

先日、るかから相談の電話があった。そのときは萌郁が来たり、いろいろあってすっかり忘れていた。

るかのことだ。岡部があとで連絡すると言ったから、ずっと待っていたのだろう。
「わかった。こっちから連絡をとってみる」
「うん、お願いね～！　じゃあ、行ってきま～す」
まゆりはコートを着ると、手をふってラボから出ていった。
岡部はスマホを手にした。履歴から、るかの番号をタップする。
「相談か……」
いったい、なんだろう。るかの相談といえば……まさか、また女の子になりたい、なんて言われないだろうか。
さすがにそれはないだろう。あれはα世界線での話だ。女の子として……岡部のことを想いたいという……。
電話では言えないこと……まぁ、聞いてみればわかることだ。
「出ないな……」
コールをくりかえしたが、岡部はいったん電話を切った。
RINEのアイコンをタップする。
――すまない。先日の電話の件、すっかり忘れていた。いまさらだが相談ってなんだ？

送信。
しばらく返事を待ったが、るか宛に送ったRINEは既読にならない。
今度は、あちらがたてこんでいるようだ。柳林神社を訪れようかと思ったが、年の瀬であれば神社は忙しいはず。迷惑になるだけだと思いなおした。RINEは入れておいたから、あちらの都合のいいときに返事がくるだろう……そんなふうに思っていると、ラボの外階段をのぼってくる足音が聞こえた。
至──ではなかった。やつならドスドスと重い音がする。
ドアがノックされた。ラボに出入りする人間で、わざわざノックする者はかぎられる。
「どうぞ」
岡部が言うと、ドアがひらいた。
「こんにちは」
「ルカ子……？」
立っていたのは、なんと、いま連絡をとろうとしていた相手だった。
「よかった。岡部さん、ここにいてくれて」
「あ……すまない。この前の件、すっかり忘れていた。さっき電話したんだが……」
「え？　あ、本当だ……ごめんなさい。ボクのほうこそ気づかなくて」
スマホの履歴を確認すると、るかは申し訳なさそうな顔をした。
「それより寒いだろう。入ってくれ」

「あ、はい……」
　ところが、るかは戸口で躊躇（ちゅうちょ）した。なにかを気にして階段のほうをチラ見する。
「あの、岡部さん……その……相談の件なんですけど……実は……その前に、会ってもらいたい人がいて連れてきたんですけど……いいですか？」
　連れてきた……？　そこにいるのか？
　途惑い気味の岡部をよそに、るかは戸口から一歩、身をひいた。
　代わって姿を見せたのは、ひとりの若い女性だった。
「あの……はじめまして……」
　それは――

＊

　ラボのリビングには、岡部とるか、そして来客の女性がいた。
「どうぞ……」
「ありがとうございます」
　岡部がペットボトルのお茶をコップに注ぐと、女性は消えそうな声で応じた。

赤みがかった栗色（くりいろ）の髪、やや吊（つ）り気味の目尻……化粧はしていないようなのに、まっ白な肌が印象的だった。服装はシンプルで、荷物もなく、外見からはほとんど情報が得られなかった。

――お人形さんみたいだな。

失礼を承知でいえば、そんな表現がぴったりくる。至の表現を借りれば「フィギュアみたいな」というやつで。

岡部は、なぜかドキドキしていた。

（……似ている？）

目の前の女性に、なぜか一瞬、牧瀬紅莉栖の面影がかぶったのだ。

近いのは髪色と背格好くらいで、似ているわけではないのだったが。至の表現を借りれば「胸部装甲」の豊かさとか、とくに、まったく。

そういえば、るかには姉がいるという話を唐突に思いだした。

もしかして、この人が？　おとなしそうな雰囲気は、るかとおなじだ。でも漆原家の姉は弟とちがって活発だと聞いた覚えもある。

「岡部さん？」

「あ、いや……それで、ルカ子」

「ルカ子……？」

その呼び名に、来客の女性は目を丸くした。

「あ、失礼。俺は……そう呼んでるんです。その……女の子みたいだから」
考えてみれば失礼な呼びかただった。癖になって、岡部はそれ以外の呼びかたができなくなってしまっている。
「あ、いえ……？　私も、るかさんと初めて会ったとき……そう思いました……」
否定的にはとられなかったようで、女性の表情が少しだけゆるんだ。
「で、ルカ子……この人は？」
「前にお話ししましたよね？　お父さんのお客さん、家に泊まってるって……」
「じゃあ、彼女が？」岡部は驚いた。「ルカ子の父親の知りあいというから、てっきりもっと年配の人かと思っていた」
先週だったか、岡部はるかの荷物を運んだ。そのとき買い物袋のなかの品々を見て、てっきりカップラーメンが好物の、年季の入ったおばさまだと勝手に思いこんでいた。
「あ、ちがうんです。正確に言うと、お父さんの知人が連れてこられた方で……」
この女性が、晴海がどうとか、そういう歴戦の戦士の話をしていたわけではないのだった。まるで年齢があわない。
「それで相談というのは、この人についてなんですけど……」
「その前に、名前を教えてもらってもいいかな？」
岡部は来客の女性に話しかけた。いつまでも「この人」では話がしにくい。

「…………」
　ところが、女性の顔がみるみる曇った。
　なにかおかしなことを言っただろうか。岡部は、また困惑した。
「実は、相談というのはそのことなんです」るかが言った。「あの……この人が誰なのかを……その……知るには、どうしたらいい、でしょうか……」
　質問の意味を、すぐには咀嚼（そしゃく）できなかった。
「待ってくれ、ルカ子。それはどういう……」
「記憶喪失……なんだそうです」
　この女性は記憶を失っている。
　つまり、
「それじゃあ、名前も？　自分が、どこの誰かも？」
「はい……」
　女性はうつむいたまま肯（うなず）いた。
「どうして……」
「わかりません」
　あたりまえだ。それがわからないから記憶喪失なのだ。
「でも、なぜ俺に？」

それは医者とか、まず警察に相談すべき事案ではないのか。

「岡部さんなら、記憶をとりもどす、いい方法を知っているんじゃないかと。ほら、岡部さん、よく人間の脳とか記憶とか、すごく難しい話をたくさんしてたから」

「なんでもいいんです！　私が、自分のことをとりもどせる方法があれば！」

女性は、その点では強い意志をあらわした。

「たしかにそういう話はしていたが……それは、ただ興味があるだけで専門的なことはなにも……」

脳の機能や構造について、ある程度は知っている。けれども、記憶をとりもどす方法となると別の話だ。最先端の医療をもってしても、すぐに、どうこうできるものではないはずだ。それこそアマデウスみたいに、記憶データを外部ストレージに記録しておいたなら話は別だが。

「そう……ですか……」

岡部の返事に、女性はうなだれた。

「すまない」

「いえ、誰得ですよね……記憶喪失とか……」

「だったら身元を調べることはできないでしょうか。カナさん、本当に辛そうで……」

「カナさん？」

るかが口にした名前を聞いて、岡部はいぶかった。

「あ……仮の名前だからカナと、るかさんのお父さんが」

名前がないと不便だから、つけたらしい。
「ずいぶん安直だな」
「いつまでも名乗る名前でないのだから、それくらいのほうがいい、と……」
深い話なのか、どうなのか。イマイチわからないが、とりあえず彼女はカナさんだ。
「カナさん……なんとかチカラになってはやりたいが、やっぱり警察や興信所に頼んだほうがいいんじゃないのか？」
「興信所……探偵さんみたいなものですか？」
「ああ」岡部は、るかに肯いた。「でもそれだって、なにか手掛かりがないと厳しいだろう」
るかの話では、カナを連れてきたのは千葉にある寺の住職なのだという。
数週間前、カナは寺近くの山中で保護された。しばらくは僧坊で預かっていたのだが、その寺は基本的に女人禁制だったこともあり、住職がるかの父親を頼ってきた。
「カナさんが千葉で保護されたとき、持ち物は？　財布とかカバンとか……」
「そういったものは、なにも」
カナは首をふった。発見当時は、入院患者のような服装に素足だったという。
「なにも？　別に大したものじゃなくていい。ひとつくらい、ありそうなものだけど」
「ひとつだけ……ただ、これが手掛かりになるのかどうかは……」

カナはハンカチを、とても大事そうにとりだした。その布にくるまれているモノが唯一の所持品だったという。

「見せてもらっても？」

「はい」

カナがハンカチをひらいて見せたのと同時に、ラボのドアがひらいた。

「――あれぇ？　もしかして、お客さんかなぁ？」

まゆりだった。うしろには鈴羽の姿もある。買い物帰りに、いっしょになったのだろう。

「まゆりちゃん」

「あ～、るかくん」

親友のふたりは声をかけあった。

「るかにいさん、そちらの人は？」

鈴羽がたずねた。それぞれの坐(すわ)った位置から、女性は、るかが連れてきた客だと判断したのだ。

「ええと、うちに泊まっているお客さんで……」

るかが紹介すると、カナが、ぺこっと鈴羽たちに頭をさげた。

「わぁ～」

と、まゆりがうれしそうな様子で、カナの手にあるハンカチをのぞきこんだ。

包まれていたのは、色あせたキーホルダーだった。

「…………？」

「それ〝うーぱ〟ですよね？」まゆりは笑った。「好きなんですか？　まゆしぃもね、うーぱのこと大好きなのです」

まゆりの言葉に、カナは途惑った表情で見つめかえした。

カナの唯一の所持品――キーホルダーについていたのは、まるい体に翼が生えた姿の、うーぱのマスコットだった。『雷ネット翔（かける）』という人気カードゲームを題材にしたアニメのキャラクターだという。

「手掛かりというのは、それか？」

キーホルダー。数が作られたものだろうし、手掛かりにはなりそうもない。

「でも、このうーぱ、いつごろのものかなぁ？　ずいぶん古いみたいだけど……」

まゆりは、じーっとキーホルダーを観察した。

言われてみれば……。

『雷ネット翔』の関連商品が出まわりはじめたのは、ここ数年のはずだ。カナが持っているうーぱのマスコットは、かなり年季の入ったものに見えた。子供のころから持っていたものみたいに……。

「これ、もともとは緑色だったんじゃないかなぁ。だってこれ〝森の妖精さん〟バージョンだもん」

「森の妖精さん？」

岡部は、まゆりにたしかめた。

「うん。この前やってた映画に出てきたんだ。まゆしぃも持ってるんだけど……ほら、ここ……ここのところのデザインが、ちょっとだけちがうの」
　岡部にはさっぱり差異がわからないが、まゆりが言うなら、そうなのだろう。
「――このキーホルダーね、なかなか売ってなくて、ずーっと探してたんだ。そしたらこの前、るかくんが見つけて買ってきてくれたの……ね？」
「うん。たまたまお店をのぞいたら売ってたから……」
「妙だな。この前の映画なら、発売してすぐのはずだ。こんなに古びたりは……っ？　カナさん？」
　岡部は、カナの顔が青ざめていることに気づいた。
「っ…………」
　カナの呼吸が荒くなる。
　まさか発作――なにか病気を抱えているのではないか。発見されたときは患者服みたいな格好だったというし。
「具合がわるいのか？」
「大丈夫ですか、カナさん？」
「はぁ……はぁ……だいじょう……ぶ……」
　立ちあがろうとして、ふらついたカナを、るかが支える。
　岡部は冷蔵庫に水をとりに行こうとした。

——と、そのとき。ハンカチのなかのキーホルダーをじっと見つめている、鈴羽に気づいた。
愕然と、目を見ひらいて。
「鈴羽……？」
「う、そ……」
カナだけではなく鈴羽まで、身体を小刻みに震えさせていた。
「うそ……それ……その〝うーぱ〟……」
「どうした鈴羽？」
「あたしは、知ってる。そのうーぱ……それ……」
鈴羽の口から「うーぱ」という単語が出たことに、岡部は、ますます混乱した。
「おい……鈴羽⁉」
「っ……もしかして、おまえ……」
鈴羽はカナを見た。
「はぁ、はぁっ……っ……………」
よろめく足で、カナは鈴羽にむかってふらふらと二歩、三歩と歩みだす。
「かが……り？　おまえは、かがり？　椎名かがりなのか！」
その名を聞かされた直後、カナは電気に打たれたようにのけぞり、大きく目を見ひらく。
そして、その場に崩れ落ちた。

断章　楽園追放のインデックス（４）

１９９８／＊＊／＊＊

千葉県××市。

都心からのアクセスは、よくはない。人里離れた山中に、ぽつんと建てられた施設は、外資系企業の日本法人で、主としてバイオ、創薬にかかわる研究がおこなわれている。日本人、外国人にかかわらず、社員はおのおのがかかわるプロジェクトに従事し勤務していた。みな家族もある、ふつうの社会人ばかりだ。

この施設に、いち民間企業を超えたレベルの意向のもと、おおっぴらにできない実験に携わるセクションがあることは、施設内でも、かぎられた人間だけが知ることだった。

『──彼女が？』

送られてきた監視カメラの画像で少女の姿をたしかめると、電話口の人物は言った。

モニターに映った少女は狭い個室に収容されていた。検査用の着衣で、マットレスの上に坐って、うずくまっている。

「そうです」
　日本人スタッフが答えた。国際電話だ。
『たしかに私の名前を出したの？』
「ええ」日本人スタッフは答えた。「ただ……」
『？』
「教授、と。教授に会わせろと言っています」
　スタッフは困惑気味だった。
　数日前のことだったという。深夜、山奥の施設にひとりで現れた少女を、最初に見つけたのはゲートの守衛だった。呼びとがめると、東京から電車で来たのだという。最寄り駅から施設まで、歩きなら数時間はかかっただろう。迷子であるとは思えない。少女は目的があって施設を訪れた。
　スタッフは、白人の守衛と電話を替わった。
「おひさしぶりです。おめでとうございます、いつ教授になられたんですか」
『あいにくと、まだ』
　守衛のジョークに、電話口の人物は苦笑いをかえした。
「で、少女の所持品ですが……」
　守衛の手元にはチャック袋に入れた品物が並んでいた。

数千円の所持金、地図、キャラメルの箱……別の袋には拳銃が入っていた。これらの画像もあらかじめ送ってある。

『銃……』

「それを持っていなければ、警察に連絡して終わりでしたが」

守衛は状況を説明した。

「――彼女はゲートに歩みよると、まず、あなたの名前を出しました。約束がある、会いに来たと」

だが、彼女が会いに来たという相手は施設にはいなかった。

しかし、たしかに施設と関係がある人物ではあった。その人物はアメリカにいたのだ。

「私が彼女をなだめながら警察に連絡しようとすると、彼女は、拳銃を抜いて私にむけました。脅したのです」

『オモチャだとは思わなかった？』

「いいえ、本物に見えました。夜でしたし……構えも堂に入っていたので」

守衛は制服の上からでもわかる鍛えられた体をしていた。半袖シャツの腕の見える場所に、コミックヒーロー風の天使と思しき絵柄がのぞいている。いまは守衛として契約しているが、彼が元軍人であろうことは刺青（いれずみ）に添えた文句から推し量れた。

少女は、拳銃で牽制（けんせい）しながら入り口のゲートを突破すると、まっすぐ、この別棟にむかったのだという。まるで施設に来たことがあるかのように、迷いなく。

『私に会うために……？』
「はい。あなたの名前と〝カミサマ〟を交互に叫びながら」
最後は守衛が少女を確保した。いまは別棟の一室に閉じこめてある。
少女の要求は、カミサマに会わせろ、教授に会わせろと——その一点張りだった。
「——私はカミサマの子だ。教授と約束がある、と」
『神様（GOD）……カミサマ（kamisama）……教授……』
電話口の人物は、なんともいえない感じで息をついた。
まだ教授になってはいない。けれども、それをめざしてはいた。施設にかかわる人物で、少女が面会を求めたという名前の人物はひとりしかいないはずだ。そして、その人物が、とある組織に所属しており施設に非正規にかかわっていることを知る者となると、極めてかぎられた。
「この拳銃（グロック）ですが……奇妙です」
守衛は拳銃を入れたチャック袋を手にとった。
グロック17、弾は9ミリパラベラム、弾倉は17＋1発。子供が使うには大きすぎる銃だ。樹脂製の銃身は、ずいぶん劣化しているように見える。
『と、いうと？』
守衛の話では、グロック17は何度かモデルチェンジしているが、そのどれとも微妙に異なるのだという。

　とにかく、この日本で、平然と銃を構える10歳くらいの少女というのは、それだけで奇妙な存在ではあった。だから念のために、少女が面会を求めた人物に、こうして連絡がとられた。
『――と、言われてもね』
　どうにも反応のしようがない。
「やはり心あたりは、ありませんか」
『彼女の名前……ええと』
「Kagari……椎名（しいな）かがり、と」
『………』電話口の人物は答えた。『記憶にない』
　頭のおかしな子供が、わけのわからないことを言っている。ひっかかることと言えば、名前を出されたことだったが……。
「話してみますか？　電話はつなげますが」
『彼女の健康状態は』
「問題ありません。やや栄養失調でしたが」
　メディカルチェックの結果からは、もともと貧しい暮らしをしていたと思われた。
『言葉は？　日本人？』
「そのようですが、照会しようにも身元がわかるものがなく」
『……なにも？』

「先ほどの所持品と、衣服のほかには、おもちゃのキーホルダーだけでした。それをとりあげようとすると暴れて手がつけられなくなるので、持たせたままにしています」

　わかることは10歳くらいの日本語を話す少女であることだけ。

『身元不明……』

　電話口の人物は、さほど気がすすまない様子だったが電話をつなげるように言った。

　監視モニターのなかで、少女が、ふと天井――カメラを見あげた。スピーカーのノイズに反応したようだ。

『コンニチワ』電話口の人物は拙い日本語で語りかけた。『カガリ、ちゃん』

　すると問題の少女は、「飛びつかんばかりの勢いで天井のカメラにくいついた。

「カミサマ!?　カミサマでしょ!」

『…………』

「声でわかる!　かがり、ちゃんと、ここに来たよ!　ちゃんと言われたこと守ったの!」

　カメラにむかってまくしたてる。

『……すまないけど、私は……知らない。カミサマちがう。どこかで会った?』

「会ったよ!　あ……ううん私は会ったけど、きょうじゅは、まだ会ってないのか……」

　少女は、なにか勝手に納得したようになった。

『…………?　どういうこと』

「だって私は２０３６年から来たんだから！　私が会っているのは未来のきょうじゅで……私、未来ではうまくできなかったけど！　でも、ちゃんとできたんだよ！　タイムマシンで過去を変えようとしている――」

そこで少女との話は打ち切られた。

いくら声をあげても反応がなくなり、通話が切れたことを察したのか、モニターのなかで少女は叫び、暴れはじめる。

『…………』

白けた空気が漂う。

守衛は日本人スタッフと顔を見あわせると、ひどくバツがわるそうに頭を掻いた。

「彼女はタイムトラベラーだったようです。それは私も、はじめて聞きました」

『……あとは任せても？』

「はい。お手間をとらせました。あとは警察に――」

バカバカしい――という言葉を、全員がのみこんだ。

『ではなく』

「？」

『身元不明であれば、なにか使い道も』

電話口の人物は、みなまでは言わなかった。守衛は無言で了解した。

モニターのなかで、かがりはカミサマの名を叫びつづける。
喉が破れるほど声を嗄らしても、未来からの訴えが届くことはなかった。

〈つづく〉



あとがき

ゲーム『STEINS; GATE 0』(２０１５年発売) は想定科学ADV『STEINS; GATE』の正統続編です。本作はそのノベライズとして企画されました。

……では、あるのですが。

ファンの方々には周知かと思いますが、『ゼロ』には原案となる小説『閉時曲線のエピグラフ』『永劫回帰のパンドラ』『無限遠点のアルタイル』(企画・原作：志倉千代丸、著：たきもとまさし、監修：林直孝)、ドラマCD『無限遠点のアークライト』が存在します。ゲームのトゥルーエンドをノベライズ化することは意味をなしません。前述のβ小説３部作では描かれていない『亡失流転のソリチュード』からの、ゲームオリジナルルートの分岐を題材とすることになりました。

本作は、前作クライマックスのその＊分間に起きたはずのことを、果てしなく広げた「入れ子構造」の物語です。本書を手にとられる際には、前作『STEINS; GATE』のシナリオにふれていただくことを強くお勧めするものです。

筆者はゲーム制作にはかかわっておりません。このお仕事を受けたころは、ちょうどヨドバシカメラで『ゼロ』のPS Vita版を購入していました。前回の『負荷領域のデジャヴ』同様、原作様にはぶしつけな

質問状をぶつけ、回答いただいた内容は作中にフィードバックしました。監修はいただいておりますが、読者のみなさまにはアトラクタフィールド理論のなかで（以下文字数）。

それでは下巻につづきます。

2018年1月31日　浜崎達也（はまざきたつや）


「ならばもう一度言おう、
我が名は――」
狂気のマッドサイエンティスト、遂に復活！？
「STEINS;GATE0
-シュタインズ・ゲート ゼロ- 盟誓のリナシメント 下」
2018年9月1日発売!!

カバーイラスト／huke
口絵・本文イラスト／huke　池田靖宏（MAGES.）
カバーデザイン／木村デザイン・ラボ

STEINS;GATE 0-シュタインズ・ゲート ゼロ-

亡失流転(ぼうしつるてん)のソリチュード 上

原作　志倉千代丸(しくらちよまる)／MAGES.
著　浜崎達也(はまざきたつや)

2018年8月1日　発行

本電子書籍は下記にもとづいて制作しました

角川スニーカー文庫『STEINS;GATE 0-シュタインズ・ゲート ゼロ-　亡失流転のソリチュード 上』
2018年8月1日　初版発行

発行者　三坂泰二
発行　株式会社KADOKAWA

KADOKAWA　カスタマーサポート
［WEB］https://www.kadokawa.co.jp/
（「お問い合わせ」へお進みください）

BOOK☆WALKER